

靈界物語 第一三卷 如意寶珠 子の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十三卷』愛善世界社

1995(平成07)年08月08日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

モノログ

凡例 はんれい

總説 そうせつ

第一篇

勝利光榮 しょうりくわうえい

第一章

言靈開 ことたまひらき〔五二七〕

第二章

波斯の海 フサ うみ〔五二八〕

第三章

波の音 なみ おと〔五二九〕

第四章

夢の幕 ゆめ まく〔五三〇〕

第五章

同志打 どうしうち〔五三一〕

第六章

逆轉 ぎやくてん〔五三二〕

第二篇

洗禮旅行 せんれいりよかう

第七章 布留野原ふるのほら〔五三三〕

第八章 醜の窟しこ いはち〔五三四〕

第九章 火の鼠ひ ねずみ〔五三五〕

第三篇 探險奇聞たんけん きぶん

第一〇章 巖窟がんくつ〔五三六〕

第十一章 怪しあやの女をんな〔五三七〕

第十二章 陷おとし穽あな〔五三八〕

第十三章 上天丸じゃつてんまる〔五三九〕

第四篇 奇窟怪巖きくつくわいがん

第一四章 蛙船かへるふね〔五四〇〕

第一五章 蓮花開れんくわかい〔五四一〕

第一六章 玉遊たまあそび〔五四二〕

第一七章 臥龍姫ぐわりようひめ〔五四三〕

第一八章 石門開いはとびらき〔五四四〕

第一九章 馳走の幕ちそうまく〔五四五〕

第二〇章 宣替のりかへ〔五四六〕

第二一章 本靈ほんれい〔五四七〕

第五篇 膝栗毛ひざくりげ

第二二章 高加索詣コーカスマゐり〔五四八〕

第二三章 和解わかい〔五四九〕

第二四章 大活躍だいくわつやく〔五五〇〕

~~~~~

モノログ

この靈界物語は、全巻を通じて三大潮流が不斷に幹流し、時々大小の渦巻が起つて居りますが、何分にも大編著でありますから、一冊や二冊位拾ひ讀みを爲たぐらゐでは、到底その真相を捕捉する事は出来ませぬ。先づ全巻を讀了された上でなければ、如何なる批判も加へる事は出来ない様に成つて居ります。先づ我身魂を宇宙外に置き、無我無心の境地に立つて本書に抱含されたる大精神を見極めて貰ひ度いものであります。

讀者の中には靈界物語もマンザラ捨てたものではないが、天地の剖判だとか、神示の宇宙だとか、常世會議だとか、人間の元祖論の如きは折角の神著をして無價値たらしむるものだ、靈界物語も右様の脱線的文章さへ削除すれば、時代遅れ

の拙劣な小説として見るべきものに成るだらうと、注意を與へて呉れた人もあり  
ました。又中には靈界物語の中の脱線的文章は、口述者に頑迷不靈の惡靈が憑依  
して喋舌り立てた時の作物だから筆録者に於て之を取捨鹽梅して發表すると宜い  
のだが、何を謂つても絶對的服従を以て最大の善事と誤解して居る迷信家だから、  
薩張仕末に了へない、小波山人でも呼んで來て訂正させたらおトギ話位には成る  
だらうと、コボして居る人々もあつたさうです。口述者としても合點の行き兼る  
點が多少ないでも無いが、何と言つても惟神に任して少しも人意を加へない、神  
の言葉その儘を寫し出すのですから、この點も篤とお考へを願ひたいものです。  
仁慈無限なる神様の方より、天地間の萬物を御覽に成つた時は、一切の神人禽獸  
蟲魚草木に至るまで、一として善ならざるは無く愛ならざるは無いのであります。  
只人間としての行動の上にて、誤解より生ずる諸多の罪惡が不知不識の間に發  
生して其れが邪氣となり、天地間を汚濁し曇らせ、自ら神を汚し道を破り、自業  
自得的に災禍を招くに至るものであります。善惡不二、正邪一如、顯幽一致の眞  
諦は、この神著に依つて明白に成る事と確信する次第であります。この物語は凡



て宇宙精神の一斑を説示したものであります。大病人などが枕頭にてこの物語を  
読み聞かされ、即座に病氣の全快する位は何でも無い事實であります、之を見て  
も人間の頭腦の營養物たる事が判ります。大本の大神は、この書に依つて感得  
さるべきものでありますから、大本信徒に取つては最も必要な羅針盤なるのみな  
らず、洋の東西を問はず、人種の如何を論ぜず、修身齊家の基本的教訓書ともな  
り、大にしては治國平天下の軌範たるべき神書たる事を信ずるのであります。大  
本信徒諸氏よ、變性男子だとか、變性女子だとかの言句に跼蹐せず、凡ての心の  
障壁を撤廢し、虚心坦懷以て本書に包含する所の五味の眞相を闡開されむことを  
希望する次第であります。

斯く誌す時しも萬壽苑瑞祥閣の上空に二羽の鴻鶴ゆるやかに飛揚しつつありし  
が、暫くありて大公孫樹に一羽、堀端の松樹の上に一羽留まりて羽根を休め、終  
には竹林の中にその瑞姿を隠しました。丹波の國にて鶴を見ると云ふ事は、數十  
年來あまり聞かぬことであつて、大本瑞祥會に對する何かの神示慶徴なるべしと、  
役員等の口々の評定面白く、記念のため一筆茲に附記しておきます。

大正十一年九月二十日 舊七月二十九日 午前十一時

王仁識

凡例

一、本巻の口繪の一幅は、伊豆湯ヶ島湯本館に於ける瑞月聖師の靈界物語御口述の状況です。瑞月聖師には、去る八月三日綾部を御出發、伊豆湯ヶ島へ向はれ其處に御滞在になり、九月一日御歸綾になられました。その間僅か廿日の時日で第二十八巻より第三十三巻までの御口述を終わられました。本巻以後數巻に亘つて、一枚づつ伊豆湯ヶ島に於ける記念撮影のお寫眞を掲げます。

大正十一年九月

編者識

總説

瑞祥東海の天に霽靄き、金鳥皇國の神園に輝く。天孫降臨以來茲に幾萬の星霜を數へ大希望と大光明とは、實に六千萬同胞の身魂に充滿せり。顧みれば天地初發の時、大地球の未だ凝固せざるに當り、天神まづ我國祖に世界肇國の大任を命じて曰く

「此ただよへる地球を修理固成せよ」

と。我祖先神勅を奉じて先づ世界の中心として、我神國を修理固成せられたり。茲に於て乎萬國成る。由來日本民族は神勅を奉じて以て祖先の志を繼ぎ、天の下四方の國を安國と平けく治めむと、靜に神洲の仙園に修養年を重ぬること幾萬歳、漸く其潛勢力を蓄積し、曩には東洋文化の精を吸収し盡し、今また泰西文明を集めたり。

吾等神洲の神民は、實に世界文化の精粹を一身に集めて、之を消化し之を精鍊し、徐に天祖の遺訓及び父母祖先の志を發揮し、以て世界的文明建設の大業を爲すべき一大天職を荷へり。見よ東太平洋を隔てて亞米利加に對し、北支露を通じて歐羅巴の諸列強に連なる。世界海陸交通の軌道は、日々我神洲に向つて萬邦の

これに朝宗するものの如し。嗚呼日本國民たる者、過去の歴史に稽へ、又現在の趨勢に徴しなば、建國の大精神が世界人類のために建設せられたるを知るに足らむ。されば現今の世は、正に國民が祖先の大理想を實行する第一歩のみ。斯る大意義を有する大正の聖代に當りては豫め大に用意する所なかる可からず、吾人は大本開祖の神訓なる

「お照しは一體、七王も八王も王があれば、世界に苦説が絶えぬから、一つの王で治めるぞよ。日本は神國、神が出て働くぞよ。日本の人民用意をなされよ」この活教を遵奉すると共に、天啓の益々現代民心に必要缺く可からざるを深く信ずる次第なり。

### (一) 神旗の由來

大本十曜神旗の義は、専ら日本の國體を管く世に知らしめ、日本魂の根本を培養せむが爲に、開祖開教の趣旨に則りて考案せしものにして、上古天照大御神が

天の岩戸に隠れ給へる際、天之宇受賣命が歌ひ給へる天の數歌に則りしものなり。  
則ち一より十に至る十球より組織して十曜の神旗と稱するなり。

第一球は正上に位し宇宙の大本たる渾沌雞子の色となし、

第二球は白色とし、

第三球は黒色を以て、宇宙の實相たる眞如を開發して、陰陽二元となれるに形

造りしものなり。而して、二元感合して、森羅萬象を生ずるの理由より、四より

十までを七元色に分別して日月火水木金土の七曜に配し、なほ全球を神統に配し

奉りて、我國體の眞相を知らしめむとするものなり。

假りに十球の配別を色別、數別、神統別にて記せば、

色別 數別 神統別

卵 靈 一 天之御中主大神

白 力 二 高皇産靈大神、神皇産靈大神

黒 體 三 國常立尊、伊奘那岐大神、伊奘那美大神

赤 世 四 天照大御神

|        |      |      |                                       |     |                     |
|--------|------|------|---------------------------------------|-----|---------------------|
| 紫      | 藍    | 青    | 緑                                     | 黄   | 橙                   |
| 足      | 凝    | 彌    | 生 <small>な</small> 成 <small>な</small> | 萌   | 出 <small>いっ</small> |
| 十      | 九    | 八    | 七                                     | 六   | 五                   |
| 大本皇大御神 | 今上天皇 | 神武天皇 | 二二岐尊                                  | 吾勝尊 | 素盞鳴尊                |

色別しきべつ

神旗十曜の色別は、光學上より色別したるものにして、正上の第一球を卵色と爲したるは、天地未剖の前に於ける混沌たる鷄子の色を採り、以て宇宙開發前の一いち元げん眞しん如にを形造りしもの也。恰も光學上に於ける卵色らんしよくが各色の光線一様に集まりて物體に吸收されたる時に生ずる色にして何色とも分明せざるは、なほ宇宙眞象が萬有の終始を爲し、統一を保有せるを以て、如此定めたるなり。また第二球を

白色第三球を黒色と爲したるは、天地剖判の始期、大極動きて陰陽を生じたるに  
 形造りしものにして、恰も光線が全く物體に吸収せられずして反射する時は白色  
 を生じ、反對に全く吸収せらるる時は黒色を生じ二元相交はりて下の七元色より  
 無数の色を生ずるに至るは、なほ陰陽其性全く相反して而も親しく交はる時は森  
 羅萬象を生ずるが如きものあるを以て之を執り斯く定めたり。以下の七元色は順  
 序上の説明に依りたるものにして、光線の反射さるる事多ければ多きだけ則ち、  
 白、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、黒となり、吸収さるること多ければ多きだけ  
 即ち漸次、黒、紫、藍、青、緑、黄、橙、赤、白に還る、なほ萬有の生滅變化息  
 ざるに同じ。而して萬色の本は黒白の二色にして、二色を統一するものは卵色な  
 り。これ十曜色別の理由とする所なり。

## 數別

數別は天の數歌に則れるものなり。天の數歌は天之宇受賣命に始まり、後世に

到りては鎮魂祭の際に、猿女の君に擬したる巫女が受氣槽を伏せて、其上に立ち  
鉾を槽に衝立て此歌を謠ひ、以て天皇の御壽命長久を祈りしものなり。國語にて  
靈妙なることを「ひ」と云ひ、「と」は敏捷なる活氣鋭きを云ふ。宇宙の本體は  
靈妙にして活氣の最たるもの、故に之れを「ひと」と云ひ一と數ふ。本體の靈妙  
活氣を他より之を見れば「力」なり。力に依つて變化す「ふ」は浮出沸騰の義  
「た」は漂ひ動くの義あり、則ち「ふた」は宇宙の本體靈機の力に依りて始めて  
開發す、故に之を二となす。本體活動して靈機の凝固するもの之れ物體なり。物  
體は「み」なり、また實なり、充るの意あり、これを三となす。この靈力體なる  
三大要素ありて始めて爰に世（四）、出（五）と數ふ、動物植物蔚然として萌る  
を（六）と數へ、萬有生（七）彌（八）凝りて（九）人世の事足（十）と本歌  
の意義を以て十曜の神旗を作成したるもの也。

我國語に於ける基數は、天地開闢人世肇出の沿革を語るものなれば、大本が此  
十曜を組成して神旗と爲し、この天の數歌に則りしも不知不識の間に宇宙進化の  
理法より肇國の精神立教の主旨を晉く世人に教へむが爲なり。



## 神統別

神別に就て略解せむに、先づ宇宙の本體之を人格化して、天之御中主神と稱し奉る。宇宙の活動力之を人格化して高皇産靈、神皇産靈の神と稱し奉る。渾沌たる無始の始めに於て三神造化の首を爲し、二神夫婦の道を開き給ひて、國土山川を生み、日月星辰を生み、風雨寒暑を生み草木、動物、人類を生み給へり。かくて我肇國の始めに當つて、天神長く統を垂れ給ひ、連綿として今日に及べるなり。然れば

### 明治天皇の大勅語に

皇祖皇宗國を肇むる事宏遠に徳を樹つる事深厚なり

と宣ひし所以なり。吾人日本國民は此深厚なる神徳に依つて、陛下の民と生れ、陛下は吾等が宗家の嫡子に坐し、今上に在して、下は吾等を治め給ふは、吾等の大祖先が無始際より延長して吾等を愛護し給ふものにして、吾等が報本反始の誠を盡すは、一に忠君愛國に在る事を信仰し、以て天賦の職責を全うし、人生本來

の面目を達し、宇宙造化の功に資し奉るを得るは、實に無上無比の至大幸福と謂ふべし。吾人は悠々たる天地の閒之を以て生き、之を以て死し、此に住して安心立命し、此境に入りて天國樂園の眞樂を稟く。大本が十曜を組成して神旗と定めたるは、實にこの精神に基きしものなり。正上の第一球を一と爲し正中の一大球を十と爲したるも、大本の神旗なる故に大本皇大神を正中に配したる所以なり。

(二) 靈力體

神徳の廣大無邊なる、人心小智の能く窺知すべき所にあらず。然りと雖も、吾人靜に天地萬有の燦然として、次序あるを觀察し、また活物の状態に付て仔細に視察するに於て明かに宇宙の靈力體の運用妙機を覺知し以て神の斯世に嚴臨し玉ふこと、疑を容るの餘地無きに至らしむ。

神の默示は則ち吾俯仰觀察する宇宙の靈、力、體の三大を以てす。

一、天地の眞象を觀察して眞神の體を思考す可し。

一、萬有の運化の毫差無きを視て眞神の力を思考すべし。

一、活物の心性を覺悟して眞神の靈魂を思考すべし。

以上の活經典あり。眞神の眞神たる故由を知る。何故人爲の書卷を學習するを用ゐむや。唯不變不易たる眞鑑實理ある而已。

天帝は唯一眞神にして天の御中主神と稱す。宇宙の神光を高皇産靈と曰ひ、神温を神皇産靈と曰ふ。古事記に曰く

天地初發之時、於高天原成坐神名、天御中主神、次高皇産巢日神、次神皇産巢日神、此三柱神者竝獨神成坐而、隱身也

天帝は宇宙萬有の大元靈にして幽之幽に坐し、聖眼視る能はず賢口語る能はざる隱身たり。また神光はいはゆる天帝の色にして神温は即ち天帝の温なり。共に

造化生成の妙機にして獨立不倚の神徳なり。神は宇宙萬有の外に有り、萬有の中に在り、故に之を宇宙の大精神と謂ふ。

大精神の體たるや至大無外、至小無内、若無所在、若無不在なり。聖眼之を視る能はず、賢口之を語る能はず。故に皇典にいはゆる隱身也は即ち神の義なり。

宜なるかなその靈々妙々の神機。天帝は無始無終なり、既に無始無終の力と無始無終の體とを以て無始無終の萬物を造る。その功また無始無終なり。天帝は勇、智、愛、親を以て魂となし、動、靜、解、凝、引、弛、分、合を以て力となし、剛、柔、流を以て體を爲す。

全靈

全靈は荒魂、和魂、奇魂、幸魂、の四魂也。而して荒魂は神勇、和魂は神親、奇魂は神智、幸魂は神愛なり。乃ち所謂靈魂にして、直靈なるもの之を主宰す。俗學不識荒和を以て心の體となし奇幸を以て心の用となし、直靈の何物たるを知らず、豈悲しまざる可けむ哉。

全體

剛、柔、流の三物是れ上帝の全體なり。而して流體を生魂と唱へ葦芽彦遅と稱し、剛體を玉留魂と唱へ常立と稱し、柔體を足魂と唱へ、豊雲野と稱す。剛體は鑛物の本質なり、柔體は植物の本質なり、流體は動物の本質なり。スピノーザ曰く、本質とは獨立して依倚する所なきものの謂なり。更に之を言へば本質とは吾人之を理會するに於て一も他の物と比照するを須ひざるもの是なりと、至言と謂ふべし。

### 全體の圖解

#### < 圖表省略 >

### 全力

動、靜、解、凝、引、弛、分、合以上八力これを上帝の全力と稱す。而して神

典にては動力を大戸地と謂ひ、靜力を大戸邊と謂ひ、解力を宇比地根と謂ひ、凝力を須比地根と謂ひ、引力を活久比と謂ひ、弛力を角久比と謂ひ、合力を面足と謂ひ、分力を惶根と謂ふ。皆日本各祖の所名なり。

### 全力の圖解

#### < 圖表省略 >

靈、力、體合一したるを上帝と曰ふ。眞神と謂ふも上帝と曰ふも皆天之御中主大神の別稱なり、左圖を見て知る可し。

### 全智全能乃眞神

#### < 圖表省略 >

第一篇 勝利光榮しよつりくわうえい

第一章 言靈開ことたまひらき〔五二七〕

天あまの岩戸いはと

故かれ須す佐さ之の男をの大神おほかみは

現あらはれ出いでて手た弱よわ女めを

勝かてり勝かてりと勝かち荒さびに

溝みぞ埋うめ樋ひ放はなち頻しき蒔まきし

荒すさびに暴あらび給たまひけり

咎とがめ給たまはず屎くそ如なすは

清せい明めい無む垢くの吾あが御み魂たま

生うみしは乃すなはち吾あれ勝かちぬ

神かむ御み營つく田だの畔あを放はなち

大おほ嘗にへ殿どのに屎くそ散まりて

故かれ然しかすれど皇すめ神かみは

那な勢せの命みことの酒さけの所わ爲ざ

屎くそには非あらで吐はける也なり  
地ところ所あた惜おもらし思おもふため  
神みこころ心たひら平やすに安やすらかに  
言こと解とき給たまへど荒すさび行わざ

田たの畔あを放はなち溝みぞ埋うめは  
那な勢せの命みことの罪つみならじ  
直なほ日ひに見みな直ほし詔のり直なほし  
未いまだ止やまらずに轉うたてあり。

若わか日ひ女め機はた屋やに坐ましま  
機はた屋やの棟むねを取とり毀こぼち  
墜おとし入いるれば神み衣そ織おり女め  
終つひに敢あへなく身み亡うせけり  
天あまの岩いは屋や戸ど閉さし立たてて  
とよあし原はらの中なか津つ國くに  
黒あやめ白わかも判わかぬ世よと成なりぬ  
五さつき月つきの蠅はへの沸わく如ごとく

神かむ御み衣そ織おらしめ給たまふ時とき  
天あめの班ふち駒こま逆さか剥はて  
驚おどろき秀ほ處とを梭ひに突つきて  
ここに皇すめ神かみ見み畏かしこみ  
隠かくりたまへば天あまの原はら  
常とこよ夜よとなりて皆みな暗くらく  
曲まが津つの神かみの音おとなひは  
萬よろづの妖わざ害はひみな起おこる。



ももちよろづ  
百千萬のかみがみは

ここに議會は開かれて

思ひ議りて常夜なる

安の河原の石を採り

鍛冶眞浦を求き寄せて

八咫の鏡を作らしめ

八坂の曲玉造らしめ

命を呼びて香具山の

天の羽々迦を切採りて

天の眞榊根掘して

八咫の鏡を中津枝に

祭祀の御式具備りぬ

故太玉のみことには

安の河原に神集ひ

議長に思兼の神

長鳴鶏を鳴かして

天の香山の鐵を採り

石凝姥のみことには

玉の御祖の命には

天の兒屋根や太玉の

男鹿の肩を打抜きて

占へ眞叶はしめ給ひ

上枝に八坂の玉を懸け

下枝に和帛を取垂て

是れ顯齋の始めなり。

太幣帛を採り持たし

天の兒屋根の命には

太祝詞ごと詔曰し

天の手力男のかみは

窟戸のわきに隠り立ち

あめの宇受賣命には

天の日蔭を手襷とし

天の眞拆をかづらとし

竹葉を手草に結占て

窟戸の前に槽伏せて

踏轟かしかしこくも

神人感合の神懸り

至玄至妙の幽齋を

行ひ給ひし尊さよ

胸乳搔出で裳緒をば

番登に忍垂れ笑ひ鼻

命の俳優に天地も

動りて神等勇み立つ

皇神怪しと思召して

窟戸を細目に開きまし

御戸の内より詔賜はく

吾いま岩窟戸に籠りなば

高天原も皆暗く

あし原の國暗けむと

思ひ居たるに何故に

宇受賣の命は樂びしぞ

百千よろづの神等も

歌舞音楽に耽るやと

怪しみ給へば智慧深き

宇受賣命の答けらく  
尊き神ぞ現れ坐り  
皇大神にいや勝り  
夫れゆゑ歡ぎ遊ぶなり。

斯く宣る間に二柱  
八咫の鏡をさし出て

皇大神に奉る  
いよいよ怪しと思召て

御戸より出て臨み坐す  
その時戸わきに隠り立ち

天の手力男の神は  
御手持曳き出し奉り

斯れ太玉の命には  
尻久米繩を御後へに

引張渡し此處よりは  
内に勿還り入りましそ

言葉穩いに願ひけり  
大神御心平かに

御戸出でませば久方の  
高天原も葦原の

中津御國も自ら  
隈なく光り冴え渡り

萬の神々いさみ立ち  
天晴れ地晴れ面白や

あな尊しや佐夜計弘計  
目出度窟戸は開き梟

是れ顯齋の御徳にて

また幽齋の賜ぞ。

仰ぎ敬まへ神國に

生を享けたる民草よ

天津御神の神勅以て

直靈の御魂現はれて

至粹至純の神の美智

顯齋幽齋鎮魂の

尊き神業を説明し

地上億兆蒼生に

向ふ所を覺すなり

神の御恵み君の恩

神國を思ふ正人は

固く守れや神の道。

鎮魂

豊葦原の千五百あき

みづほの國の神の苑

榮え久しき常磐木の  
七せん餘萬の同胞は  
外に優れて比類無き  
究め覺らで有るべきや  
天津御祖のさだめてし  
國は日の本ばかりなり  
二尊あらはれ坐々て  
實踐ありて國を産み  
木草の神まで生給ひ  
また月夜見の大神や  
現出坐し目出度さよ  
今迄御子を生みつれど  
吁尊しや貴の御子  
ただちに天に參上り

松の御國に生れたる  
日出るくにの國體の  
奇すしく尊き理由を  
萬世變らぬ一すぢの  
皇大君の知ろしめす  
神代の昔那岐那美の  
修理固成の大御神勅  
青人草や山川や  
つひに天照大御神  
速須佐之男の大御神  
皇神甚くよろこばし  
是に勝りし兒はなし  
生み得てけりと勇み立ち  
皇産靈の神の太占に

トへ賜ひて詔賜はく  
高天原をしろしめせ  
夜の食國を守りませ  
大海原を知らせよと  
各自々々におす國を

あが御兒天照大神は  
また月夜見の大神は  
速須佐之男の大神は  
天津御祖の御言もて  
持別依さし給ひけり。

茲に大神おんくびに  
五百津御魂美須麻琉の  
高天原を知らさねと  
故その御頸珠の名を  
これ其魂を取憑けて  
たらしめなむと神定め  
是鎮魂のはじめにて

まかせる八坂曲玉の  
玉緒母由良に取揺し  
日の大神に賜ひけり  
御倉棚のかみとなす  
日の神國の主宰神  
玉ひし畏き御術なり  
治國の道の要なり。

天照し坐すおほみかみ  
二二岐の命に天の下  
其みしるしと畏くも  
この方世々の天皇は  
即位の御制と爲し給ふ  
かくも尊き縁由ある  
臺灣千島の果てまでも  
あさな夕なに奉體し

その神業を受け賜ひ  
統治の權を譲らるる  
三種の神器を賜はりし  
大御心をこころとし  
これ鎮魂の御徳なり  
御國に生ひし國民は  
尊奉崇敬おこたらず  
神の稜威を仰ぐべし。

そも鎮魂の神わざは  
顯幽不二の御法にて  
畏き日嗣の天皇の  
下萬民にいたるまで  
然のみならず斯の道は

天津御祖の定めてし  
かみは一天萬乗の  
祭政一致の大道より  
修身齊家の基本なり  
無形無聲の靈界を

闡明するの基礎ぞかし  
異しき卑しき蟹が行く  
束のあひだも神術に  
天にむかひて一向に  
おのが靈魂の活動を  
身も棚知らに鍛へかし  
國家多端のこの際に  
地球の上に輝かし  
千代萬代にたてよ人  
直靈の魂を經となし  
八洲の國に蟠まる  
進めや進めふるひ立て

神の御國に住む人は  
横邪の道をうち捨てて  
心を清め身をゆだね  
幽冥に心を通はせて  
伊豆の魂に神ならひ  
この正道を踏みしめて  
神洲男子のやまと魂  
天にもかはる功績を  
勇み進めやいざ進め  
嚴の魂を緯として  
曲津の軍の亡ぶまで  
醜の惡魔の失せる迄。



## 富士山

富士山は古來不盡山または不二山と書き、芙蓉の峰、福知ヶ嶺と稱し、天教山、扶桑山とも謂ひ、木花咲耶姫命の御神體とも云ひ、鳴澤ヶ嶽、二十山、秀穂山、山君ヶ嶽とも別稱され、この山の名義については、色々と古來の解説があれども何れも皆謬りなり。日本は古來言靈の幸はふ國と云ひ、只一つの小山にも山の活用を名に現はし居るなり。

【フジ】の【フ】は力なり。地球の中心より、金剛力を以て、火煙を噴出すを【フ】と云ふ。【ジ】は火脈の辻であり浸み出る言靈なり。

また【フジ】の靈返しは【ヒ】なり。【ヒ】は火なり、靈なり、日なり。故に富士の火山とも云ひ、靈峰とも稱へ、日本國の代表とも成り居るなり。今は木花冬籠りの状態で休火山なれども、何時發動して元の活火山に復するかも知れざる神山なり。猶ほ細かく調べれば【フ】の言靈は天中の常也、世界一切の活用を司る也、生の常也、忽ち往き忽ち來り、忽ち昇り忽ち降り、忽ち出で忽ち入り、進

退兼持ち火熱の合結となり、機臨の府となる也、八咫に照る也の大活用あるなり。

【ジ】の言靈は強く守る也、打ち固める也、辻立つ也、豫誓也の大活動なり。

【ヒ】の言靈は明かに通徹する也、日の結也、無不所照也、日也、晝也、顯幽皆貫徹する也、大慈大悲の極也、の形を照り顯はす也、悉皆歸伏而一致一和の意也。尊嚴也、の朝也、の壽也、三世照明也、等の活用あるなり。

以上の言靈活用を思考する時は、大日本國の表徴にして、神國と神民との最優最秀なる天職を發揮し、世界萬國を教へ救ふ神國天賦の本能を顯はせる、神靈の活用する神峰と云ふ事になるなり。彼の有名なる白扇倒懸東海天の句を始め、富士山に關する詩歌は随分澤山ありて、詩にも歌にも、句にも此富士山位詠まれたものは無かるべし。契沖の歌にも

富士がねは山の君にて高御座

空にかけたる雪の經笠

實に上品な歌にして、天皇の高御座の上に釣るす經笠の如くにて然も天空高く、

白皚々たる、純白の雪を戴き、群峰の上に屹として、一番高く峙え立ち居る富士山は實に山の中の君主なりといふ意味なり。

心あてに見し白雪はふもとにて

思はぬかたに霽るる富士ヶ嶺

あの邊が頂上かしら、雲に包まれて見えぬのかと、あせりあせり見る中に、雲が晴れると、ヤア何だアンナエライ高い雲表にニヨツキリと頂が現はれて居ると云つて茫然自失、今更にその高さに驚かされ、且つ崇高の感に撃たれて居る眞境を寫し出したる歌なり。

元朝に見るものにせむ富士の山

これは宗祇の作句なり。正月も近い目出度い元旦の見ものとして富士の山に越したものは無く、尊しと云ふの意味なり。萬葉集にも随分富士を賞めたる和歌が

澤山たくさんの載せられあるが、凡て此の富士山は日本國の崇高なる意義を代顯したる神峰なり。

東洋獨立玉芙蓉

萬古千秋不改容

清嶽鮮山朝揖處

五笏高聳此仙峰

以上の數篇は大正十年一月號の神靈界に所載したるものなり。其中神旗の由來、靈力體、天岩戸、鎮魂等の章は孰れも明治三十三年の王仁の舊作なるも、今また都合に依りここに再録するものなり。

(大正一一・三・一七 舊二・一九 王仁)

## 第二章 波斯の海 (五二八)

世は常暗となり果てて

山川どよみ草木枯れ

叢雲四方に塞がりて

黑白も分かぬ暗の夜を

隈なく照す朝日子の

日の出の別の神の御子

天教山に現れませる

木花姫の御教を

曲津の猛ぶ小亞細亞

噂に高きアーメニヤの

醜の魔神の巢くひたる

都の空を照さむと

神の御言を畏みて

天に坐す神地にます

神の教に眞名井河

目無堅間の船に乗り

西へ西へと印度洋

浪を渡りて鶴の島

鶴の港を後にして

波斯の海にぞ着きにける。

鶴の湊よりは、數十人の乗客が加はつた。黄泉島の沈没に依りて、波斯の海面は、俄に水量まさり、海邊の低地は殆ど沈没の厄に會ひたりと云ふ。

日の出丸より乗替へたる鶴山丸の船中には日の出別命を初め、ウラル教の宣傳

使數名これに乗込んで居る。晝とも夜とも區別の付かぬ薄暗い海面を、船脚遅く「なめくぢ」の如く進み行く。

甲「吾々は斯うやつて、ウラル教の宣傳使として龍宮の一つ島に渡り、殆ど三年になつた。併し乍ら一つ島の守護神なる飯依彦は、中々信神堅固な宣傳使であるから、吾々の折角の目的も、殆ど黄泉島のやうに水の泡と消えて了つた。アーメニヤへ歸つて、どう復命したら宜からうか、それ計りが心配になつて、乾を指して歸るのも、何とはなしに影の薄い様な氣分がするではないか」

乙「吾々はウラル教の宣傳使としての力限りベストを盡したのだから、この上何と言つたつて仕方がないではないか」

甲「仕方がないと云つた所で、敵國に使用して、君命を辱ると云ふ事は、人としてのあまり名譽でもあるまい。況んや特命を受けて、しかも吾々六人、東西南北より一つ島を包圍攻撃して、唯一人の飯依彦に、旗を捲いて、豫定の退却をすると云ふ事は、あまり立派な成功でもあるまい。こりや、何とかして一つの土産を持つて歸らなくては、ウラル彦様に對して申譯がないぢやないか」

丙「オイ岩彦、お前はアーメニヤを출立する時には、どうだつたい。岩より堅い  
岩彦が、言靈を以て黄泉島を瞬く間に、言向和すと、傍若無人に言擧し、非常に  
メートルを上げて居つたぢやないか、その時に吾輩が、貴様の不成功は俺の天眼  
通で明かにメートルと云つたのを覚えてるだろう」  
岩彦「ソナ死んだ子の年を算る様な事を言つて、愚癡るない。過越苦勞は、三  
五教ぢやないが、大々的禁物だ。よく考へて見よ、數百日の間、天の戸はビシヤ  
ツと閉つて、晝夜暗黒と云つてもよい位だ。日の出、日の入の區別も分らず、吾々  
がアーメニヤを出發した時は、朝は清鮮の氣漂ひ、東天には五色の幔幕が飾られ  
て、そこから金覆輪の太陽が現はれ、夕方になれば、瑪瑙の様な雲の連峰が西天  
に輝き、晝夜の區別も實に判然したものであつた。然るに一つ島に上陸した頃か  
ら、日々雲とも霧とも靄ともたへ方なき陰鬱なものが、天地を閉塞して、時を  
構はず地は震ひ、悪魔は出沒し、如何にウラル教の體主靈從の宣傳使でも、一歩  
否百歩を譲らねばならないと言ふ慘酷な世の中に、どうして完全な宣傳が出来る  
ものか、如何に智仁勇兼備の勇將でも時節の力には到底叶はない、ナア梅彦……

…  
斯く話す折しも、俄に吹き来る颯風の響、虎吟じ龍躍るが如く、激浪怒濤は白  
き鬢を揮つて、船體に噛みつき始めた、船は上下左右に怪しき物音を立て、動搖  
烈しく、浪と波との山嶽の谷間を、浮つ沈みつ、漂ひながら西北指して進み行く。  
暗の帳は下されて、黑白も分かぬ眞の暗、忽ち暗中より暴風怒濤の聲を壓して、  
宣傳歌が聞え來たりぬ。

☐ 神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

ウラルの彦やウラル姫 コーカス山に現はれて

この世を欺く神の宮 太敷立てて三柱の

皇大神を齋しは 昔の夢となりはてて

今は僅に美山彦 國照姫の曲神を

守護の神となぞらへ 常世の國に打渡り

隨從の神を海原の 浪に漂ふ一つ島



寶たからの島しまに出いで立たせ

限くまなくあさりてウラル教けう 山の尾上やまや川かはの瀬せを

敷しき弘ひろめむと村肝むらぎもの 心こころをつくしの甲斐かひもなく

黄泉よもつの島しまのその如ごとく 泡あわと消きえたる憐あはれさよ

高天原たかあまはらに現あれませる 神伊奘諾かむいざなぎの大神おほかみの

神言みことのままに花蓮草はなはぢす 教をしへを開ひらく天教山てんけうざんの

神かみの聖地せいちを後あとにして 日ひの出での御船みふねに身みを任まかせ

津輕海峽つがるかいけふ後あとにして 天あめの眞名井まなぬいの波なみを分わけ

やうやう茲ここに印度つぎの海うみ 深ふかき恵めぐみをかかぶりつ

名なさへ芽出度めでたき鶴つるの島しま 松まつの神代かみよに因ちなみたる

鶴つるの港みなとを船出ふなでして いよいよここに波斯灣ペルシヤわん

進すすみ來きたれる折柄をりからに 思おもひもかけぬウラル彦ひこ

神かみの教をしへの宣傳使せんでんし 岩彦梅彦いはひこうめひこあと四人よたり

如何いかなる神かみの經綸けいりんか 鶴山丸つるやままるの客きやくとなり

一蓮托生波の上いちれんたくしやうなみ うへ なみなみならぬ大神おほかみの

心の空は掻き曇るこころ そら か くも あゝ岩彦いはひこよ梅彦うめひこよ

天教山に現れませるてんけうざん あ 木花姫このはなひめの御教みをしへを

四方に傳ふる宣傳使よも つた せんでんし 日の出神ひ でのかみの分靈わけみたま

豊榮昇る朝日子とよさかのほ あさひこ 日の出ひ での別の神司わけ かむつかさ

愈いよいよフサの國指くにさして 進むすすもしらに退しりぞくも

はや白波しらなみのこの首途かどで 天津御空あまつみそらを眺ながむれば

墨すみを流ながせる如ごとくなり 大海原おほうなばらを眺ながむれば

泥どろを流ながせる如ごとくなる この浪なみの上へにめぐり合あふ

巖いづの靈みたまの宣傳使せんでんし 岩彦いはひこ梅彦うめひこ初はじめとし

此處ここに會あうたは優曇華うどんげの 花はな咲さく春はるの引合ひきあせ

皇大神すめおほかみの神言みこともて 日の出ひ での別わけが詳細まつぶさに

詔のる言靈ことたまのその呼吸いきに 汝なれが靈みたまを洗あらへかし

天真名井あめのまなぬに五十鈴いそすずの 言靈ことたま洗あらひ都牟刈つむがりの

太刀を清めて曲津見を  
躑え放らかし打きため

神の心に復りなば  
如何に浪風猛くとも

醜の猛びの荒くとも  
何か恐れむ神の國

あゝ岩彦よ梅彦よ  
心の雲霧吹拂ひ

天の岩の戸押開き  
直日に見直せ聞直せ

この世を紊す曲神の  
醜の言靈詔り直せ

この天地は國の祖  
國治立のしろしめす

珍の御國ぞ樂園ぞ  
神の御國に住む人の

いかで心を汚さむや  
瀬織津姫の大神に

汚穢も曲事も能く清め  
鹽の八百路の八潮路の

秋津の姫に許々多久の  
罪や穢を可々呑みて

曇りを晴らせ天地の  
神の心に叶へかし

あゝ惟神々々  
御靈幸倍坐世よ

嗚呼惟神々々  
御靈幸倍坐世よ

と歌ひ終るや、さしもに猛き暴風激浪も、拭ふが如くに静まり、海面は疊の如く、魚鱗の波を浮ぶるに至りけり。

船中の人々は、この聲に驚いて一言も發し得ず、日の出別命の神徳に驚嘆の目を睨るのみ。岩彦は小聲にて、

「オイ梅彦、音彦、龜彦、大變ぢやないか、エライ奴が乗つて居て、吾々に非常な鐵槌を喰はしよつたぢやないか、向ふは一人、此方は宣傳使の半打も居つて、

衆人環視の前でコンナ神力を見せられては、ウラル教も薩張り顔色なしだよ。ナントか一つ、復讐を行らなくては、失敗の上の失敗ぢやないか。日の出別とか云

ふ三五教の宣傳使が、フサの國へでも上つたが最後、あの勢でアーメニヤの神都へ進撃されようものなら大變だぞ」

龜彦「さうだなア、コラこの儘に放任して置く譯には行かない。お前は吾々一行の中での、チャーチャー（教師先生の意）だから、何とか良い御託宣でも宣示し

て呉れさうなものだ」

岩彦「譯も知らずに、燕の親方のやうにチャーチャ言ふものぢやないワ。マアこ

の先生せんせいの妙案奇策めうあんきさくを聴聞ちやうもんしろ」

龜彦かめひこ「ヘン、えらさうに仰有おつしやりますワイ、目玉めだまを白黒しろくろさしてその容子ようすは何なんだ。蟹かに

の様な泡あわを吹ふいて、大苦悶だいくもんのていたらしく、身魂みたまの基礎どだいがグラついて居ゐるから、ど

うして妙案奇策めうあんきさくが出るものかい。何分なにぶんに戦たたかひは、將しやうを選えらぶと云いつて、吾々われわれ萬卒ばんそつが

骨ほねを枯からしても、一將功成いつしやうこうれば未まだしもだが、貴様きさまの大將たいしやうは魂たましひに白蟻しろありが這入はいつて

ゐるから、統率とうそつその宜よろしきを得えず、萬卒骨ばんそつほねを枯からし、一將功いつしやうこうならず、一【しよう】

の恥はぢを曝さらして歸かへらねばならぬのだ。コンナ大將たいしやうに統率とうそつされて、どうして神業しんげふの完くわん

成せいが望のぞまれよう、バベルの塔たふぢやないが何時いつまでかかりても、成功せいこうする氣遣きづかひは

ない。ピサの塔たふのやうに斜はすかいになつて、何時いつピサリと倒たふれるか分わかつたものぢやない。

猫ねこに逐おはれた鼠ねずみのやうな面つらをして、アーメニヤに歸かへつた所ところでウラル彦ひこさまに「貴きさ

様何まなにをして居をつた」と、いきなり横よこつ面つらをピサの塔たふとお見舞みまひ申まをされ、これはこれ

は誠まことにハヤ恐れ入いりバベルの塔たふと、「たう】惑わく顔がほするのは目めに見みるやうだ。引ひか

れ者の小唄ものこつたの様なやうな、負惜まけをしみは止やめて、どうだ一層いつそうのこと、日ひの出別でわけの部ぶ下かとなつ

て三五教あななひけうに急轉直下きふてんちよくか、沈没ちんぼつしたらどうだらう」

岩彦「チト言靈を慎まぬか、船の上は縁起を祝ふものだ、沈没なぞと、氣分の悪い事を言うな。黄泉島ぢやあるまいし………」

梅彦「さうだ、龜彦の言ふ通り、あまりウラル教の神力がないのか、大將の畫策宜しきを得ないのか知らんが、コンナ馬鹿な目に會つた事はない。二つ目には時世調節ぢやと、岩彦は「いは」んすけれど、ソナ事はアーメニヤへ歸つては通うしない。どうだ、梅彦の外交的手腕を揮つて、日の出別の宣傳使に、今此處で交渉して見ようかい。交渉委員長になつて、どうしよう交渉と談判をやるのだナ

ア

岩彦「喧しいワイ」

梅彦「やかましからう、イヤ耳が痛からう、良い加減に言靈の停電がして欲しからう。アハ、ハ、ハ、ハ、」

岩彦「鮎に糞蠅が集つたやうに、本當に五月蠅い奴だ。さう云ふ事を喋くると、ウラル教の神様が立腹して、又もや暴風雨の御襲來だ。さういふ事は、神様の忌憚に觸れる、貴様の言行に對しては、飽くまで吾々は忌避的行動を取るのだ。何

ほど貴様が挑戦的態度を執つても、寛仁大度の權化とも言ふべき岩彦は、岩石として應ぜぬから、さう思つて幾許でも喋舌つたが宜からうよ。……ナンだその面は、最前からの時化で、半泣きになつて居るぢやないか、見つともない」

梅彦「半泣きになつて居るとは誰の事だい。貴様こそ率先して泣いて居るぢやないか。涙こそ滲して居らぬが、俺の天眼通から見れば唯々泣き面をソツト保留してる丈のものだよ、貴様に共鳴する者は、烏か、千鳥位なものだらう」

岩彦「馬鹿ツ、【いは】しておけば傍若無人の雑言無禮、了見せぬぞ」

龜彦「オイ梅公、行つた 行つた。ヨツシ ヨツシ……」

岩彦「オイ、犬と間違つちや困るよ」

梅彦「犬ぢやないか、ウラル教の番犬だ」

岩彦「【いぬ】も歸なぬもあつたものかい、吾々はアーメニヤへ【いぬ】より往

く所はないのぢや」

龜彦「免も角、ここで一つ思案せなくてはならぬ。三五教は唯一人、此方の宣傳使は半打も居るのだから、強行的態度に出でて、三五教の宣傳使を降服させるか、

但は吾々が柔かに出て、ウラル教を開城するか、二つに一つの決定を與へねばなるまい」

岩彦「岩より堅い岩彦は、如何なる難局に處しても、初心を曲げない。善惡共に、初心を貫徹するが、男子の本分だ。貴様、ソナ女々しい弱音を吹くならば、ア

メニヤへ歸つて、逐一盤古神王に奏聞するから、さう覺悟をせい」

龜彦「敗軍の將は兵を語らずだ、何の顔容あつて盤古神王に大失敗の一伍一什を奏聞することが出来るか、貴様は統率者を笠に着て、吾々五人の者を威喝する

のだな、今になつて何れほど威張つたところで、アルコールの脱けた甘酒の腐つ

たやうなものだ、鑑定人もなければ、飲手もなし、ソナ嚇しを喰ふ奴が、何處

にあるかい、あまり馬鹿にするなよ。それぞれ向ふに見えるはフサの國だ。船が

着くのは、モウ間もあるまい、この船の中で、一つ交渉を始めなくては、日の

出別が上陸したが最後、どうすることも出来やしない。問題を一括して、今此處

で秘密會議を開いて、和戦何れにか決せねばなるまいぞ」

又もや以前の如き暴風忽然として吹き來り、鶴山丸の運命は旦夕に迫り來たる。



嗚呼この結果は如何。

(大正一一・三・一六 舊二・一八 松村眞澄録)

### 第三章 波の音(五二九)

颶風は忽ち西北に變じ、鶴山丸は逆流して再び元來し海路に漂ひにける。

猛り狂ふ飛沫に、壽司詰になつた船中の人々は頭上より鹽水を浴び、誕生の釋迦像の様になつて了つた。ウラル教の宣傳使、音彦は猛り狂ふ海を眺めて、

それ見ろ、岩公が偉さうに大將面を振り廻し頑張るものだから、再び天道様の御機嫌を損ねて二度驚愕「しやつくり」な目に合ふのだよ。貴様の改心が足らぬ

から皆の者が御招伴をさされるのだ。御馳走の御招伴なら宜いが命からがら此通り、何時船は奈落の底に落ち込むか分らない危急存亡のこの場合だ。はやく改心

して日の出別命にお詫をせい。時化の景物に頭から鹽水を浴びせられて、辛い目

に合つて苦しむのは貴様計りぢやない、一同の迷惑だよ」

岩彦「改心せいと云つた處でこの頃は手元不如意で改心の原料が無いのだ。何う

なるも斯うなるも船のまにまに行く處まで行かな仕方がないわ」

音彦「音に名高い、波斯の荒海だ。都合よく何れの湊かに漂着すれば宜いが、海

底の龍宮へでもやられて見よ、何うする事も出来やしない」

岩彦「ソナナ取越苦勞はすな。寸善尺魔、この瞬間が吾々の自由意志を發揮する

時だ。一尺先の事が分るものか。それだからウラル教の宣傳歌に「一寸先は闇よ」

と云ふのだ。

「波よ騒げよ一寸先は闇よ、波の中から月が出る」

と云ふのだ。たとへ船が沈没して龍宮へ行つた處で淤藤山津見の様に暫らく雌伏

して居ると、待てば海路の風が吹く、そこへ日の出神が現はれて、吾々を助けて

呉れると云ふ段取だ。莫迦らしい、日の出別なんてソナナ偽者にこの尊い頭を安

賣して堪るか」

梅彦「オイオイ岩彦、お前がさう頑張る爲に一同の迷惑だ。現當利益を現はした

日の出別の宣傳使に兜を脱いで、今一度助けて貰つたら何うだ」

岩彦「三五教の宣傳歌ぢやないが、

「たとへ大地は沈むとも 誠の力は世を救ふ」

吾々はウラル教の宣傳使となつて誠一つを立て通して來たものだ。たとへウラル教が善にせよ惡にせよ、白鷺の子は白い、烏の子は黒いと定まつて居る。ウラル教が烏なら烏で宜い。身魂の因縁に依つて、烏に生れた者だから遽に白鷺にならうたつて、なれさうな事はない。下らぬ心配するよりも、宣傳歌でも歌つた方がよからう」

音彦「いくら云つてもこの大將は駄目だ。エ、仕方がない。一寸先は闇だから心残りのない様に持合せの酒でも飲んだらどうだい」

龜彦「下地は好きなり、御意は良し。何も彼も忘れる爲めに酒でも澤山飲んで新規疇直しの管でも巻かうかい」

音彦「ア、ア、五月蠅奴だナア。之丈けものの解らぬ宣傳使では龍宮の一つ島でも言向け和せないのは道理だ」

岩彦「貴様は落着きのない奴だ。これ位の時化が恐くてどうして天下の宣傳使が勤まらうかい」

梅彦「貴様でも勤まつたと思ふか。頻りに作戦の領分を擴張する計りで、腮の先計りで吾々を指揮したつて罰は目の前、頭が廻らな尾が廻らぬと云ふ事がある。よく考へて見よ。歸つて盤古神王にお目玉を頂戴するより此處で直に、日の出別命に謝罪つて助かる方が利巧なやり方だぞ」

とウラル教の宣傳使一行は、大恐怖落膽の御面相、ザツト半打斗りも陳列して居る。風は益々激しくなつて來た。船頭は聲を張り上げて、

船頭「オイオイ皆のお客たち、最う駄目だぞ。用意をなされ」

岩彦「オイ船頭、用意をなされと云つたつて何を用意するのだい」

船頭「叶はぬ時の神頼みだ。この風に向つて負けず劣らず言靈を發射するのだよ。サアサア俺の後に付いて力一杯呶鳴るのだ」

と云ひながら、船頭は櫂や艫の手を止めて、臍下丹田に息を詰め、  
「アー、オー、ウー、エー、イー、」

と嗚鳴り出したれば、船客一同は怖さに震ひながら聲を揃へてア、オ、ウ、エ、イ、と複数的に言靈を發射するのであつた。岩彦は盪伏せに合つた泥棒猫の様な狡猾な面を薄暗い闇に曝して目玉をギョロギョロさせ何となく不安の面色にて手足をチタバタさせて居る。

音彦「オイ大將、その狼狽へ加減は何だ。強さうな事を云つても、矢張【まさか】の時になれば弱い者だなア」

岩彦「斯うなつては吾々の刹那の權利と云ふものは只煩悶苦惱の自由を有するのみだ。自分の權利を充分自由に發揮して居るのに、貴様が干渉する權利があるか。オイ貴様等モウ駄目だ、俺は覺悟がある。たとへ海の藻屑になるとも三五教には降伏せない。よく考へて見よ、鶴山丸が沈没すれば、三五教の日の出別も矢張共に溺死する丈けの可能性は充分に具備して居るのだよ。放つとけ放つとけ。自分が怖かつたら神様に願つて波風を止めるだらう。吾々はその景物をソツト占領すればよいのだ」

梅彦「さうだな。船が沈没すれば三五教の宣傳使も沈没せずには居るまい。貴様

の今云つた言葉は眞に天來の妙音だ」

岩彦「何を云つた處で仕方が無い。空を仰いで見よ、眞黒けな顔をして今にも泣き出しさうな暗澹至極の御面相だ。世の終りと云ふものは、天の力も如何共する事が出来ないと見える。船頭の奴、吾々にまで言靈の發射を強壓的に勧めよつて、發言機關を虐使用するものだから言靈の停電を來して聲も何も「かすれ」て了つた。折角胃の腑に格納して置いた酒迄が逆流して、八百屋店を開店する。本當にこれくらゐ雜鬧を極めた事はあるやしない。貴様等ソレ船が沈むとか、死ぬとか、弱音を吹きよつたが何うだい、時節と云ふものは偉いものだらう。風の神、餘程弱つたと見えて沈黙しかけたぢやないか。モウ心配するな。さしもに猛き荒の神も「ヤア長々お氣を揉ませました、ウラル教の宣傳使様、また御縁があつたら陸上でお目に掛りませう、アリオース」と云つて、尻に帆かけて、スタコラヨイヤサと、アーメニヤの都をさして豫定の御退却だ。何うだ俺の刹那心には閉口しただらう」

龜彦「さうだ、餘りの偉い時化で咫尺暗澹、吾身の進路を誤つて居たが、最う斯

うなる上は何を苦しむで三五教に降伏する必要があるか。「すんで」の事で鶴山丸が大タンクになる處だつた。サア皆の奴勇氣を鼓して、こちらは六人向ふは一人だ。宣傳歌を歌つてやらうかい。今の風ぢやないが、吹いて吹いて吹き廻し、三五教の宣傳使の膽玉を轉宅させるのだよ。風力七十五メートルの勢いでナ  
一同は、

『面白い面白い』

と喉元過ぐれば熱さ忘れるとかや、妙な處へ刹那心を發揮して聲調も整はぬ複數的のシドロモドロの宣傳歌を歌ひ始めたり。

波よ騒げよ一寸先や闇よ 闇の後には月が出る

月は月ぢやが杯ぢや 飲んで酔へ酔へ酔うたら踊れ

酔へと云つても船には酔ふな 踊れと云つても波の奴

船のかへる様な踊りをするな アンナ悪戯ちよこちよこやると

俺等の胸迄踊り出す 飲めよ飲め飲め心地よく飲めよ

飲めと云つても船ではないぞ 日の出の別の宣傳使を  
 波の鬘ふり立てて グツト一口飲んで了へ  
 俺はウラル教の宣傳使 假令大地は暗くとも  
 命の親の酒飲めば 顔の色まで赤くなる  
 曇つた顔して天道様 難かし顔して睨むより  
 飲めば榮えるこの酒を 一寸一杯食召せ  
 酒と女は世の寶 酒でなければ夜が明けぬ  
 酒でなければ夜が明けぬ 酒から日が出る月が出る  
 酒から日が出る月が出る

とシドロモドロの歌を歌ひ宣傳歌を潰して了つた。  
 斯くする中、船は漸く波斯の海岸タルの湊に安着したりける。

(大正一一・三・一六 舊二・一八 藤津久子録)



第四章 夢の幕〔五三〇〕

鶴山丸は、ペルシヤ灣のタルの港に寄港した。日の出別の宣傳使は、此處に上陸してフサの國の都を指して宣傳歌を歌ひながら進み行く。

ウラル教の宣傳使、岩彦、梅彦、音彦、龜彦、駒彦、鷹彦の六人は互に目配せしながらタルの港に上陸し、足を早めて進み行く。

折から吹き来る強風の景物砂塵を浴び、灰泥餅のやうになつて、最大急行の突喊命令を下しつつ、シツの森に向つて電光の如く疾走する。

日の出別命は、暴風強雨我不關焉といったやうな調子で悠々として原野に遊べる野馬を御し、チヨクチヨクと進み行く。日は漸くに黄昏れたと見え、暗さは一しきり暗くなつて來た。もはや一寸も進むことが出来ない。

ここに日の出別は馬を乗り捨て、親讓りの交通機關に砂煙を立てながら、シツの森指して進み來り、一夜を明さむと蓑を木蔭に敷いて眠につく。

岩、梅、音、龜、駒、鷹のウラル教の宣傳使は、タルの港に上陸し足を早めて

シツの森に進み來たり。

梅彦「ヤア、漸く此處がシツの森だ。サア人員點呼だ、一、二、三、四、五、」

梅彦「六は無いのか、オイ誰だ、途中落伍した奴がありさうだナア」

音彦「闇がり道を強行的行進を續けたものだから、岩公の奴たうとう落伍しよつ

たな。口程にもない奴だ。空虚なる器物は強大なる音響を發すと云うて、實力の

ないものだ。言葉多ければ品少しだ。吾々は三五教に歸順しようと思つて居たの

に、岩公の奴、減らず口を叩きよつて、たうとう議會の停會と來たものだから、

一も取らず二も取らず、その間に日の出別の宣傳使は、この廣いフサの國に上陸

して仕舞はれた」

龜彦「彼奴は何を云つたところうでモウ駄目だよ。自分ほど偉い者は無いと定め

て居るのだから馬耳東風、餘程酷い目に遇はねば、免疫性の無感覺者だから目が

覺めないよ。多分タルの川の崖道の斷巖絶壁から空中滑走をやつてタルの川の川

底へでも有事着陸したのだらう。今頃にはプロペラーが折れたので谷底で進退谷

まつて岩彦が岩を抱へてア、「いは」ぬは云ふに彌勝る、鶴山丸の中で、あんな

【いは】いでもよい事を【いは】なかつたらよかつたになぞと云つて【こうかい】して居るだらう」

駒彦「航海は吾々もして来たぢやないか。後の【後悔】先に立たず、ぢやない役に立たずだ。併し乍ら此處はシヅの森と云ふて、バの字とケの字の出る處と云ふ有名な妖怪窟だ。オイ確かりせぬと、トンダ目に遇ふか知れやしないぞ。岩彦は【云は】ひこで好いと云ふ譯に行かない、吾々も極力搜索をやつて彼の潜伏所を突き留めねば宣傳使の役が勤まらない。アーメニヤに歸つて、あの大きな岩公をまさか紛失したとも、途中で遺失したとも、また磨滅して仕舞つたとも云ふ譯には行かぬからなア」

梅彦「何だ。遺失だの磨滅だのと、恰で手荷物 of やうに云つて居るぢやないか、些と言靈を慎まむかい」

駒彦「マア、マア、今晩はこれで打切りとして、明朝早々搜索兼探險と出かけよう。鼻を摘まれても分らぬやうな此暗夜にどうして居所が分るものか。木乃伊取りが木乃伊になるやうな惨虐事が繼續しては堪らぬからなア」

鷹彦「君達は随分冷淡な男だなア。人情輕薄なる事紙の如しだよ」

梅彦「それや貴様、神様の使だもの、【紙】邊暗雲に包まれ咫尺も辨ぜざる深夜

に、どう心配したつて進退谷まつた此場の光景、否暗景だ。如何とも策の施す餘

地が無いぢやないか」

鷹彦「何、暗くつても矢張り神の造つた神國の地の上に居る吾々だ。如何に妖怪

が現はれるシツの森だと云つても、これも矢張り神國の斷片だ。誰か一人此處に

待つ事にして後四人は岩公の搜索だよ」

音彦「おとましい、この深夜に縁起の悪い四人とはどうだ。何故四人と云はない

のだ」

駒彦「言靈と云ふものは妙なものだ。まかり間違へば岩彦は死人になつて居るか

も知れやしないぞ、よい辻占だ。マア如何でも好いぢやないか、明日は明日の事

だ」

鷹彦「【たか】が知れた宣傳使の一羽や二羽、無くなつたつて構ふものかい。彼

奴は餘り自負心が強いから、神様の懲罰に遇うて居るのだ。何時も豪さうに聖人

振つて、宇宙間の無限絶對なる不可解的な事實を道破したものは此岩彦だ……ナ  
ンテ駄法螺を吹きよつて吾々を煙に巻いて居たが、フサの海の暴風雨に出遇つた  
時は随分六ヶ敷顔をしとつたよ。負惜みで聲を立ててオイオイと吠えはせなかつ  
たが、力一ぱい氣張つて涙と泣面の保留をして居たのは確な事實だよアハ、ハ、ハ  
斯く話す時しも鼓膜の運命を危殆ならしむる如きドラ聲が暗中より聞えて來た。  
梅彦「ヤア唸るぞ、唸るぞ、大變だぞ」

音彦「ヤイ、何者なればこの深夜に唸るのだ。この方はウナル教の宣傳使、ウナ  
ル彦様の御家來だぞ。何ぼなと法螺を吹け、太鼓を打て、もつともつと馬力を出  
して喉が裂ける程唼鳴つたがよいわ。シヅの森は靜な處だと思へば、反對に喧し  
の森の、騒がしの森の、唼鳴りの森だ。唼鳴るなら唼鳴れ、【どうなり】ても構  
はぬ、命知らずの宣傳使の音さまだ。オイオイ梅、龜、鷹、駒、貴様達も何とか  
防戦せむかい。大きな言靈を出しよつて、吾々の耳の鼓膜を破裂させようとかか  
つて居やがるのだよ」

暗中より一層大きな聲で、

「オ、音公、駒の鼓膜が破れるどころか、鷹のやうな高聲で唝鳴つてやるから、膽が破裂せぬやうに用心を致せ」  
鷹彦「何ぢや、ケ、ケ、怪體な奴が、飛んで出よつたものだ。オイ、【ドラ】聲先生、俺を誰人と心得て居る」  
暗がりの大聲、

「ウラル教の腰拔野郎、よつく聞け。アーメニヤの神都は殆ど零敗に歸し。今は僅に美山彦、國照姫の曲津見が弧壘を死守するのみ、實に慘なものだ。アーメニヤの城壁は所々くたぶれ果て、穴だらけ、貴様達はコーカス山に歸つて往くつもりであらうが、コーカス山は、もはや三五教の勢力範圍に歸して了つたぞ。今の間、改心いたせばよし、違背に及ばば汝が生命は風前の燈火、また岩彦のやうな運命に陥るぞ。アハ、オホ、ウフ、イヒ、エへ、」  
と五韻を離れた鶴のやうな笑ひ聲が聞え來たる。

龜彦「オイ皆の奴、これや一つ作戦計畫を遣り直さねばならなくなつたぞ。新時直し、吾々は兔角善と信じた事は飽迄も決行せなくてはならないのだ。どうだ

岩公は今のバーとケーサンの言葉によれば、どうやら寂滅爲樂疑ひなしだ。吾々

も一つ我を折らねばなるまい、ア、困つた事だワイ

音彦「何だ、弱々しい亡國的の哀音を吐き、絶望的悲調を帯びたその世迷言は、

貴様は宣傳使の天職を忘れたのか

龜彦「宣傳萬化」、隠顯出沒極まり無きが、宣傳使の正に用ふべき神祕だよ。

貴様のやうな杓子定規でこの世の中が渡れるものか。郷に入つては郷に従へ、時

の力には抵抗する事は出来ない。この頃は櫻のシーズンだと云ふのに如何だ。花

もなければ葉も萎れ、山野はほとんど冬のやうだ。これも天の時だ、何時までも

春は花が咲く、秋は紅葉が照ると思つて居ると譯が違ふぞ

かく雑談に耽る折しも、俄に「クワツ」と明くなつて來た。五人は驚いて空を

見上ぐる途端に、アツと一聲大地に打ち倒れたり。

巨大なる光り物の中より、得も云はれぬ恐ろしき朱色の顔色に、アーク燈のや

うに光つた目玉を剥いた怪物、五六尺もあるやうな舌の先に何だか人の首のやう

な物に乗せてペロペロさして居る。よくよく見れば岩彦の首である。

梅彦「ア、岩々、岩公が【いは】された」

音彦「ヤア、モシモシ赤い顔の白い目玉サン、それや餘り胴欲だ。その首は岩彦の首ぢやないか、あまりだよ」

化物「餘り退屈なのでア首が出たのだよ。人肉の温い奴を食ひ度いと思つて居たら、此處に四つ五つ轉つて居るワイ、ヤア甘い甘い、天道は人を殺さず、化物は人を食ふ、美味さうな奴が來たものだワイ。アハ、、イヒ、、ウフ、、エへ、、オホ、、」

鷹彦「コラ、バ、バケモノ、了見せないぞ。今待つて居れ、俺がウラル教の宣傳歌を歌つてやるわ」

化物「ウラル教の宣傳歌を聞かして貰うと氣分が好くなつて、益々貴様等が食ひ度くなつて來る。食はれぬ前にこの世の歌ひ納め、一つ歌つて呉れまいか」

鷹彦「ヨ、此奴は零敗の大當違ひだ。ソナラ三五教の宣傳歌を歌はう」

化物「ウン、そいつは困る。しかし貴様はウラル教だ。三五教の宣傳歌を知らう筈が無い。マアマア大丈夫だ。歌ふなら歌つて見よ、アハ、、イヒ、、ウ



フ、フ、

鷹彦「何を吐かしよるのだ。不完全な奇數的の馬鹿笑ひをしよつて、俺の宣傳歌を聞いて膽を潰すな。オイ梅公、音公、龜公、駒公、鷹サンと一緒に宣傳歌を歌ふのだ。サア今度は三五教の宣傳歌だぞ」

龜彦「三五教は一向不案内だ。まして宣傳歌なぞはサツパリ分らないよ」

鷹彦「貴様はウラル教の宣傳使であつて不心得な奴だ。三五教を征服しようと思へば、敵の總ての教理を呑み込んで置いて、ウラル教との優劣を判断し、ウラル教が三五教と、どの邊が勝つて居ると云ふ點を宣傳するのが、宣傳使の役ぢやないか。俺はウラル教だから三五教の教理は研究するのも汚らはしいと云ふやうな事で、どうして敵に向つて勝利を得る事が出来るか、エ、仕方ないデモ宣傳使ばかりだナア。サアこの鷹サンが俄に三五教の宣傳使と宙返り飛行をやつて御覽に入れる。化物の奴、今くたばるか、くたばらぬか、試して見るのだ。もし三五教の宣傳歌で化物が滅びたら矢張り三五教が豪いだから、そこで貴様達も決心するのだぞ。サア俺の宣傳歌を聴いて見る」

と云ひながら怪しき化物の顔をグツと睨み付け、

「神が表に現はれて お膳と箸とを立別ける

この世の中に化物があつて耐るかシツの森

静になれよ静になれよ 三五教の宣傳歌

宣傳萬化に曲津見の 向ふを張つて跳ね廻る

梅彦、龜彦、駒彦や おとなしうない音彦の

頭を目蒐けて食ひつけよ」

音、龜「コラコラ鷹公、何を吐かしよるのだ。貴様は極端な個人主義だなア。一

連托生、無我平等のウラル教、オットどっこい三五教の精神を知つて居るか」

鷹彦「アハ、ハ、ハ、馬鹿な奴だなア、俺を一體誰だと考へて居る。抑々アーメニ

ヤを出立するその時より、吾は三五教の鷹彦と云ふサルジニヤの一つ島に居つた

宣傳使だ。猫を被つてウラル教に這入り、貴様等五人の中に加はりて龍宮の一つ

島に渡り、飯依彦と以心傳心的作戦計畫をやつて居るのも氣がつかず、悪の企は

注意周到にして水も漏らさぬやうに見えるが、肝腎の身魂に執着があるから足許

が眞暗がり、この鷹サンの化物に氣が付かなかつたのだよ。アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、ハ、エヘ、ハ、ハ、ハ、

梅、駒「何だ、貴様までが俄に化物の後繼をしようつて、頭の上からと下からと、化物の包圍攻撃をやられて耐つたものぢやないワイ」

頭の化物、大きな舌を出して、

「アハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ」

龜、音「ヤア、又やりよつた。上下挾撃、えらい敵の術策に陥つたものだワイ」

頭の化物、

化物「オホ、ハ、ハ」

と笑つた途端に、舌の先から【つる】つると空中滑走をしながら五人の前に着陸した男がある。

一同「ヤア岩、岩、岩彦か、貴様は一體どうして居たのだ。化物の喉から出て來よつて、恰で、飴の中からお多ヤンと金太サンが飛んで出たやうな曲藝だ。誰にソナ手品を教へて貰ひよつたのだい」

岩彦「オイ皆の奴、よい加減に目を醒まさぬかい。何をウンウンと唸つて居るのだ、此處はシヅの森だぞ、靜にせないと化物が出ると云ふ事だよ」  
一同「ムニヤ ムニヤ、アーアー恐かつた、エライ夢を見たワイ」  
岩彦「アハ、ハ、ハ」

(大正一・三・一六 舊二・一八 加藤明子録)

## 第五章 同志打(五三一)

天の戸押し開いて半圓の月は稍西天にかすかに輝き初めた。一同の顔は誰彼の區別のつくまで判明して來た。  
岩彦「オー、久し振りでお月様のお顔を拜観することが出來た。是れだから時節は待たねばならぬものだと何時も云ふのだよ」  
梅彦「今日は妙な日だ、鶴山丸で日の出別の宣傳使に逢ふ。今晚はまた月の顔を

久しぶりで見ると、龍宮の一つ島に渡つてから、日月揃うて見たのは珍らしいことだ。

岩彦「オイ、何だか俺は胸騒ぎがする様だ。皆起きて坐らぬかい。一つ臨時議會を開會するから。」

音彦「ナニ、岩彦議長の提案は一體何だい。吾々はあまり長い間海に浮んで居た揚句、大陸を強行的にテクツて來たものだから、足は棒の如になつてしまつた。

横になつたまま開會をしてもらへないかな。」

岩彦「横でもかまはないが、然し是れには一寸曰く因縁があるのだ。まさかの時になつたら、貴様の不利益だらう。只今より愈月の出たのを幸い、マラソン競走

の選手となつて、フサの都まで速力倍加で突貫するのだよ。」

龜彦「ソラ何だ、餘りの緊急動議ぢやないか。」

岩彦「大きな聲で云ふない、その向ふの木の株をそつと覗いて見よ。居るぞ居るぞ。大きな聲で咆哮すると覺醒状態になられては大變だ。それ今そこに居る奴は

船の中で見た日の出別の宣傳使だ。此奴が目を覺まさぬ間に尻に帆をかけて、急

速力くりよくで進行しんかうするか、但しただは停船ていせんのまま四方しほう八方はつぱうより包圍ほうゐ攻撃こうげきをやるか、二ふたつに一ひとつの議案ぎあんだ。サア即決そくけつだ」

鷹彦たかひこ「マア、ソナ事は即時そくじ否決ひけつだ。「否決ひけつ」の序ついでに本當ほんたうの敵てきに對たいする「秘訣ひけつ」を吾輩わがはいが提出ていしゆつするから、汝等なんぢら夫れ審議しんぎを鄭重ていぢゆうにするのだ。とても吾々われわれ半はんダースの人間にんげんが一齊いつせい射擊しやげきをやつた處ところで、クルツ砲ほうに火繩銃ひなはづつを以もつて對むかふ様なものだ。勝敗しょうはいの數既すうすでに決けつす、寧ろむし白旗はくきを掲かかげて降伏かうふくと出掛でかける方が安全あんぜんで好よからう。くだらぬ事に貴重きちゆうな生命せいめいを落おとすのは馬鹿ばかの骨頂こつちやうだ。誰も夫れ丈だけ戰たたかつた所で彼奴あいつは職務しよくむに忠實ちうじつな奴感心やつかんしんだと云いうて共鳴きやうめいするものは、この暗くらがりの時節じせつに一ひとり人も半人はんじんもあるものぢやない。共鳴きやうめいするのは墓はかの團子だんごでも泥棒どろぼうしようと思おもつて烏からすが鳴なく位くらいだ。それも哀悼あいたうの意味いみでなくて自分じぶんの食料しよくれうを得えた嬉うれし鳴なきだから、ホントウにつまらな  
いぢやないか」

岩彦いはひこ「不相變弱音あひかはらずよわねを吹ふく奴やつだなア。人間にんげんと云いふものは神様かみさまの模型もけいぢやないか、神かみ様さまはソナ決けつして弱音よわねを吹ふくものぢやないよ」

鷹彦たかひこ「又またもや月つきが隠かくれたぢやないか。遁にげようと言いつたつて此曇天このどんてんに足許あしもとの泥溝どぶも

はつきりと判らず、丁度灰色の茅の中を道中するやうな有様だから、何時足をさらはれるか分つたものぢやない。思ひ切りの悪い奴だナア。アーメニヤへ一體歸つた所で、盤古神王のウラル彦が居られるか居られぬか心許ないではないか』

龜彦『ウン、俺もソナ夢を見たよ、心配だ。然し岩彦の宣傳使長は、お化物の舌の上に乗せられて居つて、噛んだり、吐いたり、イヤもう目茶苦茶な目に逢はされて居よつた。夢にも色々あつて神夢、靈夢、正夢、凶夢、雜夢と云ふ事があるから當にはならないが、どうせ頑固一片の男だからあの夢が靈夢になるかも知れぬ。氣の毒なものだワイ』

一同『ウン俺達もその夢を見たのだ。斯うして四人が同じ夢を一度に見ると云ふのは、屹度靈夢だよ。オイオイ愚圖々々して居ると内裏に敵が侵入潜伏して居るかも知れないぞ』

岩彦『吾々一行六人の中に三五教の奴が交つて居ると云ふのか。ソナ馬鹿な事があるものかい』

音彦『ヤー何とも言はれぬよ』

鷹彦「オツト高い聲では言はれぬが、ナンデも羽が生えて宙を飛ぶ様な名の男が、  
三五教の間諜で俺達の仲間に這入つて居ると云ふ事だよ。現に夢の中に「俺はか  
うして貴様と一緒にウラル教に入つて、その實は三五教だ。一つ島の宣傳が不成  
功に終つたのも飯依彦と氣脈を通じて遣つたからだ」と、夢の中に自白し居つた  
奴があるのだもの」

三人「俺等も夢でその通り聞いて居る。サア行掛の駄賃に此奴をやつつけておい  
て、それからマラソン競走だ」

音彦「コラ鷹公、白々しい、貴様は何だ。悪の企の露顯れ口、のつ引ならぬ夢の  
告、どうぞや白状致して降参するか、逃げようと言つたつて、もう駄目だぞ。吾々  
五人の閉塞隊が港口を固く封鎖した以上は、潜水隊だつて無事に脱出する事は出  
来やしないぞ。サア白状せないか」

鷹彦「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、エヘ、ハ、ハ、」

一同「何だ、夢の中の化物の如うな聲を出しよつて」

鷹彦「盲の宣傳使、馬鹿と云つても貴様等の様な奴は珍しい。天下一品、秀逸の



馬鹿だ。俺は貴様の云ふごとく實は三五教の宣傳使だ。瀬戸の海の一つ島に永らく居つたものだが、手段を以て貴様等の仲間に藻繰込み、總ての計畫を熟知し居るこの方、俺位のもものが看破出来ぬ様なものではウラル教も駄目だ。アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ、イ、面の皮だ、いぢらしいものだナア」

岩彦「言はして置けば悪言暴語の亂射、もう此上は不言實行だ。オイ皆の奴、打ちのめせ、大將軍の命令だ」

「ヨシ」

と答へて一同は拳を固め鷹彦の面上目がけて力限りに打下せば、鷹彦はヒラリと體をかはした。

梅彦「アイタタ アイタタ、コラコラ鷹彦、おれをどうするのだ。此奴中々ひどい事をしよるぞ。アイタタ アイタタ」

暗がりまぎれに鐵拳の雨を降らして居る。鷹彦は二三間はなれた所より、鷹彦「アハ、ハ、ハ、盲同志の同志打ち、ドシドシと喧譁をやれ、この方は高處で見物だ」

梅彦「オイオイ皆の奴、俺の頭を惨い目になぐりよつて、チツト心得ぬかい。味方を打つと云ふ事があるものかい」

音彦「千騎一騎の戦場に向つて鎬を削るに、誰彼の用捨があらうか。當るを幸ひ、なぐり、張倒し、勝鬨あぐるは瞬く間」

鷹彦「アハ、ハ、ハ、面白い面白い、悪神のする事は皆ソナナものだよ。もつとやれもつとやれ」

音彦「エーかもふない、今に仇を打つてやる。オイ皆の者、何でも後の方に聲がしたぞ。突喊々々」

ワーツと鬨を作つて聲する方に進撃する。茂みの森の木の幹に前額部を衝突させパチン、

「アイタタ、イ、イ、イタイ、ヤー鷹彦の奴、中々固い體をしてゐよる。何だ此奴は木の幹だ、大木だ」

鷹彦は體をすくめながら、暗にすかして五人の蠢動するのを見済まし杖を以て頭と思ふ處を目がけてそつと叩く。

音彦「ヤア居る居るオイ、此處だ此處だ」

「ヤアさうか」

と四人は聲する方を目あてに鐵拳を亂下した。音公は四人の荒男に身體一面亂打されて、

「アイタタアイタタ、アヤマツタ、待て待て、違ふぞ違ふぞ」

一同「違ふも糞もあつたものか。この期に及んで卑怯未練な逃げ口上、放すな皆の奴、のばせのばせ」

音彦「音ぢや音ぢや」

一同「音がする程叩けとぬかすのか、ヨシ御注文通りなぐつてやらう」

鐵拳の音は一層激烈となつて來た。鷹彦は二三間傍に又ツと立つて、

鷹彦「アハ、オホ、イヒ、鷹チヤンは此處だよ。同志打ちの先生、

盲先生、今の世の中は丁度ソナものだよ。互に味方同士、兄弟同士、親類同士、

同士打ちをやつて居る。貴様等もウラル教の精神を遺憾なく發揮して満足だらう。

昔の常世會議で武装制限が行はれて、羽翼を取られて退化した人間が、アベコベ

に羽翼が無くなつて不自由の身體になつて、それを進化したと云つて喜ぶやうな代物だから不便なものだ。オイこの鷹チヤンはその名の如く羽翼が在つて鷹の通り空中は自由自在だ。一つ飛んで見せて遣らうかい」

と云ひながら、一丈もある翼を擴げてバタバタと羽ばたきをして見せる。

一同「ヤア此奴は天狗の化物だ。モシモシ天狗様、偉い見損ひを致しましたが、天狗様、どうぞ生命計りはお助け下さいませ」

鷹彦「三五教の宣傳歌を歌ふか」

一同「ハイハイ、教へて下されば歌ひます」

鷹彦「ウラル教は止めるか」

一同「やめますやめます」

この時暗中より何人とも知れず、涼しき宣傳歌が暗を縫うて、傍の木の茂みより聞え來たりけり。

(大正一一・三・一六 舊二・一八 谷村眞友録)

第六章 逆轉〔五三二〕

☐ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

曲津の神は荒ぶとも 黄泉の島沈むとも

誠の神は世を救ふ 神が表に現はれて

善と悪とを立別ける 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 唯何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ 世の過ちは宣り直せ

三五教の宣傳使 日の出の別と現はれて

ウラルの山に隠れたる 魔神の砦を言向けて

神の教を傳へつつ 又もや進むアームニヤ

美山の彦や國照姫の 醜の魔神の曲業を

誠一つの言靈に 言向和はす神司

ペルシヤの海を乗り越えて　タルの港に上陸し

駒に跨り静々と　進みて来るシツの森

森の木蔭に立寄りて　疲れを休むる折もあれ

俄に聞ゆる人の聲　耳を濟ませばこは如何に

ウラルの神の御教を　四方に傳ふる宣傳使

岩彦梅彦龜彦や　駒彦音彦鷹彦の

譯も分らぬ同志打ち　打ち寛ろぎて聞き居れば

狗に腐肉を見せし如　言騒がしくさやぎつつ

打つ蹴る擲る泣く【わめ】く　名に負ふシツの此の森も

さやぎの森となりにけり　ウラルの神の宣傳使

汝も神の子神の宮　此世を造りし大神は

唯一柱ゐますのみ　本津御神を振り捨てて

枝葉の神を敬ひつ　世を紊し行く曲神の

報いは忽ち目のあたり　神素盞鳴の大神の

御稜威の風に拂はれて

ウラルの山やアーメニヤ

堅磐常磐の住處ぞと

仕へ奉りし鐵條網

木葉微塵となりはてて

今は果敢なき夢の跡

美山の彦や國照姫の

醜の魔神の細々と

苦節を守る憐れさよ

高天原も國土も

曇り果てたる今の世は

ウラルの教も世の末ぞ

一日も早く片時も

疾く速く改めて

醜の曲言宣り直し

榮え目出度き三五の

神の教に眞心を

捧げて祈れ六の人

世は紫陽花の七變り

八洲の國は十重二十重

雲霧四方に塞がりて

とく由も無き常夜國

汝が身に受けし村肝の

心の魂を逸早く

天の眞澄の御鏡と

研き澄まして神直日

清き身魂に立替よ

われは日の出の宣傳使

天津御空の日の神の

御言畏み葦原の

瑞穂の國に降りたる

神の依さしの嚴身魂

瑞の身魂の現れませる

コーカス山に進むなり

誠の神に刃向ひて

榮えし例し昔より

今に至るもあら波の

闇の海路を渡る如

その危さは限りなし

限りも知らぬ大神の

深き恵みを悦びて

仕へ奉れよ三五の

神の教の道芝に

神の教の道芝に

と歌ふ聲に、一同は雷に打たれし如き心地して、大地にドツと平伏し、息を殺し

て控へゐる。

鷹彦「ア、何れの方かと思へば、今日船中にてお目にかかつた日の出別の宣傳使

様、われは元來は三五教の宣傳使鷹彦と申すもの、ウラル教の宣傳使となりすま

し、彼等が惡計の秘密を探り、此處まで歸り來りしもの、今や五人の宣傳使に包



圍攻撃を受け、前後左右に體を躲し、三五敎の敎理を聽聞させむと心膽を碎きし折、思ひがけ無き貴使の宣傳歌、ア、有り難しありがたし。われも是より貴使のお供仕り、コーカス山にお送り申さむ。どうぞ此儀お許し下さいませ』  
と聲を「しるべ」に物語るを、日の出別は、

「ホーその方は豫て噂に聞きし鷹彦なりしか。よい所で逢ひけるよ。それにしてもこの五人の宣傳使を言向け和さねば、吾々の任務を果すことが出来ない』

鷹彦「イヤご心配はご無用です。三年ぶり此の男等と寢食を共にし、彼等が心理状態を確り承知致し居れば、餘り心配せずとも歸順させることは容易の業だと思ひます。どうか此の五人は私にお任せ下さいませ』

日の出別は言外に承知の旨を面色にて示しめる。

鷹彦「サア、岩彦、貴様一人は最も難物だ。貴様さへ改心をすれば他の連中は、最早九分九厘まで歸順してゐるやうなものだ。何うだ、三五敎に歸順するか』  
岩彦「アー仕方が無い。また神の道の逆轉旅行だ。時あつて親子主從敵となり、味方となるも世の習ひ、是非に及ばず降伏いたさうかい』

鷹彦たかひこ 「そりや本當か」

岩彦いはひこ 「本刀でなうて何としよう、眞劍だ、正宗の銘刀だ」

鷹彦たかひこ 「モウ少し早く改心すれば好いものを、トコトンまで頑張りよつて、ドン後

で往生するとは餘り「みつとも」良く無い。しかし乍ら改心せぬより優だ。聽て

また夜が明けるだらう、改心の褒美として、悠悠安眠させてやらう。また明日は

一生懸命「てく」つかねばならぬから」

岩彦いはひこ 「イヤもう寝るところでも、何どころでもない。心の中の天變地妖だ。地震、

雷かみなり、火の雨に逢うたよりも、きつい脅威だ」

鷹彦たかひこ 「アーさうだらう。其處を決心するのが誠の道を歩む宣傳使の態度だ」

斯く話す折しも十重二十重に包まれし月は、フサの海の彼方に影を顯はし、皎々

たる光を此の森に斜に投げた。

又もや一同の顔は、「ほのか」に判別することが出来るやうになつて來た。こ

れよりウラル教の宣傳使は、日の出別命の信者と急轉し、夜明けを待つてフサの

都に宣傳歌を歌ひ乍ら進み行く事となりける。

(大正一一・三・一六 舊二・一八 外山豊二録)

第二篇 洗禮旅行

第七章 布留野原(五三三)

|                                                                                       |                                                                                       |
|---------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 誠 <small>まこと</small> の神 <small>かみ</small> の言 <small>こと</small> 靈 <small>たま</small> に  | 雲霧 <small>くもぎり</small> 開 <small>ひら</small> く日 <small>ひ</small> の出別 <small>でわけ</small> |
| 珍 <small>ウツ</small> の御言 <small>みこと</small> の宣傳 <small>せんでん</small> 使 <small>し</small> | 天教山 <small>てんけうざん</small> を立出 <small>たちい</small> でて                                   |
| 遠 <small>とほ</small> き海原 <small>うなばら</small> うち渡り <small>わた</small> り                  | いよいよここにフサの海 <small>うみ</small>                                                         |
| タルの港 <small>みなと</small> に上陸 <small>じやつりく</small> し                                    | 心 <small>こころ</small> も漸 <small>や</small> つとシツの森 <small>もり</small>                     |

木蔭こかげに憩いこふ折柄をりからに

闇やみに聞きこゆる人ひとの聲こゑ

眠覺ねむりさませば岩彦いはひこが

部ぶ下かに仕つかふる宣傳せんでん使し

一二三四五ひとふたみよいつむつ六むつ

むあつみ合あうたる其仲そのなかも

時ときに浪風なみかぜ立騒たちさわぎ

黑白あやめも分わかぬ暗くらまぎれ

闘たたかふ間うちに日ひの出別でわけ

神かみの眞道まみちを言別ことわけて

漸やつやく一同いちどうシツしつの森もり

岩いはに等ひとしき岩彦いはひこの

固かたき心こころをなごめつつ

一いち度どに開ひらく梅うめヶ香がの

神かみの教をしへに服従まつろはせ

【音おと】に名な高たかきフル野原のほら

さまやる魔神まがみを言向ことむけて

【龜かめ】の齡よはひの何時いまでも

動うごかぬ神代かみよを築きづかむと

心こころの【駒こま】に鞭むちちて

雀すずめの群むれに翔かけ下くだる

【鷹たか】の勢勇いきほひましく

草生くさおひ茂しげる廣野原ひろのほら

タルの大おほ河右かはみぎに見みて

北きたへ北きたへと進すすみ行ゆく。

一行七人は脚に任せてフル野ヶ原を奥深く進み入る。又もや眞黒の暗の帳はおろされて、四邊暗澹たる光景となりて來たりぬ。東北の風はヒューヒューと草野を撫でて吹き來り小雨さへ混り居る。

鷹彦「昨夜は、シヅの森で、亂癡氣騒ぎをおつぱじめ、日の出別の宣傳使の居中調停の効果によりて、まづ平和克復の曙光を認め、今日は天地にかはる大變動、三五教を仇敵の如く見做して居た、ウラル教のへボ宣傳使は、今日は同行七人の三五教、變れば替るものだワイ。サア今晚は、このフル野ヶ原の草を衾に、平和の夢を結ばうぢやないか。もしモシ日の出別の宣傳使様、此フル野ヶ原は、一時雨が降つては、また一時晴れるといふ藝當を繰返すのですから漫然安眠も出來ますまいが、蓑笠を被つて、一夜を明かす事に致しませうか」

「ア、それも宜からう。先づ今晚はゆつくりと足を伸ばして寝ませう」  
岩彦「それは有難い、併し乍らこのフル野ヶ原は、妖怪變化の隠顯出沒常ならざる、魔窟ヶ原であるから、あまり安眠も出來ますまい。併しコンパスを休養させる爲に、横に立てつて、空の黒雲と睨みつこでも致しませうか」

梅彦「ア、モウ草臥れた。タルの河の河縁を傳うて来たお蔭で、草鞋に泥埃の寄  
生蟲が群生して、十足ぶりの重みを感じた。アア疲勞れた時に休む程樂なもの  
はない。可愛い子には旅をさせとやら、本當に、風吹き荒ぶ埃道を、目的場所も  
なしにテクツク位苦しい事はない。其苦しみを癒やす爲に、足を伸ばして休む時  
の樂しさ、少々小雨が降つた位はナン之苦にもなるものでないわ」  
龜彦「わしも一つ島から長い間、船に揺られて、サツパリ足の魂が、どつかへ移  
住したと見えて、ナンダか、他人の足の様な心持がして仕方がない。マアゆつく  
りと今夜は此處で休息さして貰はう」

「サアサア皆の者、休眠まうぢやないか」

と言ひ乍ら、日の出別は雜草の上にコロリと横たはり、鼾聲雷の如く、忽ち華胥  
の國に遊樂するものの如くなりけり。

鷹彦「アア、何と罪のない豪膽な宣傳使だらう。昨日まで極力反對して居た吾々  
を側に置いて、何の懸念もなく、率先して他念もなく寢に就く。其度量の大きい  
のには、吾々も舌を巻かねばならぬ。人間は斯うなくてはならない、猜疑心や、

嫉妬心や、疑惑があると、つひ他人の事が氣になつて、安心の出来ぬものだ。疑心暗鬼を生ずと言つて、人は自分の心で自分を苦めるのだ。ウラル教は六人連で旅をしても、夜中に何が襲来するか知れないと云つて、交代で一人宛、其傍に哨兵を立たせて置く。之れを思へば、實に三五教は淡泊なものだ。博愛の教だ。：

： オイ貴様達も安心して寝たがよからう

駒彦 『ソラさうだ、昨日の敵は今日の味方、鬼の囁き、虎の嘯きと聞えしは、松吹く風となりけりだ。サアサア皆一同に心のキルクを抜いて、今日は一蓮托生、枕を並べて討死…… オツトドツコイ打揃ひ寝に就かうぢやないか』

岩彦 『サアお前達は皆寝め、この岩彦は日の出別の宣傳使の保護の任にあたらねばならぬ。是が俺の眞心だから……』

鷹彦 『眞心とは眞赤な詐りだらう。マ心のマは悪魔の魔だらう。貴様はまだ安心が出来ないと見えて、熟睡して居る間に、日の出別命に喉笛でもかかれはせぬかといふ猜疑心があるのだよ』

岩彦 『ナニ決して決して、さうではないよ。此フル野ヶ原には、澤山の太蛇が居

るといふ事だ。人の匂がすれば嗅ぎつけて、何時やつて来るか知れぬ。それだから拙者が保護の任に當るのだよ」

鷹彦「ナニソナ心配は要らぬ。早く寝んだがよからうぞ」

梅彦「オイオイ、大變だ大變だ」

鷹彦「何が大變だ」

梅彦「日の出別の宣傳使のお姿が見えぬぢやないか」

此一言に「アツ」と言ひ乍ら、附近を見れば影もない。

岩彦「それ見る、やつぱりフル野ケ原は妖怪窟だ。日の出別の宣傳使を、大蛇の

奴、忍術を使つて、そつと呑んで仕舞よつたのだらうも知れぬぞ」

鷹彦「ナーニ、ソナ事があるものか。あの方は神様の化身だから、變幻出沒自

由自在だ。吾々の様な罪惡の凝結とは違つて、淨化して御座るのだから、透つて

見えないのだらう」

此時何とも知れぬ血腥き、濕潤ある、蒸暑い風がサツと吹いて來た。

音彦「ヤア此風はナンダ、怪體な調子だぞ。どうしてもフル野ケ原式だ」



鷹彦「恐怖心に驅られて、全身細かく、ブルブルブル野ケ原の野宿といふ體裁だ。

アハ、ハ、ハ、臆病風がソロソロ吹き出したワイ」

音彦「向うから惡魔の奴、魔風を吹かしよるから、此方も負けぬ氣になつて、言

靈の一二三四五六七八九十百千萬億病風だ」

鷹彦「何を洒落るのだ、それぞれ又雨だ」

音彦「【あめ】が下に住居する吾々が、雨が怖くて此世に居れるか。雨より恐い

は、アーメニヤのウラル彦様だ。吾々が斯うして、飛行宣傳中に宙返をうつたと

云ふことが聞えたら、それこそ大變だ。到底舊のアーメニヤの城内に、格納して

貰ふ事は最大難事だよ」

鷹彦「まだ貴様は、アーメニヤが戀しいのか」

音彦「ナ、アーメニヤが戀しいのぢやない、肝腎の力に思うた日の出別神様

が、雲煙となつて磨滅して了つたものだから、心細くなつて來たのだ。それで今

度はアーメニヤの盤古神王のお咎が恐ろしくなつて來たのだ。俺だつて日の出別

の宣傳使にしやつついてさへ居れば、心が大丈夫だが、コンナ魔窟に放擲されて、

チツトは愚癡も出ようまいものでもなからうぢやないか』

龜彦 『さうぢや、同感々々、誰だつて人の心は九合八合だ。今此處で捨てられたら、それこそ一升の恨だ。オイオイ一斗の者、一石も早く在處を探ねて見ようぢやないか。枳々斗り知られぬ宣傳使の變幻出沒、こりやマア、どうしたら宜からうかな』

此時ボンヤリとした、薄暗い、生茂る茅の中から、ズズ黒い大きな顔が又ツと

現はれて、

化物 『キエーへへへ、キヤーハへへへ、キヨーホへへへ、キユーへへへ、』

音彦 『音高し音高し、靜かにめされ化物殿』

化物 『キヤーへへへ、キユーへへへ、』

音彦 『オイオイ皆の奴、呪文を唱へるのだ。向うがキユーキユーだから、此方は

窮々如律令だ。サア言うたり言うたり』

一同聲を揃へて、

『窮々如律令、窮々如律令』



と言ひ乍ら、岩彦は尻ひきまくり、化物の屈んだ方に向つて、

岩彦「ヤア、折悪しくウンの持合せがない、仕方がないワ、此方の臀肉を喰へ、

お尻が呆れるワ」

と三つ四つ叩いて見せる。

音、梅「アハ、ハ、ハ、こいつあ面白い、洒落てけつかるワイ」

草原より再び化物はニユーツと首を出し、

「ヤア岩彦、有難い、お前の尻を是から頂戴する。そこ動くな」

岩彦「ヤア、バババケ公、嘘だ嘘だ、一寸愛想に行つて見たのだ。お前はウンウ

ンと言つて糞をこいたが、俺は嘘をこいたのだ。コンナ事を、眞面目に聞く不風

流な奴があるかい。お前もよつぽど原始的な化チヤンだナア」

化物「オ……オ……俺は原始的だから、お前の様な風流の持合せはないワイ。何

事も神の道は正直が一番だ。お前も苟くも天下の宣傳使、滅多に戯談や嘘偽を云

ふ筈はあるまい。言行一致だ。サアサア宣言を履行して貰はうかい」

鷹彦「アハ、ハ、ハ、此化州、あぢな事を言ひよる。オイオイ化州、コンナ岩公の

様な分らずやに相手になるな、見逃せ見逃せ

化物「それでも岩公の奴、確に尻をまくつて、喰へと言つたのだ。お前たちの耳にも新なる所、斯く的確な意思表示をやつた以上は、何處までも強制執行をやるのだ」

岩彦「執行とはナンダ、執拗ぢやないか、良い加減に碎けぬかい」

化物「碎ける碎ける、お前の骨が、木葉微塵に碎けるぞ。當つて碎けと云ふことがあるぢやないか、お前も立派な一人前の男だらう。當つて碎けたらどうだい」

岩彦「イヤ俺は一人前ぢやない、四人前だ」

化物「四人前なら猶更の事だ、餘人はいざ知らず、汝一人に限つて絶對的に實行をするのだ。そこ動くな」

岩彦「動けと云つたつて、動くものかい。岩サンは其名の如く、恬として動からざる事、磐石の如しだ」

化物「さうだらう、腰を抜かしよつて、減らず口を叩かない」

鷹彦「アーア、此睡たいのに、氣樂な化奴がやつて來よつて、種々の餘興をやる

ものだから可笑しくつて、碌に眠る事も出来やしないワ」

岩彦「オイオイ鷹彦、何が餘興だ。俺の身にも一つなつて見い」

鷹彦「アハ、、、、貴様あまり頑固だつたから、一寸神様に釘を打たれて居るの

だ。ナアモシ、化神さま……」

化物「さうだ、鷹彦の仰有る通、俺の聞く通りだ。一分一厘間違のない話だ」

岩彦「オイ鷹彦、岩いでもよい事を言ふな、貴様は化の奴に共鳴しよつて、本當

に怪しからぬ奴ぢや」

鷹彦「アハ、、、、貴様又昨夜の様に夢でも見とるのぢやないか」

岩彦「さうかなア、夢なら結構だが……ヤアどうしても夢の様に思はれぬぞ。起

きてはテクテクと曠野を涉り、寢てはコンナ恐ろしい夢を見せられては堪つたも

のぢやないワ」

化物「ヤア岩チヤン、永々お邪魔を致しました。夢でもない、現でもない、本當

のフル野ヶ原の化チヤンだ。ユメユメ疑ふこと勿れ、アリオース」

と云つた限り、「ブスツ」と屁の様な怪しき音と共に消えて了つた。

音彦おとひこ「ヤアヤア怪けつ體たいな事ことがあつたものだ。今いまの出でよつたお化ばけは、ナンデも雪隠せつちんのお化ばけと見みえる。糞くそを垂たれる終局しまひの果はてには鼬いたちの最期さいご屁へぢやないが、ブスツと音おとをさせて屁へ古垂こたれよつた」

岩彦いはひこ「ワハ、ハ、ハ、妙めうなものだ。俺おれの腰こしもモウ大丈夫だいぢやうぶだ。オイどうだ、貴様きさま、俺おれが腰こしを抜ぬかしたと本當ほんたうに思おもうて居をつたのだらう、ソナ弱よわい事ことで宣傳使せんてんしが勤つとまるかい。キヤハ、ハ、ハ、キユフ、ハ、ハ、キヨホ、ハ、ハ、」

鷹彦たかひこ「オイオイ岩公いはこう、ソナ言靈ことたまを使うつかと、第二だいにの妖怪變化えうくわいへんげのお見舞みまひだぞ」

岩彦いはひこ「ようかい」も神界しんかいもあつたものかい。吾輩わがはいの勢力範圍せいりよくはんゐない内に立入たちいつて、何を「ようかい」(容喙ようかい)するのぢや、權利侵害罪けんりしんがいざいで起訴きそするぞ」

鷹彦たかひこ「起訴きそするとは、【奇想きそう】天外てんぐわいだ、天涯萬里てんがいはんりの雨あめがフル野ヶ原のがはら、どうで碌ろくな事ことはないからマアマア樂たのしんで、ゆつくりと夜よを日ひに繼ついで旅行りょかうするのだなア」

此時このとき何處いづくともなく、化物ばけものの聲こゑにて、

「神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立別たてわける

化物此處に現はれて 嘘と糞とを立別ける

嘘で固めた岩公の 岩より固い頑固者

荒肝取られて腰打つて 骨を一刻まれた

様な苦しい思ひして 涙をソツと押隠し

泰平樂の減らず口 此行先の荒屋に

又もや俺が待受けて どつと脂を搾つてやるか

アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ、

岩彦「エ、五月蠅い、又しても又しても。併し今度の笑方は正式だ、最前の様

な、キューキューキューと吐かしのると氣持が悪い……オイ化チヤン、笑ふなら、

今の流儀だよ」

再び中空より、化物の聲、

「岩に松さへ生えるぢやないか、喰つて喰はれぬ事はない。アハ、ハ、ハ、ハ、ウ

フ、ハ、ハ、ハ、マハ、ハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ、



鷹彦「オイ岩公、喜べ、あの笑聲は何と思ふ、アーウマイ、アウマイと笑つただらう、巧妙いこと吐かしよるナア」  
岩彦「アーア、ウン……ウン、マーマ、イーイ、イーワイ」

(大正一一・三・一七 舊二・一九 松村眞澄録)

## 第八章 醜の窟(五三四)

夜は漸く明け放れたと見え、天津日の影は見えねども、天地は【ホンノリ】と明るくなつて来た。

鷹彦「オイ岩彦、何うだ、貴様もモウこれで我が折れただらうナア」

岩彦「ヤー今度に限つて徹底的に我が折れたよ。モウ心配して呉れな。併し日の出別の宣傳使は何うなつたのだらう。どうも腑に落ちぬ行動ぢやないか」

鷹彦「貴様は未だソソナ事を言ふから駄目だ。何うならうと、斯うならうと神様

の御經綸が、吾々の如き一兵卒に分つてたまるかい。日の出別命がフル野ヶ原の魔神を平げると仰有つた以上は、屹度先へ行つて水も漏らさぬ經綸をしてござるに違ひないワ。ソナ事は吾々の容喙すべき所で無い。サアサア皆一時に用意だ用意だ」

音彦 「ヤア鷹サン、待つて下さい。腹の蟲が休戦の催促を頻りに志てゐます」  
鷹彦 「オーさうだった。各自に腹を拵へねばならぬ」

と言ひつつ固きパンを出して、各自に嚙じり乍ら旅装を整へ、西北を指して、宣傳歌を歌ひ歌ひ進み行く。

鷹彦 「サア是からが戦場だ。孰れもしつかり戦闘準備に取りかかれよ。音に名高いフル野ヶ原の醜の窟だからのう」

岩彦 「其の窟には、一體ドンナ魔神が居るのだ」  
鷹彦 「夫れは種々雑多の悪魔が棲息しとるのだ。夜前斥候隊が來ただらう」

岩彦 「ウン彼の化か。ナーニアンナ奴位は屁のお茶だ」  
音彦 「油斷大敵だ。小敵たりとも侮るべからず、大敵たりとも恐るるべからず。」

機きに臨のぞみ變へんに應おうじ、變幻へんげん出沒しゅつぼつ、進退しんたい自由じゆうの大活動だいくわつどうを吾々われわれは開始かいしするのだ」

鷹彦たかひこ「ア、神様かみさまは能よく仕組しくまれたものだ。醜しこの窟いはちには六個ろくこの入口いりぐちがある。其處そこへ六人ろくにんと云いふのだから恰度ちやうど都合つがふがよい。各自めいめいに其そのひと一つ宛づつの穴あなを擔當たんたうして進しん入にふするのだナア」

岩彦いはひこ「それは面白おもしろからう、俺おれが一番いちばん槍やりの功名こうみやう手柄てがら。併しかし乍ながら肝腎かんじんの大將たいしやうが見みてゐて呉くれねば、働はたらきごたへが無ないやうな氣きがするぢやないか」

鷹彦たかひこ「貴様きさまはそれだから未まだいかぬのだ。大將たいしやうが見みて居をらうが、居をらうまいが、

自分じぶんの職務しよくむは力ちから一杯いっぱい全力ぜんりよくを傾注けいちゆうしてやればよいのだ」

岩彦いはひこ「それでも蔭かげの舞まひ、縁えんの下したの踊をどりになつては骨折ほねをり甲斐がひが無ないやうな氣きがす

る。ナア梅公うめこう、音公おんこう」

音彦おとひこ「イヤ吾々われわれはソソナことは決けつして思おもはぬ。どうせ碌ろくな勝利しょうりは得えられないのだ

から。下へ手たなことをして居ゐる所ところを大將たいしやうに見みられては却かへつて恥はづかしい。兔とも角かく獅子し

奮迅ふんじんの勢いきほひを以もつて力ちから限りのベストを盡つくし、能あたふ限りの奮戰ふんせんをやるのだ」

梅彦うめひこ「オイ鷹彦たかひこ、何どうだ。此邊このへんで一寸ちよつと休息きゆうそくをして各自めいめいに策戰さくせん計畫けいかくを定さだめ、悠乎ゆっくり

行かうぢやないか。化物退治は夜の方が却つて都合がよいかも知れぬぞ」

岩彦「さうだ。晝の化物は見たことが無い。化物の留守に行つた所で變哲が無い

から。時機を考へて六方から突撃を試みると云ふことにしようかい」

一行六人は風に吹かれ乍ら勢よく進み行く。前方を見れば原野の中央に屏風の

如く長く衝立てる岩山あり、その岩山の頂に一人の人影が立ちゐる。

鷹彦「オイ皆の者、彼の醜の窟の上は何が居るか一寸覗いて見よ。あれは夜前姿

を隠された日の出別の宣傳使に間違ひ無からう。吾々の行くまでにチヤンと惡魔

を封じて遁走せないやうな計略と見ゆる。サアもう大丈夫だ。急げ急げ。オイ岩

公、もうウラル教は思ひ切つただらうな」

岩彦「思ひ切つたも切らぬもあるかい。【テンで】ウラル教ナンか、夢にも思つ

たことは無いわ」

鷹彦「アハ、ハ、ハ、勝手な奴だ。マア何うでもよい。驅歩だ」

一二三と言ひ乍ら、醜の窟を指して驅けついた。日の出別は岩上に立つて聲も

涼しく宣傳歌を歌ひゐる。

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立たて別わける

此この世よを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

直日なほひの神かみの分靈わけみたま

此この世よの曇くもりを吹ふき拂はらふ

日ひの出での別わけの宣傳使せんでんし

雨あめもフル野のヶ原がはらを越こえ

醜しこの窟いはやに來きて見みれば

出口でぐち入口いりぐち塞ふさがりて

百も草もく千さ草ち生さ茂おり

何處いづこをそれと白眞弓しらまゆみ

射向いむかふ的まとも【あら】

風かぜに吹ふかれて立たてる此この窟いはや

岩いはより堅かたき銳心とこころの

誠心まことこころを振ふり起おこし

フサの天地てんちを曇くもらせし

八岐大蛇やまたをろちの分靈わけみたま

醜しこの曲津まがつを言靈ことたまの

珍うづの氣吹いぶきに拂はらはむと

待まつ間程まほじなく鷹彦たかひこや

巖いづの身魂みたまの【あと】五人ごにん

漸やうやく此處ここに現あらはれて

曲まがの砦とりでに立たち向むかふ

あゝ勇いさましや勇いさましや

神かみの力ちからの開ひらけ口ぐち

出口でぐち入口いりぐちわからねど

草くさをわけても探さがし出だし

言こと向むけ和やはさで置おくべきか

言こと向むけ和やはさで置おくべきか

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ大だい地ちは沈しづむとも

神かみに任ませし此この身からだ體だ

神かみの御おんため世よのため

捨すてて甲か斐ひあるわが生いのち命ち

來きたれよ來きたれいざ來きたれ

葎むらくも茂げれる岩いはの戸とを

限くまなく探さぐりし其その上うへに

天あまつ祝のり詞との太ふ祝のり詞と

聲こゑも高たか天あまと詔のりつれば

天あまつ津み御かみ神ひさは久ひさ方かたの

天あまの岩いは戸とを推おし開ひらき

八や重へく雲も四よ方もに吹ふきわけて

誠まことの願ねがひを聞きし召めし

國くにの御み祖おやの大おほ御み神かみ

國くに治は立たちの大おほ神かみに

隨したがひ給たまふ百もも神がみは

山やまの尾おの上へや川かはの瀨せの

伊い保ほ理りをさつと搔かきわけて

吾あが祈ねが言ごとを悉ことごとく

聞きし召めすらむ三あな五なの

神かみの教をしの隈くまも無なく

光ひかり輝かがくフル野の原はら

拂はらひ清きよめむ曲まが津つ靈ひの

醜しこの曲まが業わざ逸いち早はやく

汝が心の眞寸鏡

照して醜の正體を

現はす時ぞ來りけり  
現はす時ぞ來りけり

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましませよ

と聲も涼しく歌ひ興じつつありけり。鷹彦一行は漸くにして此場に安着したり。

岩彦「ホー貴使は日の出別の宣傳使様、夜前は大變にお先へ御無禮を致しました」

「イヤ御無禮はお互ひだ。昨夜は別に變つたことはなかつたかな」

岩彦「ヤー別に大したことはありません。曲津神の斥候隊が一寸やつて來て、岩彦の言靈の氣吹に吹き散らされ、鼠のやうに小さくなつて狐鼠々と消えて了つ

たのですよ。イヤモウ惡神と云ふものは弱いものです」

日の出別「それは結構だつた。併し一寸腰を抜いたでせう」

岩彦「ヤー此奴は變だ。日の出別と見せかけて昨夜の化助奴が、又此處に作戰を

やつて居るのぢやなからうか。ハテナ合點の行かぬ事もあればあるものだ。オイ

こらお化、馬鹿にするない。貴様日の出別命に化けて居よるが、其の手は喰はぬ





鷹彦たかひこ「アハ、ハ、ハ、オイこら岩公いはこう、貴様きさまはよつぽど瓢六玉へうろくだまだ。彼の立派りつぱな日の出でわけ別命のめぐみ様が化物ばけものに見ゆるのか」

岩彦いはひこ「見みえいでかい。定きまつた巾着きんちやく、揚げたお豆腐とうふ。何なにほど俺おれをおどかさうと思おもつたつて豆腐とうふに銚かすがい、糠ぬかに釘くぎだ。坊主ぼうず鉢巻はちまきでチツトもこたへないのだ。俺おれは岩いはより固かたい岩いはサンだ。化物ばけものの百匹ひゃつびきや千匹せんびき位群ぐらむれをなして押寄おしよせ來きたるとも何なにのものかは。ウラル教けうのオツトドッコイ三五教あななひけうの誠まことの神かみの言靈ことたまの氣吹いぶきに依より、氣吹いぶき拂はらひ給たまへ清きよめ給たまへと申まをすことの由よしを天津神あまつかみ國津神くにづかみ神かみ等たち共に小男さをしか鹿かの耳振みみふり立たて聞きし召めせと、畏かしこみ畏かしこみ申まをす。ポンポンだ」

日の出別でわけ「アハ、ハ、ハ、相變あひかはらず面白おもしろい奴やつだ。オイ岩彦いはひこ、本當ほんたうだ、本物ほんものだ。日の出別でわけに間違まちがひは無ないぞ。安心あんしんせい」

岩彦いはひこ「サ―その辨解べんかいが氣きに喰くはぬ。何なんでも嘘うそを言いふ奴やつはうまい事辨解ことべんかいをするものだ」

音彦おとひこ「オイオイ、貴様きさま疑まうたがひが深過ふかぎるぢやないか。さう深ふかはまりしては物ものがさつさと片付かたづいて行ゆかぬ。後家婆ごけばあサンの宿換やどがへのやうに何なんでも手輕てがるに片付かたづけるものだ」

よ  
』

梅彦 『ヤー昨日と云ひ今日といひだ』

駒彦 『本當に皆目一體全體譯がわからぬやうになつて來た。化物退治にやつて來

て何だか化物に玩弄になつてゐるやうな氣がする、又夢ではあるまいか』

鷹彦 『夢々疑ふ勿れ。夢ではないぞ、現ではないぞ』

岩彦 『イヨー此奴又怪しくなつて來たぞ。矢張フル野ヶ原の醜の窟式だ』

日の出別は拍手を打ち聲も涼しく天津祝詞を奏上する。其の聲は天地六合に鳴

り渡るが如く、忽ち雲の戸破れて日の大神は西天に温顔を現はし、一行の迷ひの

雲をさらりと解き給ひける。

ここに岩彦以下の宣傳使は始めて眞正の日の出別命なることを確認し、いよいよ

よ黄昏を期してこの岩窟に進入することとなりける。

(大正一一・三・一七 舊二・一九 外山豊二録)

第九章 火の鼠〔五三五〕

日は西山に傾きしと見えて、さしも陰鬱なる天地に一層の暗澹を加へ、荒野を吹捲る風の音は刻々に激しくなり來たりぬ。

鷹彦「サア、これから愈魔窟の探險だ。充分の食料を用意して了はないと、此窟は琵琶の湖の底を通つてコーカス山に貫通して居るのだから、三日、五日、十日位の旅では豫定の探險は出来ない。先づドツサリと此袋にパンでも格納して、プロペラーに勢ひを付けて、身魂の基礎工事をしつかり撞固め、氣海丹田を練つて進む事としよう。中途になつて腹の蟲が汽笛を鳴らすと困るから準備が肝腎だ」

岩彦「ヨウ、エライ決心だ、モウ直に行くのか」

鷹彦「ナニまだまだ時機が早い、子の刻限だ。此六ツの岩穴は全部塞いであるから一寸やそつとには分らぬ。まして斯う夜中になつて來ては猶更の事だ。日の出別命の宣傳使によつて子の刻になれば、眞赤氣の鼠が現はれて案内する事となつてるから、マア夫迄待つ事にしよう」

音彦「サア、是れからが正念場だ。假令百千萬の惡魔、邪神、一團となつて攻め來る共この音チャンは言靈の神力に依つて、木つ葉微塵に打ち伸ばし、叩き潰して仕舞ふは譯はない」

鷹彦「オイコラ音公、今からさう逆上るな、キニーネでもあれば頓服でもさせて

やるけれど生憎持合せがなくて仕方がない」

音彦「ナ―二惡魔を頓服させるのだ。ヤア此邊が穴恐ろしい穴の口らしいぞ。刻

限の來る迄は、稻荷サンの晝寢とやらうかい」

龜彦「何だ、怪つ體な事を言ふぢやないか、稻荷の晝寢とは何の事だい」

鷹彦「アハ、ハ、ハ、穴のふちにころりだ。それにしても、日の出別の宣傳使の姿

が又もや紛失して仕舞つたぢやないか、一行中の大巨頭が居らなくなつては、指

揮命令がうまく行かない。何程岩公が萬丈の氣焰を上げた所で風の如うなものだ。

危機一髪の一髪、ハツハツになつて、直にベソをかくのだから頼りないものだ」

岩彦「オイオイ、お手際拜見してから後に言うて貰はうかい、貴様の氣焰とは譯が違ふのだ。朝つばらは滅茶矢鱈に「はつしやい」で、晝前になるとヤアモウ機

械の油が切れたの一步も行進が出来ないなぞと、弱音を吹きよるからコンナ弱い奴を途連れにして居ると、同行者も竝大抵の事ぢやない。忌憚無く駄法螺は噴火口から天を焦す如うに噴出させるなり、序に運の悪い先ばしりの糞をポンポンと振れ撒きよるなり、嗚呼糞慨の至り屁口千萬だ

鷹彦「オイオイ、ソナ馬鹿話を言つてる處ぢやないぞ。それ見る、茅原の中を昨夜出た奴が……」

岩彦「ヤ又出よつたな。今度は化の奴、位置を變更しよつて、味方の間近く攻寄つたりと云ふ光景だ。オイ化サン、昨日の岩公とチツト岩公が違うのだい。此醜の巖窟をよく見よ。俺の腕は正に斯の通りだ。何時でも愚圖々々と洒落た事をしよると已むを得ない、直接行動を取るから覺悟致せ」

化物「アハ、俺だ俺だ、岩公の膽試しに一寸化けて見せてやつたのだよ」

岩彦「さういふ貴様は一體誰だ」

化物「人を「こま」らす駒サンだ。それでも貴様此暗に俺の顔が見えるのかい」

岩彦「オツト待つた、見えるでもなし、見えぬでもなし、何だか亡國的悲調を帶

びた異聲怪音が耳に映ずるのだ。俺の耳は重寶なものだぞ、耳で見ても聴くのだから化物よりも上手を越す宣傳使さまだ。馬鹿な真似をして後でベソをかくな。何だ蝗か、「ばつた」の様に草叢にもぐり込んで、あつちやに飛び、こつちやに飛び、飛びあるきよつて、それだから飛沫ものと云ふのだ。まるで際物師の如うな藝當をやらかして、膽力無雙の岩さまを恐喝しようと思つたつて其手は喰はぬぞ」

駒彦「アー俺も此岩窟へ探險と出かれば、ドンナ奴が出て来るか分らないから一寸化物の豫習を遣つてみたのだ。どうぞ今後は御鼻屑にお引立を願ひまして、引續き不相變豫習を願ひます」

岩彦「洒落どころかい、戰場に向つて何をソナ氣樂な事を言つて居るのだ。ソナ事では屹度途中に屁子垂れる事は確定的事實だ。貴様のしくじる事は既に已に閻魔の登記簿にチャンと印紙を貼つて登録済になつて居るのだ」

駒彦「オイオイ、貴様何を言つて居るのだ。登録済だの登記簿だのつて、ソナ言葉は基督降誕後二十世紀の人間のぬかす事だ。今は紀元前五十萬年の昔だぞ」

岩彦「過去、現在、未來を超越した靈界の物語だ、ソナ事は當然だよ。チツポケな時代だとか、言葉だとかに囚はれて居る様な小人物で無限絶對無始無終の神界の經綸が分つてたまるものかい。學、古今を壓し、知識東西を貫くと云ふ三五教の新宣傳使だよ。貴様もちつと文明の空氣を吸ふたが好からう」

駒彦「何だ、不〔分〕明の事をよう囀る奴だ。今日の原始時代に、文明の糞のつて尻があきれるワイ」

岩彦「文明の逆轉旅行と云ふ事を知らぬのか。是れでも、マア見て居れ、地上の人間が豆の様な膽玉になつた二十世紀と云ふ非文明の世の中が出て來ると、何處かに妙な奴が現はれて屹度吾々が今採りつつある行動を、寢物語にほざく奴が出來て來るかも知れぬのだ。その時にまた歴史は繰返すと云うてその時代の人間が、これは非文明とか、非眞理とか、屁理窟に合うとか合はぬとかほざく様なものだ。マアマア黙つて時の移るを待つたが好からうぞい」

またもや一天俄に暗く逆巻く雲の渦、暴風しばく雨の槍衾に包まれにけり。

音彦「ヤ、、、、、又どつさりと【あめ】利加が【フラン】西とけつかるワイ。鼠

の奴早く遣つて来て岩窟を吾々に明示して呉れないと、こつちの方が先に濡れ鼠になつちまふわ」

駒彦「其態はなんだ、猫に追はれた鼠のやうな腰付をしよつて、ニヤンチウ不格好な情ない【ていたらく】だい」

鷹彦「オイオイ言靈の奏上だ。貴様等は暇だと直にはしやぎよつて騒がしくて仕様がな。嵌口令の代りに間斷なく祝詞奏上宣傳歌の合唱を嚴命する」

岩彦「言はしておけば際限もなき其暴言、貴様の言ふ事を聞くものは、この廣い天地の間に鼠一匹あるものかい。あまりメートルを上げ過ぎると汽罐が破裂するぞ」

此時日の出別命は又もや忽然として岩上に現はれける。

一同「彌陀の來向だ、生神の顯現だ、有難い有難い」

岩彦「モシモシ日の出別命様、ドウゾ早く火鼠の御出現遊ばすやうに幹旋の勞を執つて下さいナ」

「ヨシヨシ、今だ」



と云ひながら、日の出別命は岩上に密生せる灌木を幹打ち切り末打斷ちて、腰の細紐を解きこれを縛つて弓を拵へ、茅の莖を切つて矢を作り、東西に延長せる岩山に向つて、發矢と射放ちける。

「サアよほど天も紅くなつて來た。いま私の射放つた矢を拾つて來い。さうすれば入口がはつきりと判るのだ」

鷹彦「これから十萬年未來に於て、大國主神が矢を拾ひに原野に往つた様な古事ではない未來の事實だ。拾ひには行きませうが、其時のやうに原野に火をかけて焼かれては困りませう」

日の出別「マア吾々の命のまにまに探して來るのだよ」

岩彦「サアサ、是れから流れ矢の探索隊編成だ。何れ日の出別と云ふから、火を出して焼くには違ひない、さうすると、内は「ホラ」ホラ外は「スブ」スブと鼠の先生が遣つて來ると云ふ段取だナ。全隊進め、オ一二三」

と暗雲に驅け出したり。

日の出別は直ちに燧石を取り出し折柄吹き來る暴風に向つて火を放てば、忽ち

轟々たる音を立て火は四方に燃え擴がりぬ。嗚呼鷹彦以下の運命は如何に成り行くならむか。

(大正一一・三・一七 舊二・一九 谷村眞友録)

### 第三篇 探險奇聞

#### 第一〇章 巖窟(五三六)

日の出別の射放ちたる矢を拾ふべく、鷹彦、岩彦一行は、先を争うて我一に功名せむと、萱野を分けて進み行く。

岩彦「この萱野原へ萱製の矢をたつた一本位射放つて、それを拾つて來いと云う

たつて、天然坊の星あたり、何だけ探しても無ければもう駄目だ。失望落膽の淵

に沈むとは、コンナことを云ふのだらうかい

龜彦 際限もなきこの萱野原を、僅に一本の萱製の矢を探すと云つたつて、到底

不可能の大事業だ、竿竹をもつて空の星をがらつよりも頼りない話ぢやないか

鷹彦 又弱音を吹きよる。これが身魂の審めだ。何でも構はない、日の出別の

宣傳使のおつしやる通り、唯々諾々として遵奉するのだよ

駒彦 あまり無理ぢやないか

鷹彦 親と主人と師匠は無理を云ふものだと思つて居れば好いのだ。滅多に吾々

を親や師匠が窮地に陥没さして、痛快を叫ぶと云ふやうな事はなさる氣遣ひがな

い。何處までも徹頭徹尾命のまにまに矢探しをするのだよ

駒彦 〆ヤヤコシイ、矢探しだナ。【矢矢】暫く思案に暮れにけりの爲體だ。オイ

オイ大變だ、火が燃えて來るぞ。これだけ生へ茂つた野原に火をつけられ、吾々

は耐つたものぢやないワ、本當に日の出別の宣傳使は無茶ぢやないか、矢張り彼

奴は怪しいと思つて居たよ

鷹彦「吾々を奈落の底に陥穽すると云ふ悪神の企みに乗つたのだ。エ、もう自棄  
糞だ、焼け死する處まで荒れて、荒れて、暴れ廻してやらうかい」

斯くいふ折しも、火は四方八方より燃え猛り、黒煙濛々として一同を包んで了  
つた。梅公、音公兩人は、

「暑いワイ、煙たいワイ、苦しい。如何しよう」

鷹彦「また弱音を吹くな、心頭を滅すれば火もまた涼しと云ふ事があるわ。斯う  
いふ時に、火に對する水だ。乾く事なく盡る事なき神の尊き水をもつて、猛火を  
消すのだ。これが吾々の身魂の試練だよ」

かく言ふ折しも火は足許へ燃えて來た。進退谷まつた一同は一處に集まり互に  
抱きついて地團駄踏んで居る。忽ち地は「バサリ」と陥落し、土中に一行は陥つ  
た。火はその上を何の容赦もなく咆哮しながら燃え過ぎにけり。

岩彦「ア、これで分つた。九分九厘叶はぬと云ふ處で神様が助けてやると仰有る  
のは茲の事だ。火鼠を現はして教へてやるなぞと、本當の赤い鼠が出るのかと思  
つて居たれば途方途徹もない大きな火鼠だつた。火の通つた跡は焼け殻が皆黒く

なつて、炭になりよる。それで火鼠と仰有つたのだな」

鷹彦「ホー中々貴様は悟りがよいワイ。何だ未だブクブクするぢやないか。地獄の底まで陥没しても困る、好加減に止めて貰はぬと、過ぎたるは猶及ばざるが如しだ」

何處ともなく、「クク、く、く、」

一同「ヤア、あれは鼠の鳴き聲ぢやないか。彼方の方に往つて見ようぢやないかと聲を尋ねて一同は進んで行く。果して毛の緋色を帯びた古鼠が萱の矢を喰はへ

てこの處に現はれ、

「内はホラホラ、外はスブスブ」

と鳴いたきり姿を消して了つた。一同は「ドン」と足踏する途端、ズドンと音がして深い穴に落ち込んだ。見れば其處には六個の巖窟が開いて居る。

鷹彦「ヤア此處だ此處だ、日の出別命もなかなか偉いワイ、矢の落ちた處が矢張この巖窟の入り口だつた。悪魔と云ふものは、本當に注意周到なものだ、コンナ處に入口を拵へておけば誰も氣の付く筈はない、至れり盡せりだ。サアこれから

約束やくそくの通りとほ各自めいめい分擔ぶんたんして探險たんけんに出でかけるのだだ」

六人ろくにんは各おのおの一個いつこの穴あなに姿すがたを隠かくした。比較ひかく的高たかく横巾よこはばの廣ひろい巖穴いはあなである。どうした  
ものかこの巖窟がんくつの中なかは地中ちちゆうにも拘かかはらず非常ひじやうに明あかるい。六人ろくにんは各おのおの一つの穴あなを目蒐めがけて進すすみ行ゆく。

日ひの出別でわけの火鼠ひねずみ荒野あらのに現あらはれて

迷まよへる人ひとの心こころを照てらせり

時々ときどき穴あなと穴あなとの巖壁がんぺきに風通かざとほしが開あけてある。六人ろくにんは六個ろくこの穴あなを二三町にさんちやう進すすむと其そ  
處こに非常ひじやうに廣ひろい場所ばしよがある。之これより先さきは堅固けんごなる巖いはの戸とが鎖とぎされて進すすむ事ことが出來でき  
ない。六人ろくにんは期きせずして一處ひところに集あつまり、

鷹彦たかひこ「ヤア皆みなの連中れんちゆう、如何どうだつた。別べつに變かはつた事ことは無なかつたか」

龜彦かめひこ「あつた、あつた、大おほいにあつた」

鷹彦たかひこ「何なにがあつたのだ」

龜彦かめひこ「巖壁がんぺきの兩方りやうほうに覗のぞき穴あなが澤山たくさんあつたのだ」

鷹彦「何を云ふのだ、大層らしい。どの窟にも共通的に空気穴が開いて居るのだよ」

岩彦「之では約らぬぢやないか、相手なしの戦ひは出来やしない。何だ、醜の窟に化物が居るナンテ人を馬鹿にして居る。それだから世間の噂は當にならぬといふのだ」

鷹彦「イヤ、これからが正念場だよ。ここはホンの序幕だ。何十里とも知れぬ程あると云ふぢやないか、どこぞこの岩壁を力一杯押して見ようか。何でも澤山の戸があると云ふ事だから、ア、さうだ、一つ押してやらう。オイ皆一度に總攻撃だ」

と。力一杯「ウン」と押した。龜公の押した岩は、暖簾を押しやうに手もなく開いて、龜の勢あまつて巖穴の中へ飛び込んだ途端に幾丈とも知れぬ陥穽にザブんと音を立てて落ち込んだ。

龜彦「ヤヤ大變だ。皆の奴俺を助けて呉れぬかい」

五人は穴の傍を一足、一足、指に力を入れながらソツと向ふに渡り、

「ア、思はぬ不覺を取つた。これだから氣許しは一寸も出来ないと言ふのだ」

鷹彦 「何とかして龜サンを救うて上げて遣らねばなるまい」

龜、井戸の底より、

「オイ、オイ、何とかして呉れないか」

音彦 「お前は名から龜サン、水の中は得意だらう、マア悠乎と水でも呑んで寛ぎ

たまへ。突差の場合よい智慧も出ないから此井戸の傍で山の神ぢやないが、井戸

端會議を開會してお前を助けるか、助けないかといふ決議をやるのだ。マアマア、

閉會になる迄辛抱して呉れ」

龜彦 「ソナ氣樂な事を云うて居れるかい、一時も早く救ひ上げて呉れ」

岩彦 「エ、矢釜敷い云うな、手の付けやうが無いぢやないか」

龜彦 「手の【つけ】やうどころか、足も頭も體中、【浸け】て居るぢやないか」

鷹彦 「サアサア、臨時議會の開會だ、これから議長の選舉だ。院内總務は誰にし

ようかな」

龜彦 「ア、辛氣臭い、洒落どころぢやないわ、冷たくなつて仕方がない、體も何



も氷結してしまふわ」

岩彦「氷結したつて仕方がない、此方は多數決だ。五人を兩派に分けて、三人と

二人だ。鷹サンは議長といふ格だ」

鷹彦「エ、諸君、遠路の處よく出席下さいました。今回臨時議會を開會いたしました

したに就ては、最も急を要する事件で御座いました、國家危急存亡の場合、何卒

諸君の慎重なる御審議を願ひ度いのです。抑々今回の議案提出の要件は、御存じ

の通り、元ウル教のへボ宣傳使、龜公と云ふ男、醜の巖窟の探險に出かけ、實

に短見淺慮にも思はぬ不覺を取り、深く井中に陥没致し、生命旦夕に迫る、と云

ふ場合でございます。何卒諸君の箱入の知識を絞り出されて、彼が救濟の策を講

じ最善の努力を盡されむ事を希望いたします」

「ヤア賛成々々」

と、四人は一度に拍手をもつて迎へる。龜公は井戸の底より、

龜彦「ヤーイ、早く助けぬかい。死んでからなら助けても役に立たぬぞ」

鷹彦「何だ。井戸の底から矢釜敷云ふな、議會の神聖を汚すでないか。如何でせ

う、諸君、先決問題として龜公を救済すべきものなりや、將又このままに見殺に

すべきものなりや、起立をもつてお示し下さい」

音彦「皆すでに起立して居るぢやありませんか」

鷹彦「ヤア、これは間違つた。議員一同そこにお坐り下さい。賛成者は起立を願

ひます。龜彦を助けると云ふお心の方は起立して下さい、救はないと云ふ御意見

の方はそのまま坐つて居てもらひませう。一二三」

鷹彦「ヤア起立される方は駒サン一人ですか、これは怪しからぬ。然らば議長が

起立いたしましたませう」

岩彦「議長横暴だ。多数決多数決。可とする者二人、否とする者三人」

鷹彦「多数黨横暴極まる。議會の解散を命じませうか」

龜、井戸の底より泣き聲を出して、

「ヤイ、馬鹿にするない、洒落どころかい。早く助けて呉れないか」

岩彦「この井戸の周圍は皆この岩サンで固めてあるのだ。岩に手をかけ足をかけ

登つて來ればよいのだよ」

龜彦 『登れと云つたつて、手も足も引つかかる處がないのだよ』

岩彦 『さうだらう、手足が短くて背の甲羅がつかへて登れぬのだらう。モシモシ

龜よ龜サンよ、世界の中にお前ほど、體の不自自由なものはない、アハ、ハ、』

龜彦 『何とおつしやる兔サン』

鷹彦 『危急存亡の場合、命の瀬戸際になつて、洒落るだけの餘裕があるものなら、

サツサと登つて來い』

龜彦 『皆サン大きに憚りさま。上から暗くて見よまいが、立派な段梯子が刻んで

あるわ、アハ、ハ、ハ、』

と笑ひながら悠々として井戸から登つて來た。

岩彦 『こいつ一杯喰された。イヤ此方が臨時議會まで開いて大騒動をやつて、澤

山の機密費を使つたのは、吾々の方が陥穽に放り込まれたやうなものだ。有もせ

ぬ脳味噌から機密費を絞り出して馬鹿らしい。この度の議會は歳費五割増だ。ア

ハ、ハ、ハ、』

斯く笑ひ【さざめく】折しも、前方に當つて何とも形容の出來ないやうな異聲

怪音頻りに一同の耳朶を打つ。

不思議や一行の身體はその響と共に、電氣にでも感じたやうに、身體の各部に震動を感じ、やや痲痺氣味になつて來た。

鷹彦「ヤア、此奴は大變だぞ、オイオイ皆の者、緊禪一番、大に活動すべき時期が切迫した。何はともあれ、神言だ神言だ」

一同は聲をそろへて、天津祝詞を奏上する。

(大正一一・三・一七 舊二・一九 加藤明子録)

## 第一章 怪しの女(五三七)

一同は天津祝詞を奏上し終つて、怪しき聲する方に向つて強行的前進を續けた。道はおひおひ狭くなつて來た。

岩彦「ヤア狭いぞ、まるで【羊腸】の小徑だ、氣をつけよ」

梅彦「【窈窕】嬋研たる美人の嬌音が聞えて居るぢやないか、中々もつて前途有望だ」

音彦「何だ、氣樂さうに魔窟の探險に來てゐながら窈窕の美人もあつたものかい。何處までも貴様はウラル式を發揮する男だな」

梅彦「三歳兒の魂百まで通せだ、雀百まで踊りを忘れぬ。況んや青春の血に燃ゆる梅彦に於てをやだ」

岩彦「アハ、ハ、それにしても最前の怪しき聲は何だつたらう。僕甚だ以て諒解に苦しまざるを得ないわ」

龜彦「あれは魔神の囁きだよ。天津祝詞の言靈に旗を捲き矛を戟めて豫定の退却と出掛たのだよ。オイオイ段々狭くなつて頭がつかへるぢやないか」

鷹彦「フルのケ原の眞ん中に聳り立ちたる巖の山

醜の巖窟の六つの穴 探險せむと來て見れば

六道の辻か知らねども 此處に一行廻り會ひ

力ちから限かぎりに岩がん壁へきを 押おした途と端たんに龜かめ彦ひこが

思おもひ掛がけ無なき陷おとし穽あな 呻うなりをたてて直ちよ線せんに

ザンブと許ばかり墜つ落らくし 泣なかぬ許ばかりに聲こゑたてて

慈じ悲ひぢや情なさけぢや宣せん傳でん使し 何どう卒そ生い命のちを助たすけと

吠ほえ面づらかわく可を笑かしさに 吾われ等ら五ご人にんは逸いち早はやく

井み戸ど端た會く議わいぎを開か會くわいし 多た數すう決けつにて龜かめ彦ひこを

救すくふは全ぜん然ぜん不ふ可か能のうと 決けつ定ていしたる時ときも時とき

なまなまくら海なまこ鼠この龜かめ彦ひこが 吠ほえて居ゐるかと思おもひきや

素そ知しらぬ顔かほにてムクムクと 階かい段だん上のぼり吾わが前まへに

現あらはれ來きたる可を笑かしさよ シしツツの巖いは窟やの魔ま窟くつ原はら

醜しこの魔ま神がみを言こと向むけて 世よ人びとの害がいを除のぞかむと

語かたらふ折をりしも何ど處ことなく 呂ろ律れつも合あはぬ言こと靈たまの

ど拍へう子しぬけたる呻うなり聲こゑ これこれは「てつきり」曲まが神かみの

惡いた戲づら事ことと推す断だんし 天あま津つ祝のり詞とを唱となふれば

流石に猛き曲津見も 煙の如く消え失せて

跡しらすと解けて行く 此處に一行六人は

足を早めて前進し ヤツト極つた羊腸の

小徑の岩穴辿りつつ 行けども行けども限りなく

逸る心の細道を 長蛇の陣を布きつつも

いよいよ此處に喇叭口 開いて嬉し廣庭に

來りて見ればあらず不思議 春の彌生の鶯か

秋野にすだく鈴蟲か それより清き宣傳歌

何處ともなく聞え來る ア、訝しや訝しや

神が表に現はれて 善と悪とを立て別ける

此世を造りし神直日 心も廣き巖窟の

魔神の征服面白し ア、面白し面白し

進めよ進めいざ進め 如何なる惡魔の來るとも

大和心を振り起し 巖の雄健び踏み健び

嚴いづの嘖ころび讓おこを起おこしつつ

一い歩つも退しりぞくこと勿なかれ

進すすめや進すすめ嚴いはの道みち」

と歌うたふ折をりしも傍かたはらの岩がん壁べきより雪ゆきを欺あざむく婉ゑん麗れいなる美び人じんの顔かほ、チラリと此こ方なたを覗のぞき居ゐる。

梅うめ彦ひこは敏さとくも此この顔かほを見みて、

「ヤア大たい變へんだ、出でたぞ出でたぞ。ドツコイシヨ」

と言いひながら尻しりもち餅もちを搗つく。

「ヤアヤア、待まつた待まつた。出でた出でた」

鷹たか彦ひこ「出でたとは何なんだ。別べつに何なんにも居ゐないぢやないか」

梅うめ彦ひこ「居ゐないの、居ゐるのつて、意い外ぐわいの奴やつが居ゐるのだもの」

鷹たか彦ひこ「何なにが居ゐるのだい」

梅うめ彦ひこは傍かたはらの岩いは穴あなを指ゆびさし、

「マアマア、あれを見みい」

鷹たか彦ひこ「なんだ梅うめ公こう、コナ處ところに腰こしを下おろして、早はやく立たたぬかい」



梅彦「イヤあまり日は永し、綺麗な花盛りだから一寸ここで腰打ち掛けて花の見物だ。貴様等が仕様も無い窈窕嬋研たる美人だなどと言ふものだから、お化けの奴、御注文通り別嬪になつて化けて出よつたのだよ」

岩彦「アハ、ハ、ハ、此奴チツト逆上して居るな。何にも居はせないぢやないか。

歩きもつて夢を見る奴が何處にあるかい」

梅彦「夢ぢや無いぞ、現ぢや無いぞ、幻ぢや無いぞ。ゆめゆめ疑ふな」

音彦「ヤア此奴變だぞ。オイ梅公、貴様はバのケぢやないか。フルのケ原の妖怪

そつくりのロジックを使ひよつて」

梅彦「ヤア決して決して、妖怪どころか、マアその岩の穴を覗いて見よ。あの美

しい聲の出所はその穴の中だよ」

駒公は岩に掻きつき背伸びをし乍ら、梅彦の指さした岩壁の穴を一寸覗き「ヤ

ア」と言つたきりズルズルドスン、

「アイタ、イヤもう如何にも斯うにも奇つ怪奇つ怪、奇妙【きてれつ】、古今

獨歩、珍無類金覆輪の覆輪々々だ」

岩彦「何だ、二人共あの穴を覗いては怪つ體な事を言ひよる。どら俺が一つ嚴重に臨檢してやらう」

と言ひ乍ら又もや岩壁に驅け上り、一寸中を覗いて見て、

「ヤア居る居る、素敵滅法界な魔性の女だ」

鷹彦「ドレドレ、俺が一つ魔性の女の首實檢と出掛けてやらう」

岩彦「ヤア、待った待った、梅公に駒公の奴、腰を抜かしよつた様な美人だ。成

功したのはこの岩サン計りだ。先取權は俺にある。見るなら見せてやらぬ事は無

いが、何程コンミツシヨンを出すか」

鷹彦「アハ、、、、貴様たちは化物であらうが何であらうが、女でさへあれば良

いのだな」

岩彦「天地開闢の初めより女ならでは夜の明けぬ國だ。これや又何とした有難い

事だらう、これだから旅は良いもの辛いものと言ふのだい」

鷹彦「ともかく見る丈け位は無料でもよからう。別に俺の慧眼で一瞥したと言つ

たとて、それがために瘦るものでもあるまい。また春の氷の様に溶けもせまいか

ら  
』

音彦 『鷹彦サン、龜公と三角同盟を結んで此奴等の堅壘を粉碎し、一つ其美人を

占領したら如何ですか』

岩彦 『占領しようと言つたつて岩の中に居る岩姫だ。如何する事も出来やしない』

この時又もや美人は巖の口に麗しき面貌を現はし、ニタリと笑ひ乍ら、

『神が表に現はれて 善と悪とを立て別ける

この世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直し宣り直せ』

岩彦 『ヤアこの化物、洒落てやがる。三五教の宣傳歌を歌つてるぢやないか。チ

ツト合點がゆかぬぢやないか』

鷹彦 『諸手を組んで稍そり返り乍ら、

鷹彦 『ウン、ウン、オイ一同の宣傳使、これや何でも三五教の女宣傳使に相違

ないぞ」

岩彦「入口も無いのに、コンナ細い穴から化物ぢや無ければ、出入する事が出来ぬぢやないか。これやこれや「てつきり」バの字にケの字ぢや」

鷹彦首を振りながら、

鷹彦「イヤイヤ、待て待て。沈思黙考する丈の餘地は十分にある。何でも豪膽な宣傳使が吾々の如く探険にやつて来て魔神の計略にかかり、岩の中に閉ぢ込められて居るのかも知れない。一つ力限りこの洞の岩壁を押し見ようか、何處かに隠し戸があるに違ひないぞ」

音彦「あまり力入れて押すと、また龜公の様に空中滑走をやつて井戸の底に着水するかも知れない。「やあわり」と押したがよからう」

岩彦「何、躊躇逡巡する必要があるか」

と言ひ乍ら、あたりの岩壁を金剛力を出してウンウンと押し見て、

「ア、如何しても入口がハッキリせぬわ、これや何でも仕掛があるに違ひない。ヤア此處に妙な石が落ちて居る、之が仕掛かも知れぬぞ」

と言ひつつその石を片手を伸ばしてグイと取り除けた。忽ち両手の這入る様な恰好な穴があいた。岩公は両手を引っかけた儘ウンと背伸びをする途端に、厚さ四五寸許りの石の一枚戸が剥くれて来た。

「ヨ、コンナ事をやつてゐる。何でも入口はこの邊にあるに違ひないぞ。オイ皆の者、サア来た来た」

と言ひ乍ら穴を潜つて一間許り前進すると又もや岩の戸にピタリと止まつた。岩彦は力限り岩の戸を向ふへ押した。途端に岩戸は思ひの外軽く開いた。一同は先を争うて岩戸の中へ進み入るのであつた。岩壁には足掛が刻まれてある。それを一歩々々登つて行くと二坪ばかりの平面な處がある。その中央に容色婉麗なる以前の美人がやや俯向き、羞しげに坐つてゐた。岩彦は見るより「ヤア」と驚いて倒れむとしたが、「ドツコイ」と氣を執り直し全身に力を籠め乍ら、聲まで震はせ、

岩彦「ヤイヤイ、ヤイ、一體全體貴様は何物のお化けだ。大蛇か、鬼か、狼か、古狐か、古狸か、もう斯うなつては佛の椀ぢや、かなはぬぞ。有り態に白状致せ。

吾々六人の勇士に包圍されては、もはや遁走する事も出来まい。サア尋常に白旗を掲ぐるか、開城するか

女「ホ、之はしたり俄宣傳使の岩彦サンとやら、大變なお元氣で御座いますこと」

岩彦「益々合點のゆかぬ大怪物、コラ、貴様何程うまく化けてもこの方の天眼通で、チヤンと調べてあるのだ。お氣の毒乍ら貴様の尻を見い。大きな尻尾が見えてるぢや無いか」

女「ホ、何の尻尾が見えて居りますか。大蛇ですか、狼ですか、狐か、獅子か、狸か、猫か、鼬か、鼠か、あてて御覽」

岩彦「ナ、何を吐きよるのだ。圖太い化物奴が。一體俺を誰方と思つてけつかる」

女「ホ、誰方でもありません、此方サンぢやと思ひます。オ、可笑し、【お】元氣な【お】身體、【お】達者相な【お】姿」

岩彦「コラ、俺が尾が見えると言つたらよい氣になつて、【お】元氣だの、【お】

達者だのと人の言葉の尾につけて横道者奴が。鬼、大蛇狼の何奴かの【お】化け奴が」

女「ホー之は鷹彦サン、梅彦サン、音彦サン、龜サン、駒サン、昨日から此處に

お待ち受けして居ましたよ」

鷹彦「ヤア、さう言ふ貴女は何れの方でござるか、拙者一向一面識もござらぬ」

女「オホ、々々、貴方は三五教の宣傳使、妾の姿をお覚えぢやありませんか」

鷹彦「ホー一向合點の蟲が承諾しませぬワイ。一體全體貴女様は、何れの神様で

ございますか」

女「鷹サン、ママア氣を落ちつけて妾の素性を洗つて御覽、それが分らない様

な事では三五教の宣傳使も駄目ですよ。醜の巖窟の征服もさつぱり零ですよ」

岩彦「オイオイ梅公、音、龜、駒、貴様何だ。何時もベラベラ口車を廻轉させる

癖に今日に限つてその沈黙は何だい。【まさか】汽罐の油がきれたでもあるまい

に、俺計りに談判させよつてチツト交渉したら如何だい」

女「オホ、々々、あの岩サンの氣張り様、妾はあまり可笑しくて横腹が痛みます」

岩彦「痛まうと痛むまいと俺の知つた事かい。コンナ魔窟の中に巢剝ひよつて吾等を誑らかさうと思つても、ソナ者に瞞著されるものと選を異にするのだ、あまり巫山戯るない。良々加減に正體を現はさぬと此岩サンの鐵拳がお見舞ひ申すぞ」

女「オホ、貴方がたは能く能く分らぬ人ですね。二つのお目は銀紙ですか、節穴ですか、不思議な先の見えぬお目だこと。オホ、優しい顔をしようつて失敬千萬な事を

岩彦「エーイ、怪つ體の悪いこのお化け奴、優しい顔をしようつて失敬千萬な事を言ひよる太い奴だ。もう此上は勘忍袋の緒が切れた。サア覺悟致せ」

女「オホ、」

鷹彦「ハテナ、此奴は只の狸ぢやあるまいな」

女「ホ、」

岩彦「狸どころか、大化物の親玉だ。狸なら八疊敷に居る筈だ。僅かに四疊敷位な巖窟に棲んでる化物だから大方土蜘蛛の精だらう、ヤイ土蜘蛛、俺を何時までも甘いと思つて居るか、甘けら砂糖だと思ひよるのか。何だ、甘つたるい聲を出



しよつて、彌生の鶯の眞似をして、オホ、と、それや一體なんの藝當だい。  
眞實に荒男の六人も向ふに廻して悠悠自適、國家の興亡吾不關焉と云ふ様な落着  
き拂つたその腰つき、小癩に觸る代物だナア

女「ホ、、、、、」

この時又もや宣傳歌が聞えて來た。宣傳歌の主は外より岩穴を一寸覗いて見て、  
「ヤア鷹サン、岩サン、此處に居つたのか」

岩彦「ヤア貴神は日の出別命様、ようマア來て下さいました。之だから神様は九  
分九厘まで行つたら助けてやらうと仰しやるのだ。サアもう大丈夫だ。サアお化  
け、何なつと吐け、もう叶はぬぞ」

と俄に肩を聳やかす其可笑しさ。

女「ホ、、、、、」

(大正一一・三・一七 舊二・一九 北村隆光録)

第一二章 陷穽（五三八）

日の出別神の出現に、形勢もつとも危かりし岩公は、俄に元氣づき、

岩彦「サア妖怪變化の魔性の女、何と言つても、モウ駄目だ。三五教の宣傳使の

大將が現はれた以上は、最早運の盡きだ。どうだ、神様の經綸と云ふものは、用

意周到なものだぞ」

女「妾は、あなたの様な強いお方には尾を巻きます。モウ是で御免を蒙ります」

岩彦「態ア見やがれ、大蛇の化者奴が。尾を巻くと自白したぢやないか」

女「ヤア日の出別命様、能う迎へに來て下さいました。岩サンのやうな分らずや

は、今後は決して、係り合はない様にして下さい。此方は優勝劣敗、弱肉強食、

身勝手千萬な、非人道的、デモ宣傳使ですから………」

岩彦「ヤイヤイ、馬鹿にするない、能いかと思つて………、女に似合はぬ暴言

を吐く奴だ」

女「さようなら、ゆつくりと御休息なさいませ」

と云ひ乍ら、岩壁の細い穴から、スツと煙の様に脱けて了つた。

岩彦「ヤア案に違はぬ妖怪變化の正體を顯はしよつて、アンナ首も這入らぬやうな穴から出て仕舞よつた。オイ鷹公、音公、梅公、龜、駒どうだ、俺の天眼通は偉いものだらう。鷹公の奴め、瞞されよつて、丁寧な言葉を使つて居たが斯うなる以上は貴様の眼力も底が見えた」  
鷹彦「アハ、ハ、ハ、彌之助人形の空威張りはやめてくれ」

斯く云ふ中、ガクリと異様な音がした。

岩彦「ヤア變な音がしたぞ、一體コラどうだ」

女は外より白い顔を、岩壁の穴から、ニヨツと突出し、

女「岩サン、ママアア十日も二十日も百日も、緩りこの岩窟に御逗留遊ばして下さいませ入口はポンと戸を閉めてありますから、外から悪者の這入る氣づかひもなければあなた方が脱けて出る氣遣ひも有りませぬよ。ナンにも獻げるものはありませぬから岩の油なつと舐つて、……ネー……温順しく御修行をなさいませ。妾は日の出別命サンと、手に手を把つて……オホ、ハ、ハ、ハ、ア嬉し、マ

アゆつくりお寛ぎ遊ばせ。アバヨ

岩彦「ヤア大變だ、最前の音は、入口の戸を閉めよつたのだな。こりや斯うしては居られぬワイ」

女「居られなくつても、斯うして居らねば仕方がありますませぬよ。イヤ出方がありませぬワ。お前サン等の出方に依りては、此方にも亦、何とか仕方が有りませう」

岩彦「イヤア、強壓的強談だ、人は見かけに依らぬ者、優しい顔をして、蚤一匹殺さぬやうな容子で、心の中は夜叉の様だ。オイ一統の者、入口があつたら、キツト出口が有るに違ひないぞ。この穴から一つ、手を掛けて、引くなと、押すなと

やつて見ようかい。六尺の男子が、纖弱き女の一人に監禁されて、どうぞ許して下さいなぞと、言はれた義理ぢやない。………モシモシ日の出別命さま、貴神どうかして下さらないか」

「ヤア、岩サンマアゆつくり御休息なさいませ、……ヤア女のお方、是から天國へでも旅行致しませうか」

女「有難うございます、妾貴方と、たとへ半時でも、一緒に連つて歩かして貰へ

ば、死んでも遣る事は有りませぬワ、ホ、ホ、ホ、

岩彦「ヤアまた吐かしたりな吐かしたりな、」妾アంతと半時でも一緒に歩く事が出来れば、死んでも得心だ」とかナンとか吐かしよつて、仕様もないローマンズを人の前に展開させよつて、馬鹿にしてけつかる。オ、もう何處やら往つて仕舞よつた。エー怪體の悪い」

鷹彦「ヤア折角俺の所有にしようと思つて居つたのに、外部から日の出別の宣傳使がやつて来て、サツパリ横領して了つた。エー自棄だ………と云つて、どうも仕方がないワ、俺も一つ、あの女ぢやないが、この穴から脱けてやらうかい」  
と言ひ乍ら、鷹彦は、神變不思議の術を以て、身體を縮小し、小さい鷹となつてスツと脱け出した。

岩彦「ヤアまた出よつた、オイ鷹公、ア、貴様は偉い奴だ。最前の石蓋を揚げて、吾々を舊の所へ歓迎するのだぞ」

鷹彦「コレコレ岩サン御一統様へ、妾は是より日の出別の宣傳使様と、手に手を執つて天國の旅行を致します。コンナローマンズをお目にかけて濟まないが、是

も因縁づくぢやと諦めて下しやんせ、オホ、、、、、アバヨ

岩彦「ヤイヤイ鷹の奴、なんだ、化女の眞似をしよつて、ソナ能い氣な事かい。俺達の身にもなつて見よ」

鷹彦「(義太夫口調)「お前はお前、妾は妾、マアマアゆつくりと、十日も二十

日も百日も、千年も萬年も化石になる迄ゆつくり御逗留遊ばせや。千松ぢやない

が、一年待つてもまだ見えぬ、二年待つてもまだ見えぬ、千年萬年待つたとて、

何の便りがあるかいな、と郷里に残つた、貴様たちの女房が嘸や嘆くであらう。

思へば思へば氣の毒やな、神や佛もなきものか、力に思ふ岩サンは、何處にどう

して御座るやら、會ひたい見たいと明け暮に、こがれ慕ふて居るものを、何の便

りも梨の礫、礫の様な涙こぼして、三千世界の世の中に妾ほど因果は世にあらう

か、アードうしようぞいなどうしようぞいなア……」と悲劇の幕が下りる、その

種蒔だ。マア精出して、種でも蒔いて置くが能からう、千年ほど先へ行つた時に、

この岩窟の中に岩公といふ岩固男が化石して………と云つて、涎掛でも持つて

參拜する奴があるかも知れやしなないぞ。人は一代名は末代だ、是も良い話の種だ。

種蒔たねまいて苗なへが立たちたら出でて行くぞよ、刈かり込こみになりたら手て柄がらをさして、元もとへ戻もどら  
すぞよ……と三五教あななひけうの教をしへにある通とほりだ。國治立くにはるたちの大おほ神かみさままでさへ、永ながらく押おし込こ  
められて御座ござつた位くらゐだから、先まづ神様かみさまにあやかつて、三千年さんぜんねんの修しゆ行ぎやうをなさるが、  
宣傳使せんでんしかくめ各位かくゐの光榮くわうゑいだらう。アハ、、、、オホ、、、、

岩彦いはひこ 『ナアング、一人居ひとりつて男をとこと女をんなの笑わらひ様やうをしよつて、化物ばけものみたよな奴やつだナ』

鷹彦たかひこ 『定きまつた事ことだ、肉體にくたいは男をとこで靈れいは女をんなだ、變性女子へんじやうによしの守しゆ護ご神じんだ』

岩彦いはひこ 『エー、變性女子へんじやうによしも男子だんしもあつたものかい。遍照金剛へんぜうこんがう吐ぬかさずに、早はやく開かい岩がんせ

ぬか………オイ門番奴もんばんめが、愚圖々々ぐづぐづいたして居ゐると、免職めんしよくをさそか』

鷹彦たかひこ 『ホ、、、、岩いはさま、免職めんしよくさすとはソラ誰たれに、………あなたは岩戸いはとに押おし込こ

められて既すでに既すでに面めん色しよくなしだ、終身官しうしんくわんだな、終身此處しうしんここに、晏如あんじよとして、就職しうしよくなさ

るが宜よろしからう』

岩彦いはひこ 『複雑ふくざつなる問題もんだいは、一切總括いっさいそうくわつして、免とも角かくこの岩窟がんくつを開ひらいて呉くれたがよから

うぞ』

鷹彦たかひこ 『イヤー、先さきが急せく、モウ是丈これだけイチャつかして遣やれば充じう分ぶんだ、エー仕方しかたがな

い、開けてやらうかい」

岩彦「何時までもこの方を岩戸に押込めておくと、咫尺暗澹晝夜を辨ぜずだ。化の女を呼んで来て細女命の俳優技を見せて呉れぬか。さうでない、容易にお出ましにならぬぞ」

鷹彦「減らず口を叩かない。サア手力男の神さまが、岩戸を開くから、サツサと出て来い。天照大神様のやうな奇麗な「あな面白や、あなさやけおけ」と言つた様な、愛の女神なれば、開きごたへがあるが、この岩戸開きは、五百羅漢の陳列會を見るよなシャツ面の澁紙さま計りだから、開きごたへがないワ。併し乍ら、旅は道づれ世は情だ。情を以て開扉してやらう」

岩彦「オツト待つた、海河山野、種々の美味物を八足の机代に置足らはして、獻つる事を忘れなよ………出いと云つたつて、鏡もなければ劍もなし、五百津美須麻琉の珠も無くして、さう易々とお出ましになると思ふか。香具の果物でも、木机にピラミツドの様に横山の如く置足らはし、御供物の建築法を能く心得て、粗相のない様に、天津祝詞を奏上し、太玉串を奉れ」



鷹彦たかひこ 何なにを吐ぬかしよるのだ。千手觀音せんじゆくわんおんの樣やうに、俺おれ一人ひとりでソナ八人藝はちにんげいが出來できるか。

愚圖ぐづ々ぐづいふと、千代ちよに八千代やちよに永久とこしへに、岩戸いはとの中なかの閉門へいもんだぞ。

岩彦いはひこ 『ヤア、もうお供物くもつは免除めんぢよしてやらう。兔とも角かく、開ひらけば良よいのだ。貴様きさまもコ

ソナ魔窟まくつに單身ひとりお置おかれては、大おほいに寂寥せきれうを感かんずるだらう』

鷹彦たかひこ 『エー仕方しかたがない』

と言いひ乍ながら、力ちからを籠こめて、岩壁がんべきをウんと押おした。思おもつたよりも岩いはの戸とは輕かるく、勢いきほひ

餘あまつて鷹彦たかひこは、岩戸いはとの中なかへ又またもや飛とび込み、膝頭ひざがしらを打うつて、『アイタ、』と撫なで擦さす

て居ゐる。その間まに五人ごにんは、逸いちはや早く表おもてに脱ぬけ出し、外そとより石門せきもんをピシヤツと閉とぢた。

岩彦いはひこ 『サア入いれ替かはりだ、今度こんどは、太玉命ふとたまのみことも、兒屋根命こやねのみことも、何なにもかも、五伴男いつとものをそろ揃そろ

うたのだ。オイ鷹津神たかつかみさま、どうだ』

鷹彦たかひこ 『代かはれば變かはる世よの中なかだ。サア貴様きさま、岩戸いはとの前まへに天津祝詞あまつのりとを畏かしこみ畏かしこみ奏上そうじやうする

のだぞ、アハ、ハ、ハ、』

音彦おとひこ 『オイ岩公いはこう、コンナ洒落しゃればつかりに、貴重きちやうな光陰くわういんを濫費らんびしては詰つままらぬぢや

ないか。一時いちじも早はやく前ぜん進しんだ』

龜彦 『オイオイ音公待った、この岩窟の中の鷹彦は、どうするのだ』

音彦 『ナニ構ふものか、人間一人位、どうなつたつて放つとけ』

岩彦 『アハ、面白い面白い』

と言ひ乍ら、以前の岩穴から、黒い顔をちよつと出し、

岩彦 『ホ、ホ、ホ、ホ、モシモシ鷹サンとやら、妾は是より五人連この岩窟を探險し、

お前さまの様な瓢箪面の曲津神を、片つ端から言向和し、勝利光榮の神となつて

歸つて来る迄、千年でも万年でも此處に晏如として、堅磐常磐に鎮座ましませや、

ホ、ホ、ホ、

鷹彦 『アハ、何を吐しよるのだ。鷹さまは、貴様も最前見て居ただらう、針

の穴からでもお出ましになる、不思議な神様だよ』

と云ひ乍ら、再び鷹となつて穴より飛出し、見る見る身體膨張し、一丈餘りの羽

を擴げて、バタバタと羽ばたきした。

岩彦 『ヤア偉い元氣だナア。オイオイスうなれば、鷹さまも話せるワイ。今の美

人の後を一つ、空中滑走を行つて、捕獲して來て呉れないか。所有權は岩さまに



龜彦 『マア待て待て、あまり高い所へ上ると、又落ちるぞ』

鷹彦 『落ちたつて良いぢやないか、滅多に天に墜落する虞はないワ、貴様の様に、

井戸に着水するのは天地の相違だ。ヨ一此處にも道がある、何方の道を行つた

ら宜からうかナア』

岩彦 『いは』いでも定つて居る。一目瞭然、廣い道の明るい道へ行けば良いぢ

やないか』

龜彦 『新道と舊道と二路拵へてあるぞよ。新道へ行けば、初めは楽な様なが、往

き行つた所で道が無くなりて又元の所へ後戻りを致さねばならぬぞよ』

音彦 『何を吐しよるのだ。ソナ道の事ぢやないワ。神様は教の道の事を仰有る

のだぞ。頭腦の悪い奴だナ』

龜彦 『俺は少し暗くつても、細路の下道を進んで行かうと思ふ』

岩彦 『勝手にせい。心の暗い奴は、暗い所に行きたがるものだ………オイ皆の連

中、どちらにするか』

音、駒、鷹、梅一度に、

「広い道 広い道」

と五人は、岩路の階段を上つて行く、龜公は唯一人、やや暗き、低き路を宣傳歌を歌ひ乍ら、四五丁許り進み行くと、忽ち頭上より、黒い影四つ五つ落下し來り、暗黒なる陥穽にゾボゾボと音を立てて落込んだ。

龜彦「ヤア何だ、上から獅子でも落ちて來よつたのかな、コンナ岩窟のトンネルの中に又しても又しても、陥穽を拵へよつて……鷹公、岩公が此處に居つたら、また「議會の開會だ」などと洒落よるのだけれど、俺一人では、議會を開く譯にも行かず、困つた事だ。彼奴、何處へ行きよつたのか知らぬ。何は兔も有れ、何者だか一つトツクリと正體を見届けてやらう」

と首を伸ばして、足許に氣を付け乍ら、怖さうに覗き込んだ。井戸の中より、岩彦「ヤア貴様は龜公ぢやないか、俺を助けて呉れぬかい」

龜彦「さういふ聲は岩公だナ」  
岩彦「オーさうだ、岩サンに鷹サン、音サン梅サン、駒サンだ」

龜彦「助けて呉と言つたつて、どうにも斯うにも、手の着け様が無いぢやないか。」

マアさう喧し云はずに待つて居れ。今臨時議會を開いて見るから、開會の上で助けるか助けぬかが決定なのだ。アハ、ハ、ハ、ハ

岩彦「馬鹿にしよるナ、最前の敵討ちをしようと思つてけつかるナ」

龜彦「さうだから、あまり高上りすると、逆様に地獄の底へ落されるのだよ。ど

うだ、是で慢神心をスツパリと取り去つて改心を致すか」

岩彦「改心致すも致さぬも有つたものかい。改心のし切つた者に改心が有つてた

まるかい。改心と云ふ事は、貴様のやうな不完全な人間に必要な言葉だ。吾等に

對しては、辭典から改心の二字を除去すべきものだ………大きに憚りさま、エラ

イご心配を掛けました。此處にもどうやら、立派な段梯子が懸つて居ります。ア

ハ………」

と言ひ乍ら、五人はゲラゲラ笑ひ笑ひ上つて來た。

龜彦「ナンダ、一寸も濡れて居らぬぢやないか」

鷹彦「きまつた事だい、井戸の底へ轉落した時に、この鷹サンが、兩翼をパツと

開いて、井戸一面を閉塞したのだ。そこへ四匹の小雀が下りて來て、ポンと止ま

つたものだから濡れさうな筈があるかい」

岩彦 「小雀とは、チト残酷ぢやないか。ナア梅、音、駒の御連中………」

鷹彦 「それでも生命の親だ。ナント云はれたつて、チツト位は隠忍するのだ。忍

耐は成功の基礎だから、アハ、ハ、ハ」

岩彦 「第二の………これは陥穽だ。是から前途に、ドンナ事を悪神の奴、企んで

居るか分つたものぢやない。うっかりと歩けたものぢやないワ。幸ひ此處に、鷹

サンを飛行船にして、吾々五人が操縦する事にしたら、都合が良いぢやないか」

鷹彦 「この飛行船は、日の出別様とあの女神様との御用だ。お氣の毒さま、お生

憎さまだ、アハ、ハ、ハ」

この時前方の薄暗き隧道の中より、怪しき宣傳歌の聲聞え來たる。

一同 「ヤア、聞き覚えのある宣傳歌だ、ハテナ」

(大正一一・三・一八 舊二・二〇 松村眞澄録)

第一三章 上天丸（五三九）

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立たて別わける

醜しこの窟いはやに入り來きたる

三あ五な教なの宣せん傳でん使し

鼻息はないき荒あらき鷹彦たかひこや

固かたそに見みえて和やはらかき

岩彦いはひこ龜彦かめひこ駒彦こまひこが

音おとに名な高たかき布留野原ふるのほら

これこの窟いはやに迷まよひ來きて

千ち尋ひろの深ふかき陷おとし穿あなに

二に度ど吃びつ驚くりの爲て體いたく

あゝ痛いたましや痛いたましや

是これから先さきは眞ま暗くら黒がり

幾いく百ひやく千せんとも限かぎりなき

醜しこの曲津まがつの群むらりて

汝なれが生いの命ちは嵐あらし吹ふく

颯はや風てに向むかふ燈火ともしびの

消きえ入いるばかり身魂みたまをば

いろいろさまさま噴さいまれ  
二に度どと歸かへらぬ根ねの國くにの

旅路たびぢをなすが氣きの毒どくぢや  
われは窟いはやを守まもる神かみ



汝等一行憐れみて 生命救けむその爲に

此處に現はれ氣をつける 氣をつけられるその時に

きかねば後は何うなると われは構はぬ憐みの

心を以て告げてやる あゝ叶はぬぞ叶はぬぞと

魂消て腰をぬかすより 一時も早く元の道へ

踵を返して退けよ。 ウゝゝ、ルゝゝ、サゝゝ、イゝゝ、

と云つた限り異聲怪音はピタリと止まりける。

梅彦「オイ皆の連中、一寸ここで相談をして見ようか。勢に任して軽々しく進む

は智者の爲す可き所では無いぞ」

岩彦「エーナアンだ。弱音を吹きよつて一體貴様は何を目標に、ソナ卑怯な事

を云ふのだ。聲が怖ろしいのか、聲が恐くつて雷の鳴る世の中に生きて居れるか」

梅彦「聲が恐いのぢやないが、その聲の主をよく探究して、その上に策戦計畫を

やらうかと云ふのだ」

鷹彦「何「かまふ」ものか。何れ悪魔の巣窟だ。これ位の餘興がなくては進撃するのにも張合がないワ」

梅彦「進撃すると云ったつて此の隧道は馬鹿に闇いぢやないか」

岩彦「闇くても構ふものか。いはゆる暗中飛躍だ。「百鬼」暗行の岩窟だもの、

此方も「厄鬼」となつて對抗運動をやれば、夫れで好いのだ」

幽か向方に稍光の有る圓き穴が見え初めた。

岩彦「オイオイ、モウ先が見えた。兔も角あの明い穴を目標に進むことにしよう」

頭上の岩石は猛烈なる音響を立ててウ、ウ、と唸り始めた。鼓膜が破裂しさう

な巨音である。一同は耳に指を當て乍ら一目散に圓き光を目標に進み行く。漸う

此處に着いて見れば、眼の届かぬばかりの廣場がある。さうして上面は雲が見え

てゐる。四邊は幾千丈とも知れぬ岩壁を以て圍まれありて、坦々たる大道は四方

八方に通じみたり。

鷹彦「ホー、此處は天の八衢のやうな所だ。お前達は、マア悠乎と相談をして是

から本當の妖怪窟へ進撃して呉れ。俺は暫らく御免を蒙る」

と言ふより早く背の兩翼を左右にひろげ、羽「ばたき」し乍ら中空に舞ひ上り、この窟を脱出して了つた。

岩彦「ア、日の出別には捨てられ、魔性の女には遁げられ、鷹彦は歸つて了ひ、是から前途遼遠暗澹と云ふ所になつて、吾々五人が振り残されたのだから、この先はよほど注意をせなくてはいかぬぞ。少し氣の利いた奴が居ればよいのに、ガラクタばかり残つて居るものぢやから、如何にも斯うにも策の施しようがないワイ」

音彦「コラ岩公、失敬なことを云ふな。粕ばかりとは何だ。残りものに福があるぞ。もう斯うなれば力にするのは神ばかりだ。サーサ天津祝詞だ」  
と云ひ乍ら音彦は墜道に端坐して祝詞を奏上する。四人も續いて一生懸命になつて合唱して居る。何處ともなく天空を轟かし來る天の鳥船は、五人の端坐する前に爆音すさまじく降下した。中より日の出別命、鷹彦、以前の女の三人現はれ來り、

日の出別「ヤア皆さま、ご苦勞であつた。巖窟の探險はこれで終結だ。此の岩壁

を到底人間として攀ぢ登る譯にも行かないから、迎ひに來たのだ、サア早く乗つたがよからう」

岩彦「これはこれは、何から何までお氣つけられまして有難うございます。流石

は日の出別命さまだ。人に將たるものは斯うなくてはならぬ道理だ」

鷹彦「オイ岩公、うまいな、巧妙な辭令だ。この八衢は斯う見えても、これが少

し行けば皆行き詰つてゐるのだから、未練を残さず早くこの船に乗つたらよから

う」

岩彦「誰がコンナ怪體な巖窟に未練があつて堪るか。天女のやうな女神さまと一

緒に天の鳥船に乗つて、天國へ遊行するかと思へば實に有難い。サア皆の者早く

乗らうかい」

と云ひ乍ら五人はヒラリと飛び乗つた。

又もや鳥船は巨大なる爆音の響と共に、何處とも無く天空に姿を隠しける。

(大正一一・三・一八 舊二・二〇 外山豊二録)

第四篇 奇窟怪巖

第一四章 蛙船〔五四〇〕

神の御稜威も高照姫の

神の命の常永に

鎮まりまして木の花の

姫の命の御教を

三十三相に身を變じ

醜の窟のそれよりも

玉の礎彌堅く

築き固めて暗の世の

神の經綸の寶庫を

拓かむとする時もあれ

八十の猛びの強くして

道にさやりて神言を

一言さへも磐船の

雲に隠れて今は唯

布留野ヶ原の深霧に

包まれけるぞ是非なけれ

天空轟く雷に 胸を打たれて起上り

四邊を見ればこは如何に 荒野をわたる俄雨

身はびしよ濡れの釋迦の像。

音彦 『オイ龜公、駒公、日の出別の宣傳使に迎へられ、九天の上まで上りつめて

居つた筈なのに、何時の間に又もや此の茫茫たる草原に雨風に曝され眠つてゐ

たとは、何う考へても腑に落ぬぢやないか。それにしても鷹彦、岩彦、梅彦は如

何なつただらう』

龜彦 『自分の事が自分に判らない吾々、他人の事を考へる餘裕があるものか。こ

れや何うしても腹帯を締めねばなるまい』

駒彦 『吾々三人は天の鳥船から、知らぬ間に振り落されたのだ。それにしても餘

り日の出別神も莫迦にして居るぢやないか。此處はタカオ山脈の手前だ。此の下

邊りを醜の巖窟が貫通して居るのぢやが、斯う外へ抛り出されて了つては、最早

探險も何もあつたものぢやない。エー仕方がない、西北指して星の光を目標に進

んで行けば、終にはフサの都に着くであらう。吾々も此の邊りは幼少い時に一度通つたことがあるのだから、運を天に任して徒歩することにしようかい」

音彦「タカオ山脈の近くになると大變大きな蟆蛙が居ると云ふことだ。何だか足も草臥れたし、蛙が出居つたら飛行機の代りに、それにでも乗つてアーメニヤ方面指して、「かへる」と云ふことにしようかな」

龜彦「ヤー大變だ。音公、駒公、向方を見よ、夜目に確乎とはわからぬが、何でも沼か、池のやうなものがあつて吾々の進路を拘塞してゐるやうに見ゆるぢやないか」

駒彦「マア行く所まで行進を續けるのだナア」

一行は仄暗き原野を足に任せて、西北指して進み行く。

音彦「ヤー妙な泣き聲がするぞ。大方例の先生が出たのだらう」

と云つて居る處へ牛のやうな蟆蛙、ノサリノサリと這ひ出で一行の前に塞がり、斗箕のやうな口を開けてパクついて居る。

音彦「ヨー天道は人を殺さずぢや。好い乗物が出來た。鳥船から蛙船に乗り替る

と云ふ洒落だ。此船はモ―【かへる】心配は要らない。初から【かへる】だから

龜彦「この魔の原野には何が化て居るか分つたものぢやない、先づ神言を奏上し

て正體を現はし、果して眞の蛙先生なれば乗つてもよからうが、又しても蛙然と

するやうなことが無いやうに注意せねばいかないぞ」

音彦「ナニ構ふものか。馬には乗つて見よ、蛙には跨つて見いだ」

と言ひ乍ら、音公は蛙の背にヒラリと飛び乗り、

音彦「ヤア大變乗心地がよい。龜、駒、貴様等も乗つたら何うだい」

「吾々は經驗が無いから、マア暫らく執行猶豫をして貰はうかい」

音彦「氣の弱い奴だな。それでは音サンが御先へ失敬を致しませう。オイ蛙先生。

音彦だといつても、【おと】しちやいかぬよ。【おと】さぬやうにして大切に

【のたくる】のだ。蛙の行列向ふ見ずと云ふことがあるから、充分注意して行つ

て呉れ給へ。賃錢は又追加をするから」

大蛙「ハイハイ承知致しました。吾々の背中に乗つて居れば、坐ながらにして故郷へ【かへる】だ。【のんこ】の洒蛙つく洒蛙々々然と鼻唄でも歌つて此行を賑





の中の龜サンのやうな目に會はねばよいがな

蛙は一生懸命【そく】を出して一足飛びにホイホイと跳び始めた。忽ちドブ  
と水煙が立つた。

龜彦「ヤア蟻蛙の奴、到頭闇の池に飛び込んで了ひよつた。思つたよりは深い池  
だ。此池の周圍は草ばかりかと思へば、斷巖絶壁で圍まれてゐる。音公の奴蛙  
と共に沈没し居つたな」

駒彦「オーイオーイ、音公ヤーイ」

龜彦「オイ音公、未だ池の底に沈没するのは早いぞ」

蛙は音公を乗せたまま水面にポカリと浮き上つた。

龜彦「ヤー音公、醜態を見やがれ。それだから蛙の行列向ふ見ずと云ふのだ。モ  
斯うなつては高處から見物だ」

音彦「危急存亡一命にもかかはる此場合に、何を安閑として居るのか、早くデレ  
ツクでも用意して音サン蛙サンを釣り上げぬかい」

駒彦「デレツクとは何だい。グレンのことだらう。此處は陸上だぞ。陸上で釣れ

るのはグレンだ。グレンと音立てて「ひつくりかへる」の此の憐れさ。眼なつとグレングレンと剥いて居れ。さうすれば何時の間にか、よい風が吹くだらう」

音彦「ソナ議論は如何でも好い。デレックであらうが、グレンであらうが問ふ所に非ずだ。貴様もよつぽど融通の利かぬ奴だ」

龜彦「所變れば品代る、御家變れば風代る、嬢ア代れば顔變る。浪速の葦も伊勢

の濱荻、貴様のやうに八釜敷囀る百千鳥も都へ行けば粹に代つて都鳥。マア悠悠

と蛙の背で遊山でもしたらよからう。吾々もこれからお前の沈澱するまで、悠悠

と休息でもして、それから起重機を措置して救けてやると好いけれど、生憎便利

が悪くつて仕方が無い。マアマア蛙と共にグレンとやるのぢやな」

大蛙「モシモシ龜よ、龜サンよ。駒よ、駒サンよ。くだらぬ喧嘩を買はずと大人

しく、友達甲斐に救けて上げて下さいや」

龜彦「サテモ氣樂な奴だナア。奈落の底へ落ち込んで踊つて居る奴があるものか

い。音公貴様も今迄の罪惡の決算期が來たのだ。何事も因縁づくぢやと諦めたが

よからう。此の辛い時節に「やすい」賃銀で誰が就業するものがあるか。先づ勞

働どう争そう議ぎの解かい決けつがつく迄まで、ゆつくりと待まつてゐるがよよからうう」

音彦おとひこ「オオイオオイ蛙かはず公こう、モモーアアンナ奴やつに相あ手てにななつたところところが、解かい決けつのつく筈はずはな

い。上うへに立たつて居をる奴やつと池いけの底そこへ落おちて苦くるしんで居をる人にん間げんとだだから、到たつて底うへ上のの奴やつは

彼のあ通とほり亂らん暴ぼうだだから、百ひやく姓しやうの蛙かはず切きりぢぢややないが、蛙かはずと音おとサンとが悠ゆう然ぜん協けい議ぎをひら開い

て、勞らう働どう同どう盟めいでももややつて自みづから活くわ路つろをもと求もとめるより仕しか方たがな無ないわ、龜かめ、駒こま、大おほきに憚はばか

りさまだ。モモー貴き様さま等らの御ご厄やく介かいにはならぬ。自じ由いう行かう動どうをと執とるから、ささう思おもへ」

龜かめ、駒こま「アアハ、ハ、ハ、強つよい者もの勝がちの世よの中なかだ、上うへから下したへ落おちるのは一いっ足そく跳とびに容よう

易いだが下したから上うへに上あるのは大たい變へんだぞ。上あげるなら自じ由いうに上あつて見みよ」

大蛙おほがへる「美み事ごと上あつて見みせう。アアフンとするな」

といひながなら廣き水すい面めんを浮ふ游いうし、ある上じやう陸りく地ち點てんをもと求もとめてガガサガサと無ぶ事じに這はひ上あつ

た。

龜彦かめひこ「ヤヤー音おとの奴やつ、到たつ頭とう無ぶ事じ着ちやく陸りくしよつた。オオイ駒こまサン、吾われ々われは何うして此この古ふる池いけ

をわた渡わたつたらよからうな」

駒彦こまひこ「アアーささうだつたな。渡わたるには恐こはし、渡わたらねば女によ房ぼうの國くにへは歸かれないといふ

場面だ。オイ音サン、迎ひに來り迎ひに來り

音は目を剥き、舌を出し乍ら、

「アカと云へ、アカと云つたら迎ひに往つてやる」

龜彦「エー仕方が無い。莫迦にしよる。これだからアカの他人は水臭いと云ふの

だ。仕方が無い。背に腹は換へられぬ。言はうかい」

駒彦「アカ」

龜彦「アカ」

音彦（兩手の指で臉を押へ乍ら）「べー」

駒彦「大方コンナことだと思つて居つた。アカの言ひ損をしたワイ。これがアカ

の別れと云ふのだ。モ一仕方がない、豫定の退却だ」

音彦「オイオイ貴様早く來んかい。ソナ處に何時まで愚圖々々してゐるのだ」

駒彦「ヤーナアンだ。坦々たる大道が通じてゐるぢやないか」

龜彦「ヤー布留野ヶ原のコンコンさまだな。アハ、ハ、ハ」

（大正一一・三・二〇 舊二・二二 外山豊二録）

第一五章 蓮花開〔五四一〕

音、龜、駒の三人は、荒野ヶ原を西北指して進み行く。傍の丈なす草原の中より現はれ出でたる五六人の怪しの男、大手を擴げて四方を取圍み、

「ヤイ、何處の奴か知らぬが、此處を何と思つて踏ん迷うて來たか、サア所有物一切を悉皆此處へ、おつ放り出して赤裸になれ。さうすれば生命丈は助けてやらう」

音彦「何吐しよるのだ、泥棒奴が、情ない奴だナア。大きな圖體をしよつて、人の物を盗らねば生活が出来ないとは、何といふ因果の生れ付だ。一體貴様は何と云ふ奴だい」

男「俺は蟒の野呂公さまだい」

音彦「道理で、【のろ】のろしてけつかるワイ、この辛い時節に労働もせず、遊んで食ふと云ふ様な悪い了見を出すな」

野呂公「何を古い事を言ふのだ。是でも當世向の新しい男だぞ。今の人間に泥棒根性の無い奴が、一匹でも半匹でもあるかい、鬼と賊との世の中だ。ナンダ貴様は、宣傳使面をしようつて、偽善者の骨頂奴が。馬の顔にハンモックを附けた様な長いシヤツ面をしようつて……貴様もやつぱり顔ばかりぢやない、手も足も長い、手長彦や長髓彦の眷屬だらう」

音彦「何を吐しよるのだ、マア俺の宣傳歌を、落着いて聴聞しろ」

野呂公「貴様は、神だとか、道だとか、善だとか、悪だとかほざきよつて、世界の人間を壓制に廻る宣傳使だらう。チツト頭腦が古いぞ、是程民衆運動の盛んな世の中に、守舊的な事を言つても、通用せないぞ。吾々は、貴様のやうな奴を、ケープスタンぢやないが、片つ端から一所へ巻き寄せて、ガタガタと片付ける積りだ。通常の泥棒だと思ふな。斯う見えても選を異にして居るのだぞ」

音彦「ア、ナント危ない原野だ。全然浮流水雷の濫設した中を、超努級艦が航海

してる様なものだ。……ヤイ浮流水雷！、こちらも探海船があるぞ。爆發さし

てやらうか」

野呂公「へん何を吐しよるのだい。ベンチレータの様な鼻をしよつて、鼻々以て不恰好千萬な、鼻息ばかり荒くても、石油の空罐ぢやないが、風が吹いても散る様なビクビク腰で……ナアんだ、蟻に池の底へ放り込まれよつて……」

音彦「ナニ、蟻に抛り込まれた？、貴様どうして知ってるのだ」

野呂公「アハ、、、、、それだから貴様の宣傳使は零點と云ふのだ」

音彦「ソナナら貴様は一體何者だ」

野呂公「蟻の現實化したのが、蟒の野呂さまだよ」

音彦「オーさうか、貴様蛙なら、裸體で暮して居ればよいのだ。何故に此方の御

衣服が必要なのだ、……オイ龜公、駒公、しつかりしよらぬかい。俺ばつかり

に交渉させよつて、貴様はそれでいいのか、冷淡至極な奴だなア」

龜、駒「オイ音サン、お前は身魂の因縁で、難局に當らなならぬ役に生れて来て居るのだよ。吾輩は、後の烏が先になる、先を見て居て下されよだ。最後の神業



に參加して、拔群の功名手柄を現はすのだよ」

音彦「二十世紀の三五教の宣傳使の様な事を言うて居やがる、なまくらな奴だナ。何時まで待つても、棚から牡丹餅は落ちては来ないぞ、天地間の真相を能く考へて見よ。霜雪を凌いで苦勞をすればこそ、春になつて梅の花が咲くのだ。花が咲くから實を結ぶのだ。苦勞なしに誠の花が咲くと思ふか」

野呂公「オイオイ、喧譁の宿替は困るよ。俺をどうするのだ、俺の方から解決をつけぬかい」

音彦「八釜敷い言ふない。暫く中立を嚴守して居れ」

野呂公「俺等の一部隊は六人だ、貴様の一行は僅に三人、三人を裸にした所で、帯に短し襷に長し、エー仕方がない、今回に限りて、見逃してやらう。以後はキツト心得て、改心を致すがよからう。アハ、、、、、」

音彦「アハ、、、、洒落やがるない。こちらが言ふ事を、泥棒の方から云つてゐよるワ」

野呂公「先んずれば人を制す、貴様の守護神が俺に憑つて言つたのだよ」

音彦「合點のいかぬ代者だ。一體全體貴様は何者だ」

野呂公「ハテ執拗い奴だナ。【のろ】は【のろ】ぢや、貴様のやうな氣樂な奴、

世界を吾物の様に思つて居る體主靈從的人間をノロウ【のろ】さんだよ」

音彦「何だかサツパリ譯が分らぬ様になつて來た。兔も角、假りに俺を資本家と

して、お前達を勞働者とし、勞資協調會議でも、この原野の中央で開いたらどう

だ。原野の案だからキット原案通過は請合だ、………アア世の中は能うしたも

のだ、日の出別さまや、鷹公、梅公、岩公に棄てられたと思へば、また新しい六

人の耄碌連が殖えて來た」

野呂公「アハ、ハ、ハ、盲ばかりの宣傳使だな、俺の正體が分らぬ様な事では、所

詮駄目だ。醜の岩窟の中の探險は、到底不可能ぢやワイ」

音彦「コラ野呂公、何れ貴様は普通の奴ぢやない、何でも變つた化物だらうが、

不幸にして岩窟の探險を中止するの已むを得ざる、不可抗力が加はつたものだけ

ら、中途に計畫をガラリと轉覆させて了つたのだ。歸つて土産がないから、貴様

化者なら詳しいだらう。どうだ、俺に限つて話して呉れないか」

野呂公「話すとも話すとも、一體此處は何處だと思つてるのだい」

音彦「定つた事だい、布留野ヶ原のタカ才山脈の手前ぢやないか」

野呂公「サア、それだから馬鹿だよ、此處はやつぱり、醜の岩窟の中心點だぞ」

音彦「音公は眼を擦り、能く能く四邊を見れば、岩窟が四方八方に開展して居る。」

音彦「オイ龜公、駒公、貴様どう見える」

龜彦「さうだなア、何だか、岩窟の中のやうな氣もするワイ」

駒彦「ホんに、睡とぼけて居たらしい、夢ではなからうかナア」

野呂公「左様なら……」

と云ふかと思れば、野呂公外五人の姿は消えて巖窟は白煙に全然包まれて了つた。

忽ちボーとした圓い光が現はれた。

駒彦「ヨ一變なものが顯現したぞ、用心せよ。是から先に、ドンナ不思議な事が

續出するか測定し難い、先づ身魂の土臺をぐらつかせぬ様に、天の御柱を確乎立

てて進む事にしようかい」

音彦「貴様は神經過敏だから、直にさう云ふ深案じをするのだ、何事も惟神だ、

刹那心だ。行く所まで行かねば分るものぢやない。取越苦勞は禁物だ」

駒彦「ヤアヤアあれを見よ、何だか彼の玉の中には、綺麗な顔が見えるぢやない

か、全然木花姫の様な御面相だぞ」

音彦「ヨ、本當に、容色端麗、櫻花爛漫たるが如しだ。最前出現した野呂公に

比ぶれば何となく氣持が良いワ」

美女の影は瞬く間に、全身を露はし、手招きし乍ら、三人を一瞥して、足早に

何處ともなく走り行く。

音彦「ヤア、此奴は素的だ。白煙に包まれて、たうとう姿を見失つたが、吾々は

どうでも其踪跡を探索し、モ一度面會して、事の實否を糺したいものだ」

龜彦「美人だと思つて居ると、當が違つて、四つ目小僧のお化かも知れぬぞ。そ

こになつてから……ヤアやつぱり是は別嬪ではナイスなんて云つた所で、ガブリ

とやられてからはどうも仕方がない。慎重の態度を以て漸進的に進む事だ。サア

サア足許に注意し、この處徐行區域だ」

音彦「それでも吾輩に向つて手招きをし、あの美しい柳の眉の涼しき電波を送つ

た時は、何とも云へぬ電氣に打たれた様な恍惚たる次第なりけりだ。阿片煙草に

熟酔した時の様な氣分に襲はれたよ」

龜彦「電波といふ事があるかい、秋波の間違だらう」

音彦「秋波と云ふのは、それは古い奴の言ふ事だ。二十一世紀の人間は氣が早い

から、電波は一秒時間に地球を七回半すると云ふ速力で、以心電心「ネー音サン」

とも何とも云はずに往つた時の容子と云つたら、有つたものぢやない。あの涼し

い眼をジヤイロコンパスの様にクルクルと廻して、目は口程に物を言ひ……とか

云つて、二十世紀の人間の様に、口で物言ふ様な古めかしい事はやらない、流石

は文明的だ。一分間に八千回轉といふ戀の速力だから、最も破天荒のレコード破

り……アア色男になると煩さいものだワイ」

駒彦「アハ、ハ、ハ、何寢言を言つて居るのだ、頭から冷水でも被せてやらうか、

チト春先でボヤボヤするものだから、逆上して居よるのだナ」

音彦「それでも、事實は事實だから、如何ともする事が出来ぬぢやないか。戀に

苦勞した事のない貴様は、門外漢だ、マア黙つて居るがよからう。近代思潮に觸

れない、舊思想人間に、戀が語れるものかい。戀には上下貧富美醜善惡の區別がないものだ、エツヘン」

龜彦「アハ、ハ、ハ、コンナ譯の分らぬ魔窟へ入つて来て、ソナ能い氣な事を言つてる所ぢやあるまいぞ。寸善尺魔だ、何が出て来るか知れやしない。チツトたしなんだが宜からう」

音彦「アー、何だか没分曉漢ばかりと旅行して居ると、氣分が悪くなつて、頭に脚氣が起り、足に血の道が起つて来て、足は頭痛がする、頭は腹痛がする、實に不快千萬だ。マアマア世の中は酒と女だ、女の事を言つてる間にでも、コンパスが進むのだ。長い道中に、堅苦しい事ばかり言つて居つて、御用が勤まるかい」

龜彦「苟くも宣傳使たる者は、女だの、酒だのと言ふ事は、假りにも口にすべきものでない、穢らはしいワイ。モチツト眞面目にならないか、世間の奴に誤解される虞があるぞ」

音彦「それは杞憂だ。寛嚴宜しきを得、伸縮自在、變幻出没極まりなくして、始めて神業が完成するのだ。路端に涎掛を何十枚も首に掛けて居る様な、無情無血漢

では、混濁せる社會の人心を救濟する事は、到底不可能だ。操縦與奪其權我に有り、と云ふ態度を以て、衆生を濟度するのが、三五教の御主意だ。枯木寒巖に凭る、三冬暖氣無しと言ふ様な、偽善的頑迷不靈の有苗輩では、どうして完全に神業が勤まると思ふか。貴様の堅い龜の甲をもぎ取つて、少しく軟化せなかつては、勤まりつこはないぞ。龍宮の一つ島の宣傳の様な失敗だらけに終らねばなるまい」

この時白煙は俄に消散し、廣き隧道内は、又もや明るくなつて來た。

音彦「ヤア、女ならではの夜の明けぬ國、天の岩戸も、音サンの言靈で、サラリと開いた、開いた開いた菜の花が開いた、蓮草の花も開いた、天明開天だ、アハ、ハ、ハ、ハ」

（大正一一・三・二〇 舊二・二二 松村眞澄録）

第一六章 玉遊（五四二）

明あかるくなつた道みちを三人さんにんは足あしを早はやめて進すすみ行ゆく。前ぜん方に當あたつて赤白あかしろの護謨球ごむまりの様やう

なもの上下じやうげ左右さいうに浮動廻轉ふどうくわいてんしてゐる。音彦おとひこは目敏めぎとく之これを眺ながめ、

音彦おとひこ「ヤア駒彦こまひこ、又また面白おもしろいぞ。先さきを見みよ、魔窟まくつの魔神まがみが玉突たまつきをやつてるわ」

龜彦かめひこ「オー、あれや野球戦やきうせんだ、流石さすがは魔窟まくつだな、味あぢな事ことをやりよるわ。此この次つきには

又またダンスの餘興よきようが見みられるかも知しれないぞ。文明ぶんめいの空氣くうきは山やまの谷々たにだにはおるか、斯かや

様な地底ちていの巖窟がんくつ内ない迄までもゆき亘わたつてゐるのだね」

音彦おとひこ「マア一寸ちよつとこころで腰こしを下おろして見物けんぶつし乍ながら臨時將校會議りんじしやうかうくわいぎを開ひらいて、その結果けつくわ

吾々われわれも魔神まがみの打球會だきうくわいに參加さんかするかせないかを決定けつていしたら如何どうだ」

龜彦かめひこ「三人さんにんでは將校會議しやうかうくわいぎも良いいい加減かげんなものだな。何なには免ともあれ、ゆつくりと見物けんぶつ

する事ことに仕様しやうかい。ヤアヤア殖ふえるわ、澤山たくさんな毬まりが現あらはれた、十じふが二十にじふ

になり、二十にじふが四十しじふになり、四十しじふが八十はちじふになり、八十はちじふが百六十ひやくろくじふになり、百六十ひやくろくじふが

三百二十さんびやくにじふになり……」

音彦おとひこ「コラコラ、貴様きさまはコンナ處ところで算術さんじゆつの稽古けいこでもするののか」

龜彦かめひこ「ヤア會計檢査院くわいけいけんさゐんへ決算報告けつさんほうこくをする必要ひつえうがあるから、遺漏ゐろうない様やうに十分じふぶんのべ



ストを盡して居るのだ。會計検査官も骨の折れたものだ」

音彦 「それは數十萬年後の豆人間のする事だ。吾々は神代の英雄豪傑だ。ソナナ取越苦勞はやめて現實的活動をやらなくてはならぬでは無いか」

龜彦 「智識の寶庫とも言ふべき龜サンは、萬年の先まで前途を達觀してるから、天眼通に映じて仕方がない。ソナナ神秘的な事は貴公等には諒解出來まいが、然し原始的で頭腦の發達せない宣傳使には無理もないワイ」

駒彦 「貴様は如何してもウラル教の垢が脱けないから直に物質的の智識を出したがるのだ。神代には計算等は必要が無い。神は無形に見、無聲に聞き、無算に數へ給ふものだ。ソナナ時代に適合はぬ前後の【そろばん】様な、迂遠な事は沒にした方が面倒臭くなくて良からう」

龜彦 「フト不成立の問題を提出して非難の焦點となつて仕舞つた。ヤア仕方が無い。本案は撤回します」

音彦 「撤回も何もあるものか、吾々は白紙主義だ。ソナナ愚案は忽ち握り潰しだ」

龜彦 「それでも上院は如何する積りだ。ヒヒ、ヒヒ、ヒヒ」

三人は又もや立つて幾百とも數へ盡くせぬ玉の前後左右に浮動廻轉する中心目  
かけて驀に進撃せむと一決し、音彦は先頭に立つて、

音彦「ヤイ、選手も居らぬのに玉ばかり何だ。コンナ處で民衆運動を開始しよつ  
て良い加減に廢めないか、不穩當だぞ」

龜彦「ヤア此奴、中々野球にしては大きいなり、重たい玉だ。此奴は石玉だ。う  
っかり衝突でも仕様ものなら大變だ。ヤイ數多い化け玉、この龜サンの言靈と競  
争だ。如何だ、屏息するか」

玉の中の最巨大なるもの忽ち目、鼻、口、現はれて、

「アハ、ハ、ハ、ハ、玉げたか、玉らぬか」

龜彦「ヨウ、矢張醜の巖窟式だ。貴様一箇丈けでは興が尠い。何奴も此奴も一齊  
に目、鼻、口を現はせ」

「御注文とあれば幾百萬でも現はれて見せてやるぞ」

龜彦「貴様は螢の燐の様な奴だ。何程にでも碎けよるのだな。一體全體何物だ。

三五教の宣傳使の「たま」たまの御探險だ。玉を飾つて歓迎するのか、それとも

俺達の御威勢に恐れて、こいつは「たま」らんと言ふので騒ぐのか。眼の玉の飛び出る様な目に會はねばならぬぞ。膽玉が「デングリ」返るぞ、オイ玉公、返答は如何だ」

巨大の玉は「ウフ、、、、、イヒ、、、、」を連続してゐる。

龜彦「ヤア怪體な奴だ。旅をして居れば偶にはコンナ事も慰みになつて良いが、斯う澤山にやつて來よると五月蠅くて堪らぬワイ。一體貴様等の目的は那邊に在るのだ。神に代つて世界を救済する天下の宣傳使だ。何でも不平な事があれば、俺に遠慮は要らぬ、逐一開陳したが良からうぞ」

「吾輩は何にも欲しくない、普通選挙の玉が欲しさに、斯う皆の靈魂が一團となつて活動してゐるのだ」

音彦「貴様は共産主義だな。仰山らしい隊を組んで其態は何だ。何故代表者を選定して交渉せないのでか」

巨大の玉「盲目、聾計りだから三人や五人の代表者が言つたつて貴様等の目には着きはせない。それだから已むを得ず多数の團體を組んで目に留まる様に、聞え

る様に甲聲をあげて團體運動を開始してるのだ。之だけ大勢の玉が叫んで居るのに貴様の耳には這入りはしまい」

龜彦「何だ、蚊の泣く様なチツポケな聲を何萬集めたつて、吾々の耳に進入するものか。第一俺等は鼓膜がすっかり麻痺して居るから、もつと大きな聲で大聲叱呼せないか」

巨大の玉「大聲俚耳に入らずと言ふ事がある。天の聲が貴様の耳には入らぬか」  
龜彦「貂の聲か鼬の聲か知らぬが、ソナ事騒ぐよりも鼬の最後屁を「放」らぬ様に氣をつけたが良からうぞ。糞蠅の様に臭いものを嗅ぎ出しよつてブンブンと跳ね廻つても、元が蠅だから敗北するのは當然だ。どうせ優勝劣敗、強い者の強い、弱い者の弱い現代だからジタバタしても駄目だよ。正當な事を言ふ奴は排斥されるものだ。貴様は時代に不忠實な奴だ。處世法を解せない馬鹿者だ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

巨大な玉は、目を怒らし眉毛を逆立て、鼻息荒く手足を「二ユウ」と出し拳骨を固め、

「皆の奴、コラコラ皆これから直接行動だ」  
と龜彦に向つて四方八方より打つてかかる。龜彦は蝶螺の如き拳骨に頭蓋骨をし  
たたかに打たれて「アツ」と言うた途端に夢は覺めた。  
龜彦「ヤアコンナ處にコクリコクリと舟を漕いで居たワイ。オイ音サン、駒サン  
尻に白根が下りた様だ。良い加減に立つて強行的前進を続けようかな」

（大正一一・三・二〇 舊二・二二 北村隆光録）

## 第一七章 臥龍姫〔五四三〕

三人は又もや進み行く。何所ともなく微妙な琵琶の音が聞えて來た。

音彦「ヤア妖怪窟の探險丈けあつて種々雑多の餘興を見聞させられるワイ。之が  
吾々の役徳と云ふ物だ。何とも知れぬ微妙な音楽ぢやないか。要するに、察する  
に、つらつら鑑るに……」

駒彦こまひこ 『何だ、同じ様な論法を陳列しよつて、此處は博覽會とは違ふぞ』

音彦おとひこ 『枕言葉なしに開陳する事は、少しく勿體ない氣分が漂ふのだ。こいつは的

切白煙の中から、玉となつて現はれたややや神經質な、ナイスが弾ずるのに相違は

無いわ。小督の局の所在は何處ぢやと、行衛を尋ねた罪な男ぢやないが、峰の嵐

か松風か、戀しき人の琴の音か、駒と龜とが腰を下して聞くからに、爪音しるき

想夫憐と云ふ調子だ。此音サンの眉目清秀なる好男子を、チラと一瞥して、二夕

りと微笑を浮べ、新月の眉の下から緑滴る涼しき眼を、ジャイロコンパスの様に

急速力を以て廻轉し電波を發射し、この音サンをチャームした天女に間違ないぞ、

この琵琶の音は、音が違うのだ、音と云ふ字は音サンの音だ、一言も聞き【おと】

さぬ様に聽聞したがよからうぞ』

駒彦 『何を吐しよるのだ、己惚の強いに程がある。長茄子にハンモツクを着せ

た様な面をしよつて、美人も糞もあつたものかい、宣傳使は宣傳使の務めさへす

れば宜いのだ』

龜彦 『アハ、ハ、ハ、ハ、自稱好男子、色々の下馬評を否熱望的氣焰を上げて見た處

で磯いその鮑あはびの片かた思おもひだ、長持ながもちの蓋ふただ、こちらこちらはあいても、向むかふはあかぬとけつかる

ワイワイ」

音彦おとひこ「貴様きさまは黙だまつて伏艇ふくていして居をれば宜よいのだよ。ウカウカと水面すゐめんに浮上ふじやうすると、浮流水雷ふりうすゐらいに掛かつて爆發ばくはつするぞ」

龜彦かめひこ「ハ、ア、たうとう櫻島さくらじまぢやないが、疝癩玉かんしゃくたまを破裂はれつさせよつた。憤怨ふんゑん萬丈ばんぢやう近

付づく可べからずと云いふ音公おとこうサンの物凄ものすごい權幕けんまく、女をんなの話はなしをしても直ただちに眞赤まつかになつて、

鼻息はないき荒あらく、御機嫌ごきげん斜ななめなりだから困こまつたものだ。アハ、ハ、」

琵琶びばの音ねは益々ますます冴さえて來くる。三人さんにんは無駄むだ口ぐちを言いひ乍ながら、三叉路さんさろに停立ていりつして、息いきを休やすめ旁興味かたがたきようみがつて聞きいて居をる。突然いきなり曲まがり角かどよりやつて來きて、ドンと行ゆき當あたつた

荒男あらいや、勢餘いきほひつてどつと尻餅しりもちをつき、

「ヤア何處どこの何奴どいつか知らね共ども、此醜このしこの窟いはやに無斷むだんに侵入しんにふして來きよつて、道路神だうろじんの樣やうに立たつて居ゐて俺おれを刎飛はねとばしよつた。オイ、奴盲目どめくらめ奴めが、眇ちつと注意ちういを拂はらはぬかい」

音彦おとひこ「ヤア何處どこの奴やつか知らないが、吾輩わがはいの胸板むないたに衝突しやうつしよつて無禮ぶれい千萬せんばんな、何故なぜ早速さつそくに謝罪しやざいを致いたさぬか」

「何だい、人を突き飛ばして置き乍ら謝罪も糞もあつたものかい。俺を何誰と心得て居るか、醜の窟の御守護神、彌次彦サンとは俺の事だ。オイ與太彦、貴様何をして居る、此奴を一つ打撲つて呉れ。如何に世が變るとはいへ、被害者が加害者に御詫をする」と云ふ現行法律が何處にあるものか」

音彦「アハ、ハ、ハ、此奴なかなか威張りよる。一寸容易には、我が強い奴だから、三五教の宣傳使に對しても閉口頓死をやり腐らぬワイ」

彌次彦「エ、縁起の悪い、閉口頓死と云ふ事があるものか、トンチキ野郎奴」

與太彦「何だか善惡の標準がトント分らぬ様になつて來たワイ、突き飛ばし得の、突き飛ばされ損ぢや。ヤア彌次、これが時代思潮だ。神も時節には叶はぬから、マア泣き寝入りにする方が無難で宜からう、時勢に逆行すると第一〇〇主義だと云はれるからな」

彌次彦「宣傳使といふ立派な保護色に包まれた御方を相手にしたつて仕方がない。それよりも、なんとか云つて暴利の事を考へ様ぢやないか。突き飛ばされても自分で轉たと思へば總ての問題は自然消滅だ。モシモシ宣傳使さま、いま迄の事は互



に川へ流しませう。然し面白い事が有りますぜ

音彦「ヤア早速の解決、流石は醜の窟の守護神丈あつて良く捌けたものだ。ドン

ナ事があるのだ、云つて貰へまいか」

彌次彦「それは大變に「ぼろい」事ですよ、木に餅が實ると云はうか、瓜の蔓に

小判がガチヤガチヤ、處狭き迄實つて居るのを、ずらりと占領した様な「ぼろい」

事です。結構な寶を、地に委して、放して居るのも餘り氣が利かない。吾々も尠

と其分配を受けたいものだが其寶を拾ふ人間が無いので待つて居るのだ。お前さ

まの様な立派な英雄豪傑なら屹度「ばつ」があふだらう。何分吾々は天來の醜男

だから、こちらから何程速射砲的電波を直射しても、先方の受電機が悪いのか、

こちらの機械が不完全なのか、一向要領を得ない。お前サンならば第一押し尻も

強いし、一寸人間らしい面付きもしてゐるから、天下第一品の臥龍姫も、猫に鯉節

を見せた様に、咽を鳴して飛び付く事は、請合ではない事はないワイ」

音彦「その臥龍姫と云ふのは一體何者だ」

彌次彦「その正體が分る位なら吾々も今迄苦勞はしないのだ。然し何でも、エル

サレムとかの立派な神様の娘御だと云ふ事だ

音彦「さうして其姫の所在は何處だ」

彌次彦「それを云つては吾々の暴利る種が無くなる、先づ第一要領を得さして貰

はうかい。要領を得ない内は、私だつて要領を得させる譯にはいかないのだ」

龜彦「オイオイ男、貴様の面は何だ。目迄細くしよつて、コンナ奴に關係つて居

る時機ぢやあるまい、ナア駒公」

駒彦「オーさうぢやさうぢや、音公では到底不合格だ。宜い加減に前進する事に

しよう。兔も角、あの琵琶の音を合圖に行けば好いのだ。吾々が行つたら屹度、

臥龍姫は秋波を送るよ。何となしに吾輩の魂に電流が通じて來た様だ」

彌次彦「モシモシ、お前サンの様な、不完全な御粗末な、絲瓜の様な長たらしい

お顔では、鰻でも愛想を盡かして、又ラ又ラと滑つて逃げるのは當然ですよ。ア

ハ、ハ、ハ、」

駒彦「構ふない先陣の功名は俺が一番槍だ」

と云ひ乍ら、大手を振つて元氣好く、音を的に、四股踏み乍ら進み行く。

彌次彦「ヤア御一統サン、此處が即ち、所謂、取りも直さず、臥龍姫の隱家で御座います。それはそれは奇妙奇天烈、不思議千萬な妖怪窟ですから、其お積りで不覺を取らぬ様になさるが宜からう」

音彦「ヨ、この窟に似合はぬ立派な構へだ。エルサレムの何誰様の娘か知らぬが一つ探險して見ようかい」

(大正一一・三・二〇 舊二・二二 藤津久子録)

## 第一八章 石門開〔五四四〕

巖窟内に、有り得べからざるやうな立派な石壁をもつて圍まれたる邸宅の前に、一行五人は到着した。

音彦「ヨ、立派な構へだ、而も堅牢な石をもつて城壁を繞らし、門扉迄が石造と來て居るワイ。これは容易に侵入する事は出来なからう、琵琶の音の主は「て

つきり】此處だ。戀女の隠棲せる處と思へば心臓の鼓動が激しくなつたやうだ」  
龜彦「何を吐くのだ。未通息子が未通娘のやうに、好い年をして心臓の鼓動が激しくなつたもあつたものかい、摺枯しの阿婆摺男めが」  
音彦「オイオイ、龜サン、ちつと場所柄を考へて呉れぬと困るぢやないか、想思の女の館の前に來てさう色男をボロクソに云ふものぢやないよ」  
駒彦「アハ、困つたやつだ。又持病が再發したと見えるワイ、氣が付くやうに拳骨の頓服劑でも盛つてやらうか」  
音彦「ヤアヤア、石門をもつて四邊を築固めたるこれの棲み家、「てつき」り曲津の巢窟と覺えたり。吾等は三五教の宣傳使、敬神愛民の大道を天下に宣布し、善を勧め惡を懲す神司なるぞ。尋ね問ふべき仔細あり、一時も早く此門開けよ」  
と大音聲に呼はつた。門内には何の應答もなく森閑と靜まり返つて居る。只幽に琵琶の音の漏れ來るのみである。  
彌次彦「モシモシ、宣傳使さま、この館の人間は、何れも之も皆聾神さまばかりですから呼んだつてあきませぬよ。【そこ】は此彌次サンでなくては、この神祕

の門扉を開く事は不可能だ

音彦 「如何して開くのだ、云つて呉れないか」

彌次彦 「最前も云つた通り、要領を得なくては要領を得させないのですから」

音彦 「何だか不得要領な事を云ふ男だ。金でも呉れと云ふのか」

彌次彦 「マアソナものかい、お前さまは狡い人だから。要領を得度いと云へば

大抵極つたものだ。聾の眞似をして居るから、それがホントの金聾と云ふのだ」

音彦 「あまり馬鹿らしいから止めとかうかい、如何なつと工夫をすれば開くであ

らう。聾の神と云よつたからには、大方龍神だらう、聾と云ふ字は龍の耳と書く

から、これや【てつきり】長さまに相違はない、ヨシヨシ、かう分つた以上は彌

次サンのお世話にはなりますまい」

この時門内より大聲に、

「吾門前に來つてブツブツ囁く奴は何者だ」

音彦 「ヤアその方は、聾神の龍神か、耳が聞えねば目で聞け、某は三五教の宣傳

使音彦、龜彦、駒彦の一行だ。直に門戸を開いて吾々を歓迎致せ」

門内より、

「アハ、ハ、ハ、ウラル教のへボ宣傳使、龍宮の一つ島に三年の閒宣傳を試み、櫛風沐雨の苦心慘憺的活動も残らず水泡に歸し、アーメニヤに向つて心細くも歸らむとする途中颯風に遇ひ、又もや森林の中に一夜を明かし、肝玉を押潰され、しよう事なしに、三五教に歸順した、垢の抜けぬ宣傳使の音、龜、駒の三人か。よくも、ノメノメと出て來たなア、盲目蛇に怖ずとは汝の事だ。アハ、ハ、ハ、」

音彦「エイ、矢釜敷いワイ。一時も早く此門を開かぬか、此方にも考へがあるぞ」  
門内より、

「アハ、ハ、ハ、分らぬ奴だ。神祕の門は汝自ら汝の力をもつて開くべきものだ。少しの勞を惜み、他人に開門させむとは狡猾至極の汝の舉動、神祕の鍵を持ち忘れたか」

音彦「ヤア、此奴中々洒落た事を云ふワイ、オ、さうだ。これ位の石門が開けないやうな事で、どうして天の岩戸開きの神業が勤まらうか、さうだ、さうだ。餘り開門ばかりに精神を傾注して肝腎の神言を忘れて居た。ヤア尤も千萬なお言葉

だ。サア龜公、駒公、神言だ」

と云ひながら神言を奏上する。祝詞が終ると共に、さしも堅牢なる石門は音もな

く易々と左右に開いた。

音彦「ア、祝詞の通りだ。如此宣らば、天津神は天の磐戸を推披きて、天の八重

雲を伊頭の千別に千別て所聞召さむ、國津神は高山の末短山の末に上り坐て、高

山の伊保理短山の伊保理を搔分て所聞召さむと云ふ神言の實現だ。サアこれで一

切の秘訣を悟つた。一にも祝詞、二にも祝詞だ。なア龜サン、駒サン」

龜、駒無言の儘俯向く。音彦は門内に佇む大男の姿を見て、

音彦「ヤアお前は夢にみた蟒の野呂公ぢやないか、どうして此處に居たのだ」

野呂公「夢と云へば夢、現と云へば現、どうせ今の人間は誰も彼も夢の浮世に夢

を見て居るのだ。確りした奴は目薬にする程もあるものぢやない。それでも三五

教の宣傳使だと思へば佛壇の底ぬけぢやないが、悲しうて目から阿彌陀が落ちる

ワイ、アハ、ハ、ハ、」

音彦「何は兔もあれ、臥龍姫に先刻お目にかかった色男の音彦サンが御來臨ぢや

と、報告して呉れ」

野呂公「エ、仕方がない、今直に申上て来るから、御返事のある迄は此處に神妙に立つて居るのだ。一寸でも許しの無いに此方に這入つてはいかないぞ」

と云ひながら野呂公は姿を隠した。

龜彦「野呂公の奴いつ迄かかつて居るのだらう。何ほど奥が深いと云つても知れたものだが、随分「じらし」よるぢやないか。ヤア彌次彦、與太彦大に憚りさまだつた。お蔭で門はお手のもので開きました」

彌次彦「門は開いても、開かぬのはお前の心だ。可憐さうなものだよ」

龜彦「無形的精神の門戸が開けたか、開けぬか、ソナ事がどうして観測出来るか、精神上の事が、體主靈從的人物に分つて耐らうかい。二言目には要領だとか、何とか云つて手を出し、物質欲に憂身を糞す代物に吾々の思想上の明暗が分らう筈がない。餘計な無駄口を叩くな」

彌次彦「アハ、ハ、ハ、さつぱり分らぬ宣傳使だ。彌次彦、與太彦の御兩人さまは如何なるお方と心得て居るか。後で吃驚して泡を吹くなよ」



と云ひながら、忽ち赤白の二つの玉となつてブーンと唸りをたてて何處ともなくかけ去つた。

音彦「ヤア何だ。彼奴は唯の代物では無かつたやうだ。それにしても野呂公の奴、何時迄「のろ」のろと埒の明かぬ事だらう、アア何事も自分がやらねば人頼りにしては埒が明かぬものだ。オイ龜公、駒公、何も躊躇逡巡するに及ばない。此方から出かけて行かうぢやないか。如何なる秘密が包藏されてあるか知れないから、十分氣をつけて進む事にしよう。この臥龍姫の正體を見届けた者が、金鷄勳章功一級、勳一等だ。サアサア構ふ事はない、前進々々、突喊々々」

と、足を揃へて玄關目蒐けて掛登つた。目も届かぬばかりの長い廊下を九十九折に曲りながら、足音荒くドンドンと進み行く。

音彦「ヤア何だ、誰も居ないぢやないか、ピタツと岩に行き詰つて了つた。マアマア此處に寛くり氣を落つけて第二の策戦計畫に移らうぢやないか」

音（空を仰いで）

「ヤア巖窟に似合ぬ非常に高い天井だ。ヤアヤア日の出別の宣傳使が天の鳥船に

乗つて推進機の音高く、航空して居るぢやないか』

この時前方より柔しき女の宣傳歌が聞え來たる。

龜彦『ヤア駒公、これや大變だ、野天ぢやないか』

駒彦『ホンニホンニ、路傍の岩の上だ。合點の行かぬ事だなア』

女宣傳使は、チヨクチヨクと三人の前に進み來り、

女『ヤア貴方は三五教の宣傳使様で御座いますか、只今日の出別の宣傳使様が三

人の男女の宣傳使と共に、コシの峠の麓に馬の用意をしてお待ち受けです』

音彦『ヤアこれは合點の行かぬ、テツキリ巖窟の中だと思つて居たのに、果しも

なき荒野原。さう云ふ貴女は何れの神様か』

女『ハイ、私は聖地エルサレムの者で、黄金山の埴安彦の神様の教を傳ふる三五

教の宣傳使出雲姫と申すもの、長途の宣傳ご苦勞で御座いました。サアどうぞ妾

に隨て此方へお越し下さいまし、寛くり休息の上海山のお話を交換いたしませう。

左様ならばお先に失禮』

と云ひながら先に立つて草生茂る野路をトボトボと歩み行く。三人はその後につ

いて怪訝くわいがの念ねんに驅かられつつ進すすみ行く。

(大正一一・三・二〇 舊二・二二 加藤明子録)

## 第一九章 馳走ちそうの幕まく(五四五)

音彦おとひこ、龜彦かめひこ、駒彦こまひこの三人さんにんは、出雲姫いづもひめに誘さそはれ、足あしを早はやめて漸やうやくタカオ山脈さんみやくの口の岬たつげの麓ふもとに着ついた。此處ここには巨大きよだいにして平面へいめんなる數個すうこの岩石がんせきがあり、岬たつげの兩側りやうがはに竝立へいりつして居ゐる。日ひの出別命でわけのみことを初はじめ、鷹彦たかひこ、岩彦いはひこ、梅彦うめひこはその中なかの最もつとも巨大きよだいなる岩いはの上うへに、足あしを延のばして寢轉ねころび休やすらい居ゐる。

出雲姫いづもひめ、音彦おとひこ様さま、その他たの方々かたがた、サゾお疲勞くたびれでせう。これがコシの岬たつげの登のぼり口くちで御座ございます。日ひの出別でわけの宣傳使せんでんし一行いっかうは、今いまお睡眠中やすみちゆうですから、お目めの覺さめる迄まで、静しづかに此處ここで、あなた方がたも足あしを延のばして御休ごきゆう息下そくくださいませ。妾わたしは少すこしく神界しんかいの御用ごよの都合つがふに依よりて、一足ひとあしお先さきへ參まゐります。また後のちほどフサの都みやこでお目めにかか事こと

に致いたしませう」

と言いひ遣のこし、足早あしはやに峠たうげを登のぼり行くその早はやさ、

音彦おとひこ「ヤアナンド、折角せつかく美人びじんの道連みちづれが出来できたと思おもへば、コンナ處ところでアリヨウスを

喰くはされて、奴拍子どべうしの抜ぬけた事ことだ。天あまの磐船いはふねから何時いつの間まにか、吾々われわれ三人さんにんを墜落つあらく

させよつた腹癒はらいせに、日ひの出別でわけを初はじめ一行いっかうの連中れんちゆうに對たいし、報復はうふく手段しゆだんを、講究かうきゆうせな

くてはならうまい」

龜彦かめひこ「ヤア幸さいはひ羽はねの無ない磐船いはふねの上うへに、四人よにんがゴロリとやつて居ゐるのだから、ナン

トか一ひとつ嚇おどかしてやらうかなア」

駒彦こまひこ「コラ措おけ措おけ、日ひの出別でわけの宣傳使せんでんしは、神變しんべん不可思議ふかしぎの神德しんとくを所持しよぢして居ゐる

から、反對あへこべに吾々われわれがやられるかも知しれやしない。先まづおとなしくして下したから出でて、

マ一度いちどご保護ほごを受けうける方ほうが、賢明けんめいな行方やりかただよ」

音彦おとひこ「それでもあまり吾々われわれを馬鹿ばかにしよつたから、何なんとかして、吃驚びつくりをさしてや

らねば蟲むしが得心とくしんせぬぢやないか」

龜彦かめひこ「貴様きさまは三五教あななひけうの宣傳使せんでんしぢやないか。宣傳使せんでんしが未まだソソンナ卑劣けちな根性こんじやうを保留ほりう

して居るのか」

音彦 「アハ、ハ、ハ、龜公、貴様は馬鹿正直な奴だ。誰がソナナ心を持つて居るものか、あまり嬉しいから、一寸貴様がどう云ふか心を曳いて見たのだ。神はトコトンまで氣を引くぞよ、改心致されよ、改心ほど結構な事はないぞよ」

龜彦 「アハ、ハ、ハ、何を吐しよるのだ」

音彦 「岩に松の堅い神代が造られて、日の出の守護と致すぞよ」

駒彦 「岩の上に、日の出別命が寢て居るぢやないか、もはや松の世は建設された

やうなものだよ」

音彦 「巖に松が生えて、日の出の守護になるといふ瑞祥だ。どうぞ日の出別神様

は、これなりに眼を覺さず、蒲鉾板の様に岩を背中に負うて、何時までも豎磐常

磐に御守護して下さらば、世界の人民が勇んで暮す五六七の世になるけれどなア。

ワツハ、ハ、ハ、」

駒彦 「岩の上に岩公が、フンゾリ返り、鷹公が高躰をかき、梅公がウメイ鹽梅で、

スウスウとスウさうな鼻息をして睡眠んで居ると云ふのも、神代の出現する瑞祥

だアハ、ハ、ハ

音彦「そこへお出になつたのが音サンだ。コンナ結構な神徳は、龜の齡の龜サンぢやないが、千年も萬年も御神徳を音サン様にして、身魂を研くと云ふ前兆だ。困つたのは駒公だ……イヤ困るのは駒サン計りでない、ウラル教の守護神、八頭八尾の大蛇と、金毛九尾のコンコンサンだ……」

駒彦「馬鹿にするない、俺計り繼兒扱ひにしよつて……コシの峠を越すのは、駒サンの御用だ、何程足が痛いと言つても、駒サンがヒーシンヒンと、一つ鼻息を荒くし足掻を行つたら、スツテントーと、大地へ空中滑走の曲藝を演じ、この深い谷底へ着陸し、プロペラを粉碎して、吠面をかわかねばならぬのは、今に一目瞭然だよ」

音彦「峠に掛つたから、駒サンが敵愾心を起し、奮闘する様に、一寸駒に鞭つて見たのだ。決して悪い氣で云つたのぢやない。神直日大直日に見直し聞直し、凡ての事を善意に解釋するのだ。瘦馬の様に、營養不良神經過敏な面をして居るか、一つ春駒の勇むやうにヒントを與へたのだよ」



目を塞ぎよつて、一方の眼を獵師が兔でも狙ふ様に、クルリと開けて眠てる奴は、どうせ碌な奴ではない。此奴は横死の相がある、可哀相なものだ。寝る時にはグツタリと寝、起きる時には潔く起きて活動するのが人間の本分だ。こいちや因果者だから、半分寝て半分の目は起きて居やがる」

駒彦「定つた事よ、右の眼はウラル教、左の眼は三五教だ。まだ守護神が改心せぬと見えてウラめし相に、片一方の目は團栗の様な恰好して睨んでけつかるのだ。

……オイ岩公、良い加減に起きぬかい」

岩彦「グウグウ……」

音彦「ヤアナンだ。寝言ぬかしてけつかつたのだナア。それにしても、目を開けて寝る奴は厭らしいぢやないか」

龜彦「さうだ、本當に厭らしい。どうぞや、片一方の目を剔出してやつたら本當に改心するかも知れないぞ。三五教の北光神の様に「あゝ有難い神様、私はまだ一つの目を與へて貰ひました」なんて言ひよれば、本當に改心をしてるのだが……一つ改心の有無を試験してやらうか」





岩彦 『ダダ誰だ、俺の足をひつぱる奴は、大方音公だらう。北光神の様に片目に

してやらうかい、ナア音公、グウグウ ムニヤムニヤ』

音彦 『ヤア怪體な奴ぢや、やつぱり此奴は半眠半醒状態だ。自己催眠術にかかり

よつて幻覺でも起して居ると見えるワイ』

鷹彦 『アハ、ハ、ハ、ハ』

梅彦 『ウフ、ハ、ハ、ハ』

龜彦 『ヤア一時に覺醒状態になりよつたなア』

鷹彦 『オイ貴様等三人は、何處を間違つて居つたのだ。貴様等の顔はなんだ、

蜘蛛の巣だらけぢやないか。いつ手水を使うたか分らぬ様な面付しよつて、その

態は一體どうしたのだ』

音彦 『曖昧濛糊として譯が分らぬやうになつて來たワイ』

鷹彦 『狸穴にひつぱり込まれよつて、ナニ今頃に寢言を云つてるのだ。此處はど

こだと思つてるツ』

音彦 『どこだつて、此處ぢやと思つてるのだ』

鷹彦 「此處は定つてる、地名は何だ」

音彦 「知名の士は、鷹公、梅公、岩公、日の出別の宣傳使だ」

鷹彦 「馬鹿、所の名は何處だと云うのだ」

音彦 「所の名は、やつぱり所だ」

鷹彦 「今は何時ぢやと思つとる」

音彦 「定つた事だ、昨日の今頃とは、言ふ間丈遅いのだ」

鷹彦 「オイ岩公、起ぬか起ぬか、三人の奴、ド狸に魅まれて來よつて、蜘蛛の巣

だらけになつて、催眠術にかかつた様な事をほざきよるのだ。一寸やそつとに、

覺醒する豫算がつかぬ、強度の催眠状態だから。一つ貴様と協力して片一方の目

を剔つてやつたら、チツとは氣が付くだらう」

岩彦 「そら面白からう。吾輩の目の玉を抜いてやるなんて、明盲奴が最前から岩

上會議をやつて居よつたのだ。オイ音公、龜公、駒公、目を出せッ」

音彦 「この頃は春先で、何處の草木も澤山に芽を出して居るワイ。ナンダか頭が

ポカポカして來だした。アハ、ハ、ハ」

鷹公は三人の前にスツと立ち、プウプウと霧水を、面上目がけて吹きかけた。三人は初めて吃驚し、

三人「ヤア此處はどこだ。岩窟の中ぢやないか」

とキヨロキヨロ見廻す。琵琶の聲は幽かに聞えて、奥の方より玉の中から現はれた美人の顔に酷似の主が琵琶を抱へ乍ら、ニコニコとして現はれて来た。三人は附近をキヨロキヨロ見廻せば、日の出別の宣傳使の姿も、その他三人の影も、巖も何も無い。以前の石畳をもつて繞らしたる岩窟内の女神の屋敷であつた。音彦「ヤア夢とも現とも何とも譯が分らぬぢやないか。やつぱり醜の岩窟だけの

特色が有るワイ」

三人は目を見張り、首を傾けて怪訝の念に打たれ、兩手を組み、青息吐息の態にて、一言も發せず、沈黙を續けて居る。琵琶を抱へた美人は、しとやかに襠姿の儘、三人の前に靜かに座を占め、  
「コレハコレハ三人の宣傳使様、能くも妾が茅屋を御訪問下さいました、嚙々お腹が空いたで御座いませう。蜥蜴の吸物に百足のおひたし、蛙の膾に蛇の蒲焼、

お口くちに合あひますまいが、ゆるりとお食あり下くださいませ。コレコレ松まつや、春はるや、お客きやく様に御膳おぜんを持もつて來くるのだよ」

音彦おとひこ「イヤー、モシモシ滅相めつさうな。蜥蜴とかげや百足むかで、蛙かへる、蛇へび、ソナ御馳走ごちそうを頂戴ちやうだいいた

しましては、冥加みやうがに盡つきます。どうぞ御構おかまひ下くださいますな」

美人びじん「オホ、、、、、お嫌きらひとあれば仕方しかたが御座ございませぬ。然しからば【なめくぢ】

のつくり身みに、蚯蚓みみずの餛飩うどんでも如何いかにで御座ございませう」

音彦おとひこ「イヤ、コレハコレハ一向いっかう不調法ぶてうはふで御座ございます。どうぞ御心配ごしんぱい下くださいますな。

このお宅たくは何時いっつもさういふ物ものを召めしあがるのですかなア」

美人びじん「オホ、、、、、妾わらわは蛙かはずが好物だいかうぶつですよ」

音彦おとひこ「オイオイ龜公かめこう、駒公こまこう、どうやら此奴こいつア怪あやしいぞ。ノロノロと違ちがうか」

美人びじん「オホ、、、、、妾わらわの夫おつとは隣りんの野呂公のろこうと申まをします」

音彦おとひこ「ヤア失敗ししまつた、野呂公のろこうの奴やつ、到頭計略たうとけいりやくにかけよつて、コンナ岩窟いはやの中なかへ引ひ

つ張り込こみよつたのだらう、油斷ゆだんの出來できぬ奴やつだ。斯かう立派りっぱな邸宅ていたくと見みえて居ゐるが、

どうやら、フル野ヶ原のがはらの草茫々くさぼうぼうと生はえたシクシク原はらではあるまいかな。オイ龜公かめこう、

駒公、一寸そこらを撫でて見よ、立派な座敷の様なが、ヒヨツとしたら芝ツ原か  
も知れぬぞ」

美人「イヤお三人のお方、御心配下さいますな。……あなた方は醜の岩窟の探

検はどうなさいました」

音彦「醜の岩窟の、いま探險最中だ。岩窟の中かと思へば、野ツ原のやうでもあ

り、野原かと思へば、岩窟の中でもあり、何が何だか、一向合點が承知仕らぬワ

イ。ナンでも貴様は大化物に相違ない。もう斯うなつた以上は、ウラル教の地金

を現はし、雙刃の劍の刃の續く限り、斬つて斬つて切りまくり、荒れて荒れて暴

れ廻り、汝等が化物の正體を、天日に曝して、天下の禍を斷つてやるから、覺悟

を致せ」

美人「ホ、ホ、ホ、あのマア音サンの氣張り様、苧殻に固糊をつけたやうな腕を

振りまはして力味シヤンス事ワイナ。肝腎の身魂も研けずに、腹の中に……イ

イヤ腹の岩窟に、澤山の曲津を棲息させて、足許の掃除もせずにおほけなく

も、醜の岩窟の惡魔退治とお出掛なさつた、心根がいじらしう御座ンす。

ホ、、、、、」

龜彦「エー言はして置けば、ベラベラ能う囀る野呂蛇奴が、人を馬鹿にするな。

一寸の蟲にも五分の魂だ。一寸刻の五分試し、思ひ知れよ」

と雙刃の劍に手をかけて立上らむとし、

龜彦「アイタ、、、、ナンド、床板が足に固着して了つた」

美人「龜サン、それはお氣の毒さま、床板に足が固着しましたか。コチヤ苦にな

らぬ、コチヤ構やせぬ。ホ、、、、」

龜彦「エーもう斯うなる上は、破れかぶれだ。覺悟を致せ。オイ駒公、しつかり

せぬかい。この阿魔女を、俺に代つてブスリとやるのだ」

駒彦「八釜しう云ふない、俺の身體は、信神堅固なものだ。首から下は斯ういふ

場合に天然的にビクとも動かぬ一大特性を、完全に具備して御座るのだよ」

龜彦「何減らず口を吐しよるのだ。貴様は身體強直したな」

駒彦「吾輩の身心は鞏固不拔なものだ、ビクとも致さぬ某だ」

龜彦「ヤイ音公、貴様なにマゴマゴしてるのだ。二人の敵を討たぬかい」

音彦「敵を討てと云つたつて、堅木所か、松の木も、杉の木も生えて居ないぢやないか。難きを避けて易きに就くが處世の要點だよ」

美人「ホ、ホ、ホ、ホ、モシモシお三人様、あなた様は三五教の宣傳使丈あつて、随分お堅いお方、あなたの肝腎の靈も、靈肉一致して堅くなつて下さらむ事を希望いたします」

龜彦「エー放つときやがね。オーさうだ、良い事を思ひ出した、神言だ。惡魔調伏の唯一の武器を所持して居るこの方を、ナント心得とる。サアこれから言靈の亂射だぞ。生命の惜い奴は、一時も早く逃げたがよからうぞ」

美人「ホ、ホ、ホ、ホ、あなたの言靈は、三味線玉ですよ。ソナボンボン三味線でも、神力が現はれますかな」

龜彦「エー八釜しいワー、最前も貴様の宅の石門を開いた、現實的經驗があるのだ。吾輩の言靈を敬虔の態度を以て、經驗の爲に聽聞を致せ」

美人「オホ、ホ、ホ、ホ、どうぞ聽聞さして下さいませ。妾が爲に頂門の一針、あなたの爲にも前門の狼後門の虎、随分御用心なされませや」



龜彦「エー人を馬鹿にして居よる、………オイ音サン、駒サン、言靈の一斉射撃だ。鶴翼の陣を張つて、一聲天地を震撼し、一音風雨雷霆を叱咤する、無限絶對力の天津祝詞の太祝詞、善言美詞の言靈の發射だよ」

音彦「タ、タ、カ、カ、タカ、ヒ、ヒ、ヒ、コ、ニ、ホ、ホカサレ、ヒ、ヒノデノ、ワケニ、ス、ステラレ………」

龜彦「オイ音公、何を吐しよるのだ、「高天原」を言ふのだぞ」

音彦「ナンだか知らないが、自然的に脱線するのだ」

美人「ホ、ホ、ホ、ホ、モシモシ音サン、龜サン、駒サン、あなた方は何がお商賣で

御座いますか」

音彦「いまさら尋ねるに及ばぬ、勿體なくも、三五教の宣傳使の御一行だ。この

方の被面布が目に着かぬか、盲女奴」

美人「被面布は、どこに御所持で御座います、お頭にも懸つて居らぬ様ですが」

音彦「音公は頭へ手をあげて見て、

音彦「ヤア何時の間に消滅して了ひよつた。………オイ龜公、駒公、貴様等の

被面布はどうした」

龜、駒「ヤア吾々も何時の間にか、過激な労働をしたので、磨滅して了つたらしいワイ」

美人「ホ、それでは、三五教の宣傳使も被免になりませう。お氣の毒さま」

音彦「エーけつたいの悪い、一體此處はどこだ。モウ吾輩も兜を脱ぐから、魔性の女、斯う五里霧中に彷徨つては仕方がない。頭からカブリなと呑みなと、勝手にせい。俺の身體は全部貴様に任した、エー棄鉢だツ」

美人「ヤア三人のお方、そこまで行つたら、あなたの臍下丹田も、岩戸が開けました、能う改心して下さいました。此處はフル野ヶ原の醜の岩窟の中心點、木花咲耶姫命が經綸の聖場、高照姫神の堅磐常磐に鎮まり給ふ岩窟第一の珍の御舎で御座います。サアサアこれから妾が先達となつて、この岩窟の探險を首尾能く終了させませう。決して執着心を、又もや持たぬ様に、今の心になつて神業に参加して下さい。この先種々の怪物が現はれても、必ず御心配なされませぬ。生命を棄てると云ふ御考へならば、ドンナ難關でも、無事に通過が出来ますから………

………

………

………

………

………

………

………

………

………

………

………

サア斯う定つた以上は、一時も早く當館を御出立遊ばして、醜の岩窟の修業場を巡回して下さい。何れ日の出別の宣傳使にも、その他の方々にも、この岩窟内で御對面が出来ませう、左様なら」

と徐々と襖を開いて奥の間に姿を隠したりける。

音彦「ア、随分吾々の身魂は、種々の殘滓物が蓄積してると見えて、散々な目に會はされたが、何だか生れ變つた様な心持になつた。氣分も晴々として來た、サア是から醜の岩窟の探險だ。あまり日の出別の宣傳使を依頼にするものだから、妙な幻覺を起したり、迷うたのだ。改めて神言を奏上し、岩窟の探險と出掛るところとしようかい」

龜、駒「左様で御座います。結構さまで御座います。謹んでお伴を致しませう」  
音彦「ア、あなた方も、是で善言美詞の言靈が使へる様になつて來ました、私もどうぞあなた方のお力を借つて、共に岩窟の修業をさして頂きませう。サア皆さま参りませう」

と今までの野卑な言葉を改め、心より清々として、三人は岩窟の探險に出かける

事こととなりける。

(大正一一・三・二一 舊二・二三 松村眞澄録)

第二〇章 宣替のりかへ〔五四六〕

音彦おとひこ、龜彦かめひこ、駒彦こまひこの三人さんにんは、臥龍くわりよう姫ひめの館やかたを後あとに見みて、又またもや巖窟がんくつ内ないの探險たんけんに出でかけた。九十九折つくもをれの或あるひは廣ひろく、或あるひは狹せまく、或あるひは天井てんじやうたか高く、或あるひは低ひくき石徑いしみちを宣傳せんでん歌かを歌うたひ乍ながら、勇いさましく進すすみ行ゆく。

☐ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立別たてわける  
この世よを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ  
唯何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほせ聞直ききなほせ  
身みの過あやまちは詔のり直なほせ 醜しこの窟いはやの曲神まがかみを

吾等三人の宣傳使  
言向和し神の世を

堅磐常磐に立てむとて  
進み來りし其の間に

何時か誇りの雲覆ひ  
心は暗き闇の道

誠の道を踏み迷ひ  
夢に夢見る心地して

心たかぶる其の儘に  
磐樟船に乘せられて

九天高く昇りつめ  
やつと安心する閒なく

喜び消えて夢の間の  
荒野ヶ原に踏み迷ひ

得體の知れぬ野呂サンに  
寂しき野邊に廻り合ひ

荒き言葉のその中に  
神の恵みの玉の聲

含みあるとは知らずして  
肩臂怒らし進み行く

わが身の程も恥しき  
夢が現か幻か

心の暗きわれわれは  
黑白もわかぬ闇黒の

再び窟の人となり  
醜の身魂の數多く

前後左右に飛び廻る  
中を切り抜けやうやうに

光<sup>ひかり</sup>を三<sup>み</sup>又<sup>また</sup>の道<sup>みち</sup>の角<sup>かど</sup>

思<sup>おも</sup>ひがけなく衝<sup>つき</sup>當<sup>あた</sup>る

痛<sup>いた</sup>さは痛<sup>いた</sup>し胸<sup>むね</sup>の闇<sup>やみ</sup>

得<sup>えたい</sup>體<sup>たい</sup>の知<sup>し</sup>れぬ彌<sup>やじ</sup>次<sup>じ</sup>彦<sup>ひこ</sup>や

酒<sup>さけ</sup>も飲<sup>の</sup>まぬに與<sup>よ</sup>太<sup>た</sup>彦<sup>ひこ</sup>の

二<sup>ふたり</sup>人<sup>ひと</sup>の男<sup>をとこ</sup>に出<sup>で</sup>會<sup>あ</sup>して

開<sup>ひら</sup>き兼<sup>かね</sup>たる石<sup>いし</sup>の門<sup>もん</sup>

天<sup>あまつ</sup>津<sup>つ</sup>祝<sup>のり</sup>詞<sup>こと</sup>の言<sup>たま</sup>靈<sup>ま</sup>に

さつと開<sup>ひら</sup>いて眺<sup>なが</sup>むれば

果<sup>はて</sup>しも知<sup>し</sup>らぬ長<sup>なが</sup>廊<sup>らう</sup>下<sup>か</sup>

一<sup>いち</sup>目<sup>もく</sup>散<sup>さん</sup>に進<sup>すす</sup>み行<sup>ゆ</sup>く

行<sup>ゆ</sup>けども行<sup>ゆ</sup>けど果<sup>はて</sup>しなく

心<sup>こころ</sup>の駒<sup>こま</sup>の逸<sup>はや</sup>る間<sup>ま</sup>に

行<sup>ゆ</sup>き詰<sup>つま</sup>りたる岩<sup>いは</sup>壁<sup>かべ</sup>に

はつと氣<sup>き</sup>がつき眺<sup>なが</sup>むれば

こは抑<sup>おさ</sup>も如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>に大<sup>おほ</sup>空<sup>そら</sup>に

きらめく星<sup>ほし</sup>の數<sup>かず</sup>多<sup>おほ</sup>く

怪<sup>あや</sup>しみみたる折<sup>をり</sup>柄<sup>から</sup>に

玉<sup>たま</sup>をあざむく優<sup>やさ</sup>姿<sup>すがた</sup>

いづくの方<sup>かた</sup>か出<sup>いづ</sup>雲<sup>も</sup>姫<sup>ひめ</sup>

フサの都<sup>みやこ</sup>に進<sup>すす</sup>まむと

先<sup>さき</sup>に立<sup>た</sup>ちてぞ出<sup>いで</sup>て行<sup>ゆ</sup>く

吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>三<sup>み</sup>人<sup>たり</sup>の宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>使<sup>し</sup>

コシの峠<sup>たうげ</sup>の麓<sup>ふもと</sup>まで

到<sup>いた</sup>りて見<sup>み</sup>ればこは如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>に

日<sup>ひ</sup>の出<sup>で</sup>の別<sup>わけ</sup>の宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>使<sup>し</sup>

鷹<sup>たか</sup>彦<sup>ひこ</sup>岩<sup>いは</sup>彦<sup>ひこ</sup>梅<sup>うめ</sup>彦<sup>ひこ</sup>の

四<sup>よ</sup>人<sup>にん</sup>千<sup>ち</sup>引<sup>びき</sup>の岩<sup>いは</sup>の上<sup>へ</sup>に

白河夜船の夢結ぶ あゝ嬉しやと思ふ間も

【あらし】の音に目を醒し よくよく見ればこは如何に

臥龍の姫の住ひたる 奥の一閒に端坐して

蜥蜴蚯蚓や蛇蛙 見るも穢き【なめくぢり】

蚯蚓の馳走を與へむと 貴の女神にすすめられ

遠慮會釋の折柄に 三人の身體は鐵縛り

手足も自由にならぬ身の いよいよ生命を捨鉢の

決心したる折柄に 臥龍の姫は忽ちに

優しき笑顔を現はしつ 水も漏さぬ善言美詞

宣り聞されし嬉しさに 衿の夢も何處へやら

直日の身魂輝きて ここに館を【いづのめ】の

神の身魂となりそめし 三五教の宣傳使

【そしり】言の葉吹き拂ひ 【みやび】言葉の神嘉言

詔り直し行く勇ましさ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも たとへ大地は沈むとも

窟の曲津多くとも 神の賜ひし言靈に

言向和し三五の 神の教を縦横の

錦の機此の仕組 仕へまつらむ宣傳使

あゝ面白し面白し 心は勇む岩の道

岩より堅き銳心の 大和心を振り起し

伊都の雄健び踏健び 進みて行かむ神の道

進みて行かむ神の道

と歌ひながら、岩窟内の十字路に着いた。この時前方より現はれたる三人の男、  
岩彦「オー貴様は音公に龜公、駒公、何處に「まご」ついて居よつたのだい。馬  
鹿野郎だな。俺たち三人は貴様の行方を探して、幾度この八衢の隧道を廻つたこ  
とか知れやしない。一體何をぐづついとつたのだい」  
音彦「ハイ、コレハコレハ岩彦サンでございますか。誠に誠に御心配をかけまし



て濟すみませぬ。私わたくしは日ひの出別命様でわけのみことさまの磐船いはふねに、「あなた」方がたと一同いちどうに乗のせられて雲くもの上うへに上あげられ、ヤレ嬉うれしやと思おもつて居をりましたが、豈あにはか圖はからむや何時いつの間まにか草くさ茫茫ぼうぼうと生はえ茂しげる荒野あれのがほらヶ原らに、吾々われわれさん三人にんは振ふり落おとされてゐました。「あなた」様さま三人さん人は何どうして居をられますかと、今いまの今いままで心配しんぱいをして居をりましたが、マアマア御ご無事ぶじな御一行ごいつかうの御顔おかほを拜はいしまして、これ位くらゐうれ嬉しいことはございませぬ。これも三あな五教なひけうの神様かみさまの全まったくの御引合おひきあはせ有あり難がたうございます」

岩彦いはひこ「ナアンダ。俄にはかに御丁寧ごていねいな言葉ことばを使つかひよつて馬鹿ばかにするない。禮れいに過すぐれば却かへて無禮ぶれいだといふことを知らぬか。打うつて變かはつた貴様きさまの態たいど度き、氣きが狂くるつたのか、但ただしは化物ばけものか、合點がてんの行ゆかぬ奴やつだ。ナア梅公うめこう、此奴こいつはチト變癡へんちきちん奇珍きちんだぞ」

梅彦うめひこ「アーさうだ。三人さんにんの奴やつの面つらを見みい。營えい養やう不ふ良りやう、色いろ蒼あを白ざめ、身しん體たい骨こつ立りつ餓が鬼きの如ごとしだ。巖窟いはやない内の瓦斯ガスに醉よはされよつて精神せいしんに異状いじやうを來きたしたのだらう」

音彦おとひこ「コレハコレハ岩彦いはひこ、梅彦うめひこ、決けつして御心配ごしんぱい下くださいますな。精神せいしんに異状いじやうを來きたしたでも、何なんでもございませぬ。私わたくしは三五教あななひけうの宣傳使せんてんしでございませぬから、ナ—

龜かめサン、駒こまサン、些ちつとも氣きが狂くるつてはゐませぬなア」

龜彦 『左様々々、岩サン梅サンは大變心配をして下さるさうですが、決して異状

はありません、御安心して下さいませ』

岩彦 『オイ梅公、鷹公、ますます變だ。女郎の腐つたやうに俄に糞丁寧になりよ

つたぢやないか。オイ音公、龜公、駒公、貴様等は人を嘲弄するのか。あまり馬

鹿にするない』

龜彦 『イエイエ滅相なこと仰有いませ。決して勿體ない三五教の宣傳使様を嘲弄

ナンカしてどうして神様に申譯が立ちませう。私たちは三五教を天下に宣傳する

神の僕でございます』

岩彦 『ますます可笑しい奴だ。なぜ貴様は【さう】俄に女性的になつたのだ。モ

少し勇壯活潑な男性的の精神を發揮して、ベランメー口調でも使つて勇ましく噪

がぬかい。勇氣がなくては大事は遂行することは出来ないぞ。お正月言葉を使ひ

よつて、ナンダ。俄に氣分が悪いやうな御丁寧な言靈を使ひよるのか』

音彦 『ハイ、吾々三人は仔細あつて改心を致しました』

岩彦 『改心をすれば、さう女々しくなるものぢやない。何事も神様の御保護の下

に、活機臨々として天下に雄飛活躍せなくてはならないのだ。貴様は惟神中毒をしよつて、雨が降つたというては胸を躍らせ、風が吹くというては膽を潰し、燈心の幽靈のやうな細い細い精神になりよつて、ナンダ、その女々しい言靈は。ちつと確りせぬか。元氣がつくやうに二つ三つ拳骨をお見舞ひしてやらうか。これも貴様等を鞭撻するための情の鞭だ』

と云ひながら、蝶螺の如き拳骨を固め三人の頭をボカボカと急速度をもつて擲りつけた。

音彦『ご親切によう思つて下さいました。何卒これからは、幾度もご注意をして下さいませ』

岩彦『アハーやつぱり此奴どうかして居よる。オイ音公、確りせぬかい。貴様は魔に犯されたのだらう。ナンダその態度は』

龜彦『岩サンのご意見は御尤もでございます。決して無理とは申しませぬ。併し乍ら私等三人は以前に数十倍の力と強味が出来ました。如何なる難事に際會しても、少しも驚かぬやうになりました。如何なる敵に向つても怯めず臆せず、善戦

善闘するだけの神力を與へられました」

岩彦「オイ鷹公、梅公、一體合點が行かぬぢやないか。此奴の態度と云つたら丸で處女の如しだ。辛氣臭くて、長い長い口上を列べ立てよつて、干瓢でも「たぐる」やうに、「あた」辛氣臭い。骨無し力も無い、女々しい言靈、エー【ゲン】糞の悪い」

鷹彦「ヤア感心です。音サン、龜サン、駒サン、よう其處まで魂を研き、強うなつて下さいました。今までの三人サンとは違つて勇氣も百倍いたしました。嗚呼それでこそ如何なる敵にも打克つことが出来ませう。よい修業をなさいましたな

ア」

音彦「ご親切に能く言つて下さいました。貴方こそ本當の宣傳使様でございます。以後は何卒お見捨なくお世話下さいますやう御願ひ致します」

鷹彦「何う致しまして、お三人様お芽出度うございます。お互様に宜しく手を曳き合つて神の道に参りませう。貴方の方からもお見捨てなく」

岩彦「ナンダ。鷹公洒落ない。人が一生懸命に力を付けてやらうと思つて居るの

に、貴様は横車を押しよつて人を嘲弄するの。愈もつて怪しからぬ醜の巖窟式だ。ナア梅公、一體合點が行かぬぢやないか」

梅彦「岩サン、それは貴方のお考へ違ひでございませう」

岩彦「オツト待つた待つた。梅の奴、貴様までが逆上して何うするのだ。これだから精神の弱い奴は間に合はぬのだ。醜の窟の半分くらゐ探險してこれだから、全部探検する迄には「すつかり」軟化して章魚のやうに、骨も何も無くなつて了ふかも知れやせぬぞ。オイ皆の奴、しつかりせぬか。腰抜け野郎奴が。あゝコンナ腰抜け野郎を五疋も伴れて、この岩サン一人が奮戦苦闘強敵に當らねばならぬかと思へば、心細くなつて來るワイ。エー何奴も此奴も好い腰抜けの揃つたものだな」

鷹彦「岩サン、貴方モ一少し強くなつて下されや。外ばつかり強く見えても、肝腎の魂が落ついて居らねば、「まさか」の時の御間には合ひませぬからナア」

岩彦「エー腰抜け奴が、自分の目にある柱は見えぬでも人の目の埃はよう分るとは、貴様等のことだ。弱味噌奴が。何を吐かしよるのだい。天が地となり地が天

となる。變れば變つたものだ。弱い者を稱して強者といひ、強い者を稱して弱者といふ。如何に逆様の世の中だと云つても、見直し、聞き直し、詔り直しを宣傳する神の使が、さう道理を逆轉させては何うして此のお道がひらけると思ふか。しつかりせぬかい。何を呆けてゐるのだ。ア、情無いわ。エライ厄介ものを背負はされたものだワイ」

音彦「ア、私も岩サンのやうに空威張りの上手な心の弱い御方を、神様もナント思召してか知りませぬが、背負はして下さつたものだ。これも吾々の身魂研きの爲に、弱い方の標本をお示し下さつたのだらうか」

岩彦「骨無しの腰抜け、何を吐しよるのだ。女郎の腐つたやうな弱音を吹きよつて情なくなつて來たワイ。オイ鷹公、梅公、貴様も一つ、ポカンと目醒しをくれ

てやらうか」  
鷹、梅「ハイハイ何卒よろしうお願い申します。どつさりと氣のつくまで叩いて下さいませ」

岩彦「ハテ合點の行かぬ五人の男、此奴ア狐にいかれよつたな。コンナ弱蟲を引

率して悪魔との戦闘は、たうてい繼續されるものぢやない。ヤーヤー困つた事になつて来た。俺も一つ思案をせなくちやなるまい。オーさうだ。解つた。今まで俺は強い強いと思つてゐたが、人を杖について助太刀を頼むと云ふ心が悪かつたのだ。その點が俺の缺點であつた。これは神様が貴様一人で活動せ工。大勢の奴を力にしても駄目だ。「まさか」の時になつたら此の通りだ。何奴も此奴も腰抜け野郎だ。力と頼むは自分の守護神ばかりだ。イヤイヤ吾身を守護し給ふ元の大神様ばかりだ。人に頼るな、師匠を杖につくなといふ教があつたワイ。サア俺はモ一つ強うなつて神業に参加せなくてはなるまい。それにつけても今まで寢食を共にして来た五人連れ、俺でさへも神様から弱いと云つて戒められて居るのだから、コンナ弱味嚙を吾々として見棄てて置く譯にも行かない。ア、どうかして強くしてやりたいものだ。コンナ腰拔人足を世の中へ出したならば、これほど悪魔の蔓る荒野ヶ原であるから、自分一身を保護することも出来やしなない。ア、情無いことだ。大國治立の大神様、どうぞ此の五人のものを憐れみ下さいまして、貴方のお力を分配してやつて下さいませ。九分九厘といふ所で、十中の八九まで

大抵の宣傳使は腰を抜かして、屁古垂れるものだが、今ここに陳列してある五人の蝟宣傳使は、目的の半途にも達せずして殆ど崩壊して了ひさうだ。せめて九厘といふ所までなりと、活動さしてやつて下さいませ。國治立の大神憐れみ玉へ、助け玉へ。臆病神を拂はせ玉へ、清め玉へ、岩彦が眞心を籠めての一生の願ひでございます。惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世」

音彦「ア、岩彦のご親切、何時の世にかは忘れませう。流石は三五教の宣傳使様、よくも吾々をそこまで思つて下さいませ」

龜彦「ご親切に有り難う。骨身に應へます、嬉しうございます」

駒彦「性は善なり、人には添うて見よ、馬には乗つて見よとは、よく云つたことだ。岩彦の眞心が現はれて大神様の直接の慈言のやうに、嬉しう辱なう存じま

す」  
岩彦「ア、さつぱり駄目だ。モウ何ほど祈つたつて零點だ。ア、止みぬる哉止みぬる哉。ア、何とせむ方泣く涙、餘りのことで涙さへ出ぬワイヤイ」

鷹彦「岩彦のお心遣ひ、われわれ一統満足を致しました」



梅彦「本當に心の色が現はれて、コンナ嬉しいことは無い。やつぱり神様に選ばれた宣傳使様だけあつて、ご親切に報ゆるために吾々も、彼の弱い岩サンをモ一つ強くして上げねばなりません」

岩彦「コラ梅公、貴様そら何を云ふのだ。貴様より弱くなつて堪らうかい。今では俺が一番氣が確だ。ここは醜の窟だ。氣を張りつめて元氣を出さぬか。何がやつて来るか知れやしないぞ。せめて自分だけの保護だけ位はやつて呉れぬと、俺も十分に奮闘が出来はしないワイ」

斯る所へ何處ともなく百雷の一時に落下する如き大音響と共に、巨大なる大火光は一同の前に落下した途端、爆發して四方八方に火矢を飛ばした。

岩公はアツと言うて、その場に昏倒した。五人は依然として兩手を合せ、神言を奏上しつつありける。

(大正一一・三・二一 舊二・二三 外山豊二録)

(第一五章) 第二〇章 昭和一〇・三・二九 於吉野丸船室 王仁校正)

第二章 本靈（五四七）

巨大なる火彈爆發すると見る中に、忽然として以前の女神の姿が現はれた。五人は思はず平地に蹲んで最敬禮を表した。女神は聲も淑かに、  
道みちの勳いさをも鷹彦たかひこや、一度いちどに開ひらく白梅しらうめの、薰かをり床ゆかしき梅彦うめひこや、心こころの駒こまの勇いさみ立ち、  
誠まことの道みちに轟すくすく々と、進すすむ駒彦こまひこ萬代よろづよの、神かみの教をしへの龜彦かめひこや、言靈ことたま清きよき音彦おとひこよ、汝等なんぢら今いまよ  
り麻柱あななひの、神かみの教をしへを宣のべ傳つたふ、【いつ】の御魂みたまの宣傳せんでん使し、あゝ勇いさましし勇いさましし、  
もはや汝なんぢが身魂みたまの曇くもり、晴はれ渡わたりたり眞如しんによの日月じつげつ、心こころの海うみに隈くまなく照てり渡わたり、胸むね  
の仇浪あだなみしづ静しづまりたれば、一日ひとひも早はやく片時かたとぎも、疾とく速すみやけく、フサの都みやこに出立しゅつたつせよ、  
それにしても岩彦いはひこが、固かたき心こころは嘉よみすれど、三五あななひけう教せんの宣傳せんでん使しとして、今少いますこし足たらは  
ぬ處ところあれば、汝等なんぢら五いつの御魂みたまは岩彦いはひこが、心こころを「なごめ」、誠まことに強つよき益ます良す雄らとして、  
立ち働はたらかしめよ。斯かく申まをす妾わらはは天教山てんけつざんの木花姫このはなひめが和魂にぎみたまなるぞ、夢々ゆめゆめ疑うたがふ事ことなかれ  
と宣せんし終をはると共に、女神めがみの姿すがたは火煙くわえんと消きえにけり。五人ごにんは感謝かんしゃの涙なみだに咽むせびつつ、  
嗚呼ああ有難ありがたし忝かたじけなし、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうせむと一同いちどう宣のる言靈ことたまも圓滿えんまん清朗せいらう、その聲こゑはさ

しもに廣き遠き巖窟の内を隈なく響き渡りける。この言靈の聲に岩公はムクムク起き上り、

「ア、大變だ。エライ目に出會した。俺のやうな肝玉の太い宣傳使でも吃驚して一時性念を失つた位であるから、鷹公、龜公、駒公、音、梅の連中は定めて肝を潰したらう。ア、膽を潰すは俺位の程度の者だ。それ以下の程度の五人の奴は、大方木葉微塵となつたかも知れやしない。彼奴等にしても可愛い女房や子が國許に待つて居るのだから、エ、道連になつた好誼に骨なと拾つて女房や子供に届けてやらねばなるまい。これがせめてものこの岩サンの親切だ。ア、五人のもの情ない事になつて呉れたなア。何だか眞闇がりで目も碌々見えやしないわ。エ、仕方がない、鷹公の骨だか音公の肉だか區別はつくまいが、何でも女房や子の氣休めの爲に、これが鷹公の骨だ、これや髪だと云つて慰めてやるより仕方がないワイ。暗いと云つても、これくらゐ暗い事は開闢以來だ」

と云ひながら四つ這になり、  
岩彦「オイ鷹公の骨ヤーイ、音公の腕ヤーイ、俺は岩公ぢや、死んでも魂魄この

世に留まつて居るだらう、骨の所在地ぐらゐは俺に知らせやい。ア、コツクリ、コツクリと何處かへ散つて了つたと見える。あまり無残だ、焼けても灰なと残るのだが、髪の毛一本落ちて居らぬとは此奴はあんまり残酷だ。大方巖窟の化物が來よつて、餘り弱音を吹くものだから、蟒の奴弱味につけ込んで一呑みに呑みよつたに違ひないワ。待て待て、一行六人の三五教の宣傳使、五人まで大蛇に呑まれて俺一人が何うして「オメ」オメと生て還られようか。待て待てこれから膽玉の太いこの岩サンが、大蛇を見付けたが最後、足でもグツと出して、オイ蟒の奴、尻から俺を呑めと言擧げしてやらう。さうすれば大蛇の奴、あの岩公は手強奴だ、彼奴だけは逆も呑む事は出来ぬと因果腰を極めて居つたのに、先方の方から呑めと云ひよる、五人呑むも六人呑むも一しよだ。ヤア美味々々と蛇が蛙を呑んだやうに、呑みにかかるだらう。さうしたら此方の勝利だ。神妙に呑まれてやつて、這入がけに、頤の片一方に、この十握の劍をグツと引っかけて兩手で力一ぱい柄を握り、大蛇の奴がグツと呑めばグツと切れる。グウグツと呑めばグウグツと切れる。自業自得、大蛇は竹を割つたやうに二つにポカンと割れたが最後、呑まれ

てからまだ間もない五人の宣傳使、蟲の息でウヨウヨとやつて居るだらうから、其處へこの岩サンが恭しく神言を奏上し、聲も涼しく言靈の水火をもつてウンとやつたが最後息吹き返し、ア、誰かと思へば岩公サンか、イヤ岩サンか、誠にもつて有難い、貴方のお蔭でこの弱い吾々も命が助かりましたと半泣きに泣きよつて、手の舞ひ足の踏む處を知らずと云ふ歡喜の幕が下りるのだ。可愛い子には旅をさせと云ふ事がある。神様も随分皮肉だな、大蛇の喉坂峠を旅行して痛い味を知り、危険な關所を越えて初めて勇壯活潑なる大丈夫の宣傳使とならせる經綸だらう。あまり弱音を吹くものだから屹度神様の試鍊に遇うたのだらう、愚圖々々して居れば息が止まるか知れない。ヤアヤア巖窟に棲む大蛇の奴、五人喰ふも六人喰ふも同じ事だ。五人の奴は麥飯だ。この岩サンは名は固いが齒當りのよい味のよい鮫米のやうな肉着きだよ。サア早く尻の方から呑んだり呑んだり

暗がりより「アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、」

岩彦「ヤイ大蛇の奴、嬉しいか、嬉しさうな笑ひ聲をしようつて、サア早く呑まぬかい」

音彦 『モシモシ岩サン、お氣が付きましたか、それは誠に結構でございます』

岩彦 『モシモシ岩サン、お氣が付きましたか、結構だつて、ソナ辭令は後にし

て遠慮は入らぬ。結構だらう。早く呑んだり呑んだり』

鷹彦 『岩サン、結構は結構ですが、貴方はお考へ違ひでせう。吾々はお案じ下さ

いますな、助かつて居りますよ』

岩彦 『何だ、尻も甲もあつたものかい、足から喰へ、食料に缺乏して餓死に迫つ

て居つた處、半ダースも人肉の温かいのが来たものだから、結構でございますの、

吾々はお蔭で助かりましたのと、何を吐すのだい。愚圖々々して居ると侶伴の奴

の息が切れるワイ、遠慮は要らぬ早く呑まぬかい』

龜彦 『モシモシ岩サン、私は龜でございます、何卒ご安心して下さいませ。種々

のお心づくし、骨身にこたへて嬉しうございます』

岩彦 『ヤア貴様は龜と云つたな、狼か、骨身にこたへるなんて何だい、グツと一

口に呑まぬかい。バリバリと骨も身も一緒にパクつかれては此方もちつと都合が

悪いワイ』

この時間ときがりに、六個ろくこの光玉くわつきよくいづくともなく現あらはれ來きたり、たちまち五柱いつはしらの女神めがみと、一柱ひとはしらの鬼おにのやうな顔かほした男をとことが現あらはれた。岩公いはこうは驚おどろいてこの姿すがたを見守みまもりゐる。五人ごにんの女神めがみには一々いちいち名札なふだがついて居ゐる。見みれば鷹彦たかひこの本守護神ほんしゆごじん、梅彦うめひこ、音彦おとひこ、龜彦かめひこ、駒彦こまひこの本守護神ほんしゆごじんの名札なふだをぶら下さげて居ゐる。一方いつぱうの鬼おにの名なはと見みれば、こは抑そも如何いかに、一層いつそう廣ひろく長ながき名札なふだにグシヤグシヤと文字もじが現あらはれて居ゐる。よくよく見みれば、

「この鬼おには岩彦いはひこの副守護神ふくしゆごじんなり、本守護神ほんしゆごじんは岩彦いはひこの驕慢けうまん不遜ふそんにして慢心まんしん強つよき爲ために、未いまだ顯現けんげんする事能ことあたはず。一時いちじも早はやく改心かいしんの上うへ、かかると醜みにくき副守護神ふくしゆごじんに退却たいきやくを命めいずべし。野立彦命のたちひこのみことの命めいに依より、木花姫このはなひめこれを記しるす」  
と現あらはれて居ゐる。

岩彦いはひこ「ヤア大變たいへんだ。五人ごにんの宣傳使せんでんしは何なんだ。俄にはかに女見をんなみたやうな優やさしい事ことを云いひよると思おもつたら、何奴どいつも此奴こいつもアンナ綺麗きれいな本守護神ほんしゆごじんが現あらはれたからだな。しかしながら岩彦いはひこはどこまでも岩彦いはひこだ。アンナ女々めめしい本守護神ほんしゆごじんより、仁王にわうさん様の様やうな鬼面おにづらをした副守護神ふくしゆごじんに守護しゆごして貰もらふ方ほうが惡魔あくま征伐せいばつにはもつて來こいだ。未まだ未まだ

武装撤回は出来ない。ヤア副守護神、明日から九分九厘までお前が俺の肉體を守護するのだよ、一厘と云ふところになつてから本守護神の女神になればよいのだ。何だ五人の宣傳使奴、目的の半途にして最早一角の神業奉仕をしたやうに、泰然と澄まし切つて居よる。これからが肝腎要の正念場だぞ。エ、仕方がない、副守護神確り頼む」

鬼「俺は、お前の買ひ被つて居るやうな鬼ぢやない。鬼みそだよ。一つの火の玉にも雷にも膽を潰す柔しい鬼だ。姿はかう強さうに怖さうに見えても、肝腎の魂は味噌のやうなものだよ。アンアン、オイオイ、ウンウン、エンエン、インイン」

岩彦「何だ、不整頓な言靈の泣き聲を出しよつて、俺はソナ弱い守護神と違ふぞ。貴様大方偽神だらう」

鬼「それでも、お前の模型だから仕方がないわ。空威張りの上手な、膽玉の据わらぬ、見かけ倒しの「ガラクタ」鬼だよ」

岩彦「さう云へば、何處かの端が些と似とるやうな、矢張さうかいなア。ヤア本



當にこれから強くなる。貴様今日限り暇を遣はす程に、必ず必ず岩サンの肉體に踏み迷つて戻つて来るな。門火を焚いて送つてやるのが本當なれど、生憎焚物もなし、不本意だが今日限り歸つて仕舞へ」

鬼「ハイハイ、何しにマゴマゴとして居りませう。疾うの昔から歸り度くて歸り度くて仕方が無けれども、お前の執着心が私を今まで鐵の鎖で縛つて何うしても斯うしても解放してくれないのだ。左様ならこれでお暇を致しませう、アリヨウス」

岩彦「アア、これでこの岩公も何だか其邊が明かなくなつたやうな心持が致しました。モシモシ五人の宣傳使様、ご苦勞でございました。サアサアこれから貴方方のお伴して、タカオ山脈のコシの峠の麓を指して参りませう。イヤもう私の鬼を逐出す爲にいかいご苦勞をかけました」

一同「アハ、ハ、岩サンお目出度う、あれをご覽なさいませ、鬼の歸りた後に、あのやうな立派な守護神が顯現されました」

岩彦「ヤア、本當にこれはこれは、マア何と云ふ立派な、お岩彦の御御守護神様

だこと、マアマア、よくもよくも御守護下さいました。お有難うございます。私も天の岩戸守護神。岩サン分りましたか、ようマア鬼を去して下さいました。私も天の岩戸が開けたやうな心持が致します。サアサアこれから貴方と私と靈肉一致して膠の如く漆の如く密着不離の身魂となつて、岩戸開きの神業に参加させて頂きませう。岩彦「これはこれは恐れ入つたるご挨拶、本守護神様のご迷惑になる事ばかり、我を張り詰めて致して來ました。どうぞこれから比翼連理偕老同穴の夫婦のやうになつて、二世も三世も、後の世かけてご提携を願ひます」

ここに六人の本守護神と、六人の宣傳使は巖窟の廣場を指し、手を拍ち宣傳歌を高唱し、春の野の花に蝶の狂ふが如く、大地を踏み轟かし、

開いた開いた菜の花が開いた  
蓮の花が開いた

心の花も開いた  
身魂のもつれも開いた

開いた開いた  
常夜の闇となり果てし

天の岩戸もサラリと開いた

各自かくじの本守護神ほんしゆごじんはやがて、得えも云いはれぬ五色ごしきの玉たまとなつて各自かくじの頭上づじやうに留とまつた。玉たまは頭腦づなうに吸收きふしうさるる如ごとく、追々おひおひその容積ようせきを減げんじ、遂つひには宣傳使せんでんしの體内たいないに残のこらず浸しみ込んで仕舞しまつた。

これより一行いっかうはこの巖窟がんくつを立たち出いでて、原野げんやを渡わたり、コシの岬たうげを指さして勇いさましく進すすみ行く。

(大正一一・三・二一 舊二・二三 加藤明子録)

第五篇 膝栗毛ひざくりげ

第二二章 高加索詣コーカスマゐり〔五四八〕

四方の山邊は青々と、若芽の緑春姫の、袖振り榮えて紅の、花咲き匂ふ春の空、  
コーカス山に現れし、日の出別の活神を、慕うて絡繹と詣づる男女の眞中に、秀  
て黒き二人の大男は、宣傳歌の此處彼處、千切れ千切れに歌ひながら進み來り、  
路傍の草の上に腰打掛けて、雑談に耽るあり。

「オイ與太彦、どうだ、長らくの間、日月の光もなく、草木の色は枯葉の様にな  
つて春の氣分もトント無かつたが、日の出別の活神さまが、コーカス山に現はれ  
てより、金覆輪の日輪様は晃々と輝き玉ひ、草木は若芽を吹き、花は咲き小鳥は  
歌ひ、陽氣は良く、本當に地獄から極樂へ早替りをしたやうだなア」

「本當にさうだ、一時も早くコーカス山の御宮に參拜したいものだ。しかし是だ  
け大勢の老若男女が、珠數繋ぎになつて參拜するのだから、緩つくりと足を伸ば  
して休むことも出來やしない。マゴマゴして居れば踏み潰されて仕舞ふわ。ノー  
彌次公、今晚は何處で宿を取つたらよからうかなア」

「サア春と云つてもまだ夜分はよほど寒いから、まさか野宿する譯にも行かず、  
是から二里ばかり行くと、田子と云ふ小さい町があつて、そこには俺のところに長

らく奉公をして居つた、お竹と云ふ下女の家がある筈だから、今晚は其處までコンパスを延ばして、泊めて貰つたらどうだらう」

「ウーン、あのお竹ドンの家か、それは良からう。しかし泊めて呉るだらうか、これだけ大勢の人だから、お竹ドンの家も澤山の知り合の人があるだらうから、俺等が行く迄に満員になつて居るやうな事はあるまいかな」

「そこが主人と家來だ、いかに無情なお竹だつて、十年も飼うてやつた主人が頼む事を「まさか」厭とは云はれよまい。マアともかくもお竹の家を目當に行かうかい。ヤア澤山な參詣者だナア」

と云ひながら、兩人は草臥れた足をチガチガと運びはじめた。日は山の端に沒せむとする頃、やうやう田子の町に着いた。

「何でもこの町だ。酷う大きな家ぢやないさうなから、貴様は右側を調べて見る、俺は左側を調べて行く」

與太彦「何か屋號でもあるのか」

彌次彦「お前お竹の顔知つとるだらう、彼奴の顔を見當に行くのだよ」

與太彦「お竹だつて、さう日當りに看板の様に、朝から晩まで立ち續けにして居る筈は無いから、ソナ頼り無い標的を的に探しても不可ぢやないか。それよりもいつその事、軒毎にお竹ドンの家はここかここかと、兩側の家を尋ねて廻つたら一番的確だよ」

彌次彦「ウン、それがよからう。サア此處が田子の町だ。お前は右側だ、俺は左側だ……モシモシ、お竹ドンのお宅はこなたぢや御座いませぬか」

屋内より

「違ひます」

彌次彦「こなたはお竹ドンの館では御座いますまいか」

屋内より

「お竹の家ですが、お竹は十五年前に死にましたよ」

「ナニ、十年前に俺のところに奉公して居たのだ、十五年前に死んだとはお前サンチツト勘定違ひぢやないかなア。高取村の彌次彦の家に奉公して居つたお竹の事

だよ」

屋内より、

「私處の娘は奉公にやつた事は無い」

「ぢやお竹違ひだ、これはおタゲーに迷惑だ。エー仕方がない、初めからドンを突かれた。これだけ小さい町だと云つても、随分の家数だ、軒毎に尋ねて居ると乞食と間違へられて氣が利かぬ。天秤棒の星當りだ。二軒か三軒づつ間をあけて尋ねて見ようかい」

二人は町の兩側をあちらこちらとお竹の有り家を尋ねて進む行く。

小さき屑屋葺の軒下から、

「モシモシ、貴方は高取村の旦那様ぢや御座いませぬか」

「イヤーお前はお竹か。ナンとマア偉い婆アになつたなア。俺のところに居つた時は、ちよつと濫皮のむけた別嬪だつたが、十年経てば一昔、寄つたりな寄つたりな皺三十二になつたらう。皺三十二歳のお前の姿、これを思へば年は取りたくないものだ。しかしながら取りたいものが一つある」

「オホ、、、、、旦那様、取りたいと仰しやるのは何でございます」

「今晚宿が取りたいのだ。貴様の家に泊めて呉ないか」

「滅相な、旦那様のお泊りなさるやうな家ぢやございませぬ。ホントウに穢苦しうて、お恥かしう御座いますから、どうぞそれ許りは許して下さいませ」

「ソナナ何處か宿屋へ案内をして呉れないか」

「これだけ澤山なコーカス詣りに、何處の家も彼處の家も、ギツシリ鮮詰めと云ふ有様でございます。私とこの様な小さい家でも、何處の方が知りませぬが、軒下でもよいから泊めて呉れいと仰しやつて、身動きも出来ぬ程のお人でございませ」

「何處でもいいが空いた處は無いか。ハンモックでもあれば、天井裏でも構はぬ。雨露さへ凌げばいいのだから」

「ソナナ氣の利いたものが私とこの様な貧乏な家に有りますものか。明いた處と云へば煤だらけの柴屋がある丈です」

「イヤーその柴屋で結構だ。しかし随分熏ぼるだらうなア」

「下で御飯を焚いたりお茶を沸したり致しますから、随分天井は熏ぼりませう。」



旦那様、ソナ處でお泊りやしたら狸と間違へられますぜ。オホ、、、、、  
「イヤー狸でも狐でも構はぬ、一夜明かせば良いのだ。ヤア今晚の宿舎は是で解  
決がついた。オイ與太彦、此處だ此處だ、宿屋が極つた。ヤアー何處へ行きよつ  
た、狼狽者だなア。與太公の奴大勢の人に紛れて俺の談判が分らなかつたと見え  
るワイ。オイお竹、俺の連の與太彦を呼んで来て呉ないか」  
「この町は小さい町でございますから、いづれ向ふまで行つて家が無くなつたら、  
又こちら側を尋ねて歸つて來られませうから、マア澁茶でも飲んでゆつくり待つ  
て居て下さいナ」

「ヤア與太公どうだつた。これがお竹様のお館だ。今晚はここで御宿泊だ」  
與太彦「ヨ、ナントお粗末……ぢやない結構なお家だ。ヤアお竹サン、私の顔  
を知つてますか。十年の昔牛部屋から忍び込んだ時、コーンと臂鐵を食はせまし  
たなア、覚えてますか」

「オホ、、、、、人が聞いてますよ、ソナ見つともない事を仰しやいますな。  
マア裏で緩くりと一服して居つて下さい。柴屋を片付けましてお休み場所を拵へ

ますまで」

「アーお前の云ふ通り小さい家に似合ぬ澤山なお客様だなア。アーこれがお前の母親か、頭の光つたお爺様がござるな。ヤア結構々々、年がよつて達者なのは何よりだ」

「旦那様、どうぞ此方と裏に休んで居て下さいませ」

「ヨシヨシ。オイ與太彦、表は随分穢苦しい穢い家だが、裏へ廻ると立派な家があるぢやないか。マア、ここで緩くりと一服しようかい。ウーン床の間の飾りと云ひ、欄間と云ひ、書院の工合やら何から何まで、到底俺の處の座敷に比べて、幾層倍上等かも知れない。お竹の奴随分持つてけつかるのだらう。表を立派にするのと税金がかかるものだから、コンナ陋い見すばらしい家を建てよつて、裏には立派な亭座敷を建てて居よる、抜かりの無い奴だ。今の人間は表を飾つて裏へ這入れば皆我樂多計りだが、お竹の奴長らく俺の處で修行をしたお蔭で、表は陋く内心はこの通り立派にやつてけつかるのだらう、感心だ感心だ。コンナ結構な座敷になぜ給仕人を置いて置かぬのだらう。オイ手を叩いて御茶でも持て來いと命

ずるかなア、與太彦よたひこ」

「ホントウに感心かんしんだ、これだから人の出世しゅつせは分らぬと云ふのだよ。餘り人あまひとは零落おちぶれたと云ふて侮あなごるものぢやないぞ」

彌次彦やじひこはやたらに手を叩たたき、

「オーイ、お茶ちやだお茶ちやだ」

白髪はくはつの老人らうじんひとりわかををとこ伴ともなひ來り、ギロギロとした目めを剥むきながら、

「お前まへたちは何處どこの方かただい、俺わしの處ところの離はなれ座敷ざしきに斷ことわりもなく侵入しんにふして何なにをして居ゐるのだ。家宅侵入罪かたくしんにふざいで訴うったへようか」

「ヤアお爺様ぢいさん、能よく洒落しやれるなア。俺おれはお前まへん處ところの娘むすめのお竹たけの主人しゅじんだよ」

「私處わしところにお竹たけと云いふ者は居をらぬ。お竹たけの家うちはその前まへの小ちつぼけな家うちだぞ」

「ヤア、さうすると此處こゝの家うちはお竹たけの家うちぢやないのか、それなら何故垣なげかきをして置おかないのか、お竹たけが裏うらで休やすめと云いふから、氣きの利きいた座敷ざしきだと思おもつて一寸一服ちよつといつぶくして居をつたのだ」

「ハハ、お前まへたちは閒違まちがへて這入はいつたのだなア、仕方しかたがない早はやう出でて下ください。オ

イ長松、鹽を持つて来い。大切な座敷へ裏からノコノコと這入つて来よつて、こ  
こは神様のお座敷だ。俺さへ此處へ来るのには、水をかぶらな這入らぬ座敷をば、  
泥塗れの足で上りよつて怪しからぬ奴だ

「ヤアお爺様これは失敬、オイ與太公、長居は恐れだ。退却々々」  
お竹は、

「モシモシ旦那さま、何處へ行つてゐらつしやいました、最前から心配をして、  
そこらを尋ねて居りました。仕度が出来ましたから、どうぞ柴屋へ上つて下さい  
ませ」

「ヤア、それは有難い、案内して呉れ」

「サア、ここに梯子が掛けてございます、ここからトントンとお上り下さいませ。  
澤山柴が詰めてありますが、お二人様位はどうなつと休めませう」

「ア、仕方が無い。ヤア有り難う。與太公二階へ上つて休息しようかなア」  
とビヨビヨした危い蟲食ひだらけの梯子を恐々上つて行く。

「サア、マー是で一安心だ、煤だらけだな。しかしマア外で寝て居るより優かい。

能く熏ばる家だなア。クシャンクシャン。アー目が痛い」

「ともかく今晚の宿が定まりました。彌次彦さまにもお目痛うございます、ウ

フ、フ、フ」

「洒落どころか、アタけぶたいのに」

與太彦は柴を枕にコロリと横になる。彌次彦は下を眺めて、大勢の者の飯を焚

き茶を沸かし、右往左往する様をヂツと見下して居た。お竹の母親と見えて、澁

紙のやうな顔した頭の禿げた婆々は、眞つ黒けの垢だらけの手を出し、黒い杓子

で鍋から飯を左の手のひらに載せ、杓子を下におろし、右の手で漬をツンとかみ、

手の甲にて漬をこすり、飯をクネクネと握つて居る。一つ握つては笹の中へ放り

込み、一つ握つては笹の中に投げ込み、見る間に二十許り三角形の握り飯を固め

て了ひ、

「モシモシ二階のお客さま、そこに黒い綱があるだらう、綱の先に柴を吊り上げる

鉤が付いて居るから、それをスルスルと下して下さい、握りマンマをあげます」

「お婆様、是かなア」

と云ひながら鉤の付いた黒い綱をツルツルとおろした。婆々は箆を十文字に縛り、その中央に鉤を引かけ、  
「サアサアこれを上へ釣り上げて腹一ぱい上つて下さい。お茶は沸いたらまた知らすから鉤をおろして下され、土瓶を引かけてあげるから、又ツルツルと上へ上げるのだよ」

「オイ與太彦、握り飯だ。腹が減つただらう、シコタマ頂戴せぬか」

「有難いなア、天道は人を殺さず、辨當は人を助ける。今晚は宿屋がなくて飯も頂けまいと思つて居たのに、これはマゝ結構な事だ。オゝ澤山な握り飯だなア、偉う黒いのと白いのと有るぢやないか」

「ソラ極つた事だよ、初に握つた奴は黒いに極つて居るわ、白い奴から食うたらよからう」

與太彦、一つカブツて、

「ヤア彌次彦、鹽加減が良いぜ、お前も一つ食つたらどうだ」

「イヤ今日は餘り草臥て胸張れがして飯は厭だ。與太公ヨバレテ仕舞へ」

「ホントウにお前まへいいのか、それなら濟すまぬがお前まへの代理だいいりに二人前ににんまへ失敬しつげいしようかい。ヤア色いろは黒くろいが鹽加減しほかげんが良よいわ、ネンバリとして何なんとも云いへぬ味あぢだよ。この邊へんの米こめはよつぽど性たちがよいと見みえるナア」  
と云いひながら黒くろいのを二ふたつ殘のこし全部ぜんぶ平たひらげて仕舞しまつた。

「アハ、ハ、ハ、味あじかつたか、鹽加減しほかげんが良よかつただらう。その筈はずだ、俺おれがかうして下したを覗のぞいて居をると、澁紙しぶかみの様やうな、頭あたまの禿はげた、穢きたない婆々ばばあが眞まつ黒くろな手てを出だして、鍋なべの中なかへグサツと手てを突つき込こんではグツと握にぎり、洩みづばなを垂たらしては手洩てばなをかみ、握にぎり固かためたのだもの、鹽加減しほかげんのよいのは婆々ばばあの洩汁はなしるが混まぢつて居ゐるからだよ。ア

ハ、ハ、ハ、

「ペツペツ、エー氣分きぶんの悪わるい、何なんだかムカツイテ來きた。オイ彌次彦やじひこ、茶ちやでも請求せいきうして呉くれないか、一いつぺん腹はらの洗濯せんたくでもせないと、喉のどが二チヤクチャして氣分きぶんが悪わるい」

「オーさうだらう。モシモシお婆サばあン、鉤かぎを下おろすからお茶ちやを下くださいなア」  
「その綱つなを確しつかりと持もつて居ゐなされや、途とちう中で放はなして貰もらうと、下したに居ゐる婆々ばばあが

煮え茶を被るから」

土瓶に眞つ黒の茶を一ぱいもつて鉤にかけた。彌次彦はツルツルと引上げた。

「サア與太彦、ナンボなと飲んだり飲んだり」

「飲まいでかい、腹の洗濯だもの」

と云ひながら土瓶に一ぱいの茶をコロリと空けて仕舞つた。

「オイオイ、お前ばかり飲んで居つて俺にも一杯飲まさぬかい」

「もう仕舞だ、マア一杯請求して呉れないか」

「能う茶を食らふ親仁だなア。モシモシお婆サン、もう一杯お茶を下さらぬか」

下には禿頭の爺と婆、その他お竹の兄弟五六人、澤山のお客様に握り飯を一生懸命に拵へて居る。

彌次彦は鉤に土瓶を引っかけ、ツルツルと下した途端に、禿頭の爺の額口にコツンと當つた。彌次彦は吃驚して土瓶の綱を俄に手繰り上げる。

「ヤア怪體な事が有るものぢや、土瓶の奴俺の頭を蹴りよつて逸早く天上して仕舞つた。化物だらうかなア」



「爺さまの薬罐頭を土瓶が蹴るのは當り前だよ。たとへ土瓶が天上位したつて何  
も不思議ぢやない。今朝も婆々が見て居れば門前を葱の淨瑠璃語りや、大根の役  
者が通つた。土瓶の天上位は別に不思議な事は無いわいなア」

「又もや土瓶は柴屋からツルツルと下りて來た。」

お竹「ヤア旦那様が大變喉を乾かして御座ると見える、充分入れて上げて下され  
な」

婆は、

「ヨシヨシ」

と云ひながら飯のついた手で杓を握り、土瓶に酌み再び鉤に掛けた。土瓶は忽ち  
天井に姿を隠した。

（大正一一・三・二一 舊二・二三 岩田久太郎録）

## 第二三章

### 和解（五四九）

彌次彦、與太彦の二人は、また大土瓶の茶をガブガブと残らず飲んでしまった。  
「エー氣分の悪い、澤山の茶を飲んで洗濯をした積りだが、何だかまだ口が粘つくやうだ。洗濯をしても矢張腹の中に洩もあれば鼻汁も雑居して居るのだから、氣持ちがあまり冴えぬワイ。お前も殺生な奴だ、洩が斯う斯うだと前に言うて呉ればよいものを、腹が悪いなア」

「俺は腹がへつて悪いが、貴様は鱈腹喰つて、もつたいない理窟を言ふとは、よほど腹の悪い奴だ。ア、餘り澤山飲んだので小便が仕度くなつた。梯子も何も取つて仕舞つて降る事が出来やしない。此處でやれば下へ漏るし、張り切れる様になつて來たワ、どう爲ようか知らぬて」

與太彦「都合の悪いものがある、この土瓶の中にやつたらどうだ、下に漏る氣遣ひはないぞ」

と云ひながら、かはるがはる泡立た茶色の小便を夜の明けするまでに半分ばかり溜めた。二人は旅の疲れでグツスリと寝込んでしまった。ソロソロ聞ゆる鶏の聲、小鳥の聲、

彌次彦「ヤー春の夜は短いものだ、此處へこけたと思へば早鷄の聲だ、折角煙が無くなつたと思へば又そろそろ焚き出しよつて熏るワイ。ア、煙たい煙たい」

婆々は下より、

「二階のお客さま、土瓶を降ろして下さらぬか」

「ヨシヨシ」

と彌次彦は土瓶を鉤に引つ掛けツルツルと釣り降ろした。暫くすると、婆々が、

「お客さま握り飯だ、鉤を降したり」

彌次彦はツルツルと鉤を降す。婆々はまたもや十文字に縛つた箆に握り飯を盛

つて引かける。

「オイ與太公、今日は大丈夫だ、どつさりと頂いて見ようかい」

「イヤモウ閉口だ、夜の短いのに二人前も頂いて、おまけに土瓶の茶を澤山飲ん

だものだから、臨月の嬢アの腹のやうに筋張つてポンポンだ。お前、遠慮せずに

頂いて終へ」

「俺も何となく腹がすかぬ、マア止めて置かうかい」

「お腹がすいても空腹うないと云ふが、空腹いときのまずいものなし、ひだるいときの汚いものなしぢや、一つ奮發して五つ六つ平げたらどうだい彌次彦」

「ヤアどう思つても胸膨れがして食ふ氣にならぬワイ。それよりも茶なと貰つて腹を膨らさうぢやないか。モシモシ婆サン、どつさりお茶を下さらぬか」

「婆々は下から、

「高取村の旦那さま、お茶が都合よく沸きました、あまり熱くもなし、ぬるくもなし、飲み頃ですぜ。サア鉤を降して下さい」

「鉤は最前から降して待つて居るのだ」

「ア、ホン二降りてをつたなア、年が寄ると目脂、鼻汁、いやもう【じじむさい】ものだ」

「と言ひながら、手鼻をかんでその手で土瓶の蔓を持ち鉤に引掛けた。彌次彦は手早く手繰上げて、

「また婆々の手鼻をかんだ手で茶を汲んで呉れたが、茶の中には【まさか】鼻汁は這入つてゐまい。マア緩くりと茶腹でも膨らかさうかい」

と言ひながら互ひに引つたくり、争ひつつ七八分まで飲んで仕舞つたが、何とな  
く妙な臭が鼻にプンプンとする。

「オイこの茶は怪體な臭がするぢやないか、何だか鹽辛い味の、よい鹽加減の茶  
だと思つて飲んだが、この臭が何だか氣に喰はぬぢやないか、のう與太彦  
と云ひながら下を覗いて、

「コレコレお婆さま、この茶は腐つとらせぬかいなア。妙な臭がするぞ」

「なに腐つて居るものかい、昨夜沸した所だ、現にお前さまが昨夜飲んだ残りの  
上に茶を補して沸かして上げたのだ。腐つて居る氣遣ひは無いわいなア」

「ヤー此奴は堪らぬ、どうしようか、オイ與太公」

「仕方がないなア。己に出づるものは己に歸るぢや。他人の小便ぢやあるまいし、  
自分の小便を自分が飲んだのだ、疝氣の藥ぢやと思へば、マア辛抱するのだなア。  
あんまり常平生から、バリバリバリ付くものだから、因劫が報い來つて自業自得  
で、狼の様にバリを飲まれたのだ。ペツペツペツ」

「ガア、ガラガラガラと咽に指を突き込んで吐き出す、柴屋の簀子を洩れて反吐

水は下を通り爺の禿頭にダラダラと流れ落ちた。

「チエツ、鼠の奴、頭から小便をかけよつて、ヤー小便計りぢやないぞ、飯粒が交つて居る。ヤアこれは大方二階のお客だらう、怪しからぬ奴ぢや。娘の世話になつた旦那、主人だと思ふから二階に泊めてやれば頭から反吐を引かけるなんて不人情きはまる。ヨシ先方がさうなら此方も了見がある。コレお竹、梯子を差す事はならぬぞ、何時までも天井へ祭り込んで焚物になるとこまで熏べてやるのだ。本當に人を馬鹿にして居る。コラ二階の兵六玉、どうするのだ」

「モシモシ爺さま、私ぢやない、あれは鼠ぢや。鼠の悪戯迄吾々に轉嫁させられては彌次彦も困るよ」

「馬鹿言ふない、鼠が反吐をつくかい、田舎者だと思つて餘り馬鹿にするな」  
彌次彦「コラコラお竹、梯子を差さぬかい」

「ハイいま差しします、チヨット待つて下さい。小用して来るから」

與太彦「用事を済ましてから差し上げてますとは、洒落てけつかるワイ」

爺「コラお竹、親の許しもなしに梯子をかけると云ふ事があるか」

「それでも、可愛がつて下さつた旦那さまぢやもの、親が何と云つても私は差し上げて上げます。サアサア早くこれに乗つて降りて来て下さい」

「乗れと言つたつて、コンナヒヨロヒヨロの梯の子にどうして乗れるのだ。危なくつて仕方がない」

「乗るのがいやなら、兩方の親柱をグツと抱いて大股に跨げて降りて下さい。二人一緒に跨げると梯子が折れます。マア、旦那さまから先い」

「旦那さまから先いなんて馬鹿にしてやがる。エー仕方がない。鎌の柄を向ふに握られて、切れる方を此方が持つて居るやうなものだから、この柴屋から無事に着陸する迄は、猫を被つて大人しうして居るか、この與太ヤンも」

二人は漸う降りて来た。彌次彦は面を脹らして、

「コラ婆々、人に小便を飲ましてよつて馬鹿にするない」

「この人は何を言ふのだい、誰が小便を飲ました。お前さまが勝手にこいて飲んだのぢやないか。あんまり勿體無い事をなさるから、懲しめの爲に小便だとは知つて居つたけれど、態とに其儘にして置いたのだよ。ソナ道樂な心で、コー

カス詣りをしたつて神様は、彼方向いて御座るわ。本當に自墮落な兵六玉だナア。奉公人の一人も使ふ人だから、チツトは行儀ぐらゐ知つた方だと思つて居たのに、あまりの仕打で愛想が盡きた。私は斯う貧乏して居つても、綺麗な物と汚い物ぐらゐは辨へて居る。アタ勿體ない、先祖讓りの履歴のついた、大事なお土瓶に小便をこかれて、どうしてこれが使へるものか。サア舊の通りにして下され、婆々が承知しませぬぞや」

「土瓶の一つくらゐ何だ、それほど惜しけりや買つて返してやるわ。何だ大層らしい。三錢や五錢の土瓶を」

「この土瓶は三錢や五錢ぢや買へませぬ、百兩から致しますよ」

「金の土瓶でも百兩出せばあるのに、何ぢやコンナ眞つ黒氣な蛸土瓶をあまり懸け値を言ふな。足許を付け込みよつて年寄の癖に欲の皮の深い奴だ。棺桶に片足突込んで居つて欲張つて何になる、お熊婆奴が」

「この土瓶は成るほど買つた時は三錢だつたさうだが、曾祖父の代から家寶となつて今まで持つて來た物だ。三錢の金に利に利を盛つて百五十年の間勘定して見



なさい、百兩なら安いものだよ」

「何と勘定の高い婆アだなア、こいつア、ウラル教だよ與太公」

「ウラルもウランもあるものか、百兩だつて千兩だつて、家の寶を賣つて堪るものか」

彌次彦「蛸なら足もつくだらうが、此奴は足の無い胴瓶ばかりだから、素より利足の付く筈がないわ」

與太彦「形あるものは必ず滅び、逢ふものは離れると云ふのは世の中の習ひだ。

諦めて置くが好からう、後生の爲だよ」

爺「何んだ、聞いて居れば親重代の土瓶を穢はしい小便を垂れよつたのか、モウ了見ならぬ、俺のこの寶を臺なしにしよつたナ」

彌次彦「エー小さい事を吐かすない、土瓶に小便を入れたのがそれほど腹が立つのなら、吾々の胴腹に小便を入れよつた貴様こそ了見ならぬ奴だ。胴瓶の土瓶い

ぢりの藥罐老爺、土瓶も藥罐も一緒にポカンと遺つてやらうか」

爺「人の家に厄介になつて置きながら、何と云ふ劫託をこきよるのだ。コラ、年

は寄つてもこれでも「ヤンチャ」の虎サンと綽名を取つた此方だぞ  
と云ひながら握り拳を固めてポカンとやつた。

與太彦は、

「この耄碌老爺、何をしやがる」

と又もや鐵拳を固めて藥罐頭をポカンとやる。老爺は甲聲を出して怒る、お竹は泣く、婆はわめく、彌次はカンカンになつて暴れ廻る。表を通る數多の參詣者は「ヤア喧嘩だ喧嘩だ」と面白がり黒山の如く集まつて来る。

甲「コラ一體何の喧嘩だ」

乙「土瓶と藥罐の喧嘩ださうな」

ワイワイと野次馬連が騒いで居る、斯かる所へ烏帽子、狩衣、嚴めしく馬上ゆたかに進み来る宣傳使の一行ありき。宣傳使は馬を止め、ツカツカと群集を別けてこの家に飛び込み、

「ア、お前サンは彌次彦サン與太彦サンぢやないか」

「ホー、貴様は醜の巖窟でお目に懸つた宣傳使様、エライ所でお目にかかりまし

た

宣傳使六人は聲を揃へて手を拍ちながら、

神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

この世を造りし神直日 心も廣き大直日

唯何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは詔直せ

と歌ひ初めたる。この聲に連れて彌次彦、與太彦を初め、老爺も婆々もお竹も、

今までの争ひをケロリと忘れ、共に手を拍ち踊り狂ふ。

音彦「ア、世直し世直し、サーサ皆さまコーカス山へ参りませう」

一同「有難う」

(大正一一・三・二一 舊二・二三 谷村眞友録)

第二四章 大活躍（五五〇）

茲に六人の宣傳使は、田子の町に於けるお竹の宿の騒動を鎮定し、彌次彦、與太彦は宣傳使に扈從して、コーカス山に向ふ事となつた。六人は馬上に跨り、二人は徒歩のままテクテクとフサの都を指して進み行く。タカオ山脈に連続せる猿山峠の麓に着いた。

永き春日も早暮れ果てて、四邊は靄に包まれた。一行八人はとある林の中に蓑を敷き寝に就いた。何れも長途の旅に疲れ果て、前後も知らず寝入るのであつた。夜中に彌次彦は目を覺まし、あたりを見れば、朧の月は頭上に木の間を透して輝いて居る。六人の宣傳使のうち五人の姿は、何時の間にか消え失せて、附近に人の氣配もない。

彌次彦「モシモシ宣傳使様、起きて下さい、人が紛失いたしました」

音彦「ナニ、人間が紛失した？、ソナ事があるものか、お前夢でも見たのだらう」

彌次彦「イヤ決して決して決して夢ではありませぬ、マア目を開けてご覧なさい、馬も居りませぬ、宣傳使のお姿も何處かへ、蒙塵されたやうな鹽梅ですワ」

音彦は目を擦りながら、附近を見まはし、

音彦「ヤアこれは殺生だ、到頭棄てられて了つた。エー仕方がない、何事も神直日大直日に見直し聞直しだ。吾々を鞭撻しようと思つて、鷹彦の宣傳使が、熟睡の際を狙つて發足されたのだらう。夫れにしてもご苦勞な事だ、自分は斯うして夜中の夢を見て居るのに、五人の宣傳使は、夜露を冒して夜中行軍、大抵の事であるまい。音彦は大變草臥れて居るから、マアゆつくりと休ましてやらうと言つて、一足先へお出でになつたのだらう。何れフサの都の手前で待つて居て下さるであらう」

彌次彦「モシモシ宣傳使様、ソナ氣樂な事を言つてる所ぢやありませんか、あなたの馬も居ないぢやありませんか、この邊には大變な大きい大蛇が、夜分に横行しますから、宣傳使も馬も一緒に呑んで了つて腹を膨らし、呑み満足をしよつて、吾々を呑残しにしたのかも分りませんよ」

音彦「マア心配なさるな、神の道を傳ふる宣傳使、神様のご守護遊ばすから、大蛇がどうして呑む事が出来よう。キット先へ行つて、吾々の來るのを待つて居て下さるだらうから」

彌次彦「オイ與太、起きぬか、ナンド、大變事が勃發して居るのに、グウグウと寢て居る所か、サアサアこれから手配りをして、宣傳使の在處を探さねばならぬぞ」

與太彦「ムニヤムニヤムニヤ、アーねむた、折角良い夢を見て居つたのに、起きて惜しい事をした、掌中の玉を奪はれたやうな氣がするワイ」

彌次彦「惜しい夢つて、ドンナ夢だい、金でも拾つた夢を見たのだらう」

與太彦「どうしてどうして、ソンナ夢ぢやない、三日間は人に言ふなと云ふ事だ、夢を取られると困るから、ここ三日間は夢に對して無言の行だ」

彌次彦「大體が夢ぢやないか、たとへ實現するにした所で、お前と俺との仲だ、一つの物を二つに割つて食ひ合ふやうな、昵懇な仲で、夢を惜んで話さないといふ事があるか。お前の物は俺の物、俺の物はやつぱり俺の物だ」

與太彦「アハ、ハ、それだから言はれぬのだ、取込思案ばかりしよつて、抜目のない男だから」

彌次彦「貴様はよつぽど水臭い男だよ、綺麗さつぱりと白状してしま。大方隣の嬢を何々する所で揺すり起されたのだらう、それだから俺に言はれないのだらう。百尺竿頭一步を進めて露骨に云へば、俺の嬢にしようと思つた所を起されたのだらう」

與太彦「何を言ふのだ、あまり馬鹿にするない、腹が立つわ。これほど昵懇にして居るのに、俺の日頃の精神が、貴様は分らぬのか。エー残念な、腹立たしや、ソナ事を言うと俺が死んだら化けて出てやるぞ」

彌次彦「腹が立つなら言はぬかい。俺と貴様の間柄ぢや、二人の仲に隔てや秘密があつては親友と云ふ事が出来ぬぢやないか、ナアもし宣傳使様、さうでせう、朋友といふものは互に相信じ、相助けるのが朋友の道でせう」

音彦「さやうぢや、互に打解けた間柄と云ふ者は氣分の良いものですなア。與太サン、元來が夢だ、さう彌次サンの氣を揉まさずに言つて上げなさい」

與太彦「アー仕方がない、宣傳使様のお言葉、首が千切れても、三日間は女房に  
だつて言はないのが夢の規則だけれど、天則を破つて一伍一什を展開いたしませ  
う。……抑も夢の顛末といへば、古今に比類を絶したる大大吉祥瑞の大靈夢だ。  
一富士二鷹三茄子つて夢の中でも王さまだ。與太公が、何處だつたか、處は忘れ  
たが、道を歩いて居ると立派な葬禮が通りました。葬禮の夢は何も彼も落着する  
と言つて、事が墓行に運ぶと云ふ事、それから芽出度い鷹の夢だ、ヤア立派な葬  
禮だなと見て居ると云うと、そこへパツパツと、飛行機の様によつて來た結  
構なお方があるのだ。それは鷹が三匹與太公の前に下りて、與太公の顔を見ては  
一寸俯き、また上げては俯き、一生懸命にア、與太さまは立派な男だナアと言は  
ぬ許りの顔をして見惚れて居ました。私も何だか氣分が良いので、ジツとして鷹  
と睨みつくらしをして居ると、どこからともなく一本の穂に五六升も實がなつた様  
な黍がそこへバサと落ちて來た、一粒萬倍と云つて數の殖える黍の夢だから、あ  
の通り寶が殖えるのであらう。本當に氣分の良い夢だらう、ナア彌次彦、コンナ  
夢は聖人君子でなければ、到底見る事は出來ないよ」



彌次彦やじひこ「そら大變たいへんだ、貴様きさま氣きを付つけないといかぬぞ」

與太彦よたひこ「大變たいへんだらう、本當ほんたうに氣きを付つけぬと、結構けつこうな夢ゆめの實現じつげんを、他人たにんに横領わうりやうされ

ては、糠喜ぬかよろこびになるからナ」

彌次彦やじひこ「まだソソナ事ことを言いつて居ゐよる、葬禮さうれんに鷹たか三匹さんびき、黍きびといふぢやないか、そ

の夢ゆめは大凶兆だいきよつてうだ、災難さいなんの前提ぜんていだ、猯ばくに喰くはせ猯ばくに喰くはせ」

與太彦よたひこ「コンナ結構けつこうな夢ゆめを猯ばくに喰くはしてたまらうか、俺おれが食くうのだ」

彌次彦やじひこ「本當ほんたうに大惡夢だいあくむだよ、そうれ、三鷹みたか、よい黍きびだ、アハ、ハ、」

與太彦よたひこ「エー言靈ことたまの惡わるい、詔のり直なほせ詔のり直なほせ」

音彦おとひこ「ヤア、良よいと言いへば良よい夢ゆめだ、惡わるいと言いへば惡わるい夢ゆめだ。良よい夢ゆめを見みたと言い

つて、油斷ゆだんをすれば、吉變きちへんじて凶きようとなり、惡わるい夢ゆめを見みても、心得こころえやうに依よつては、

凶變きようへんじて吉きちとなるものだ。マアマア油斷ゆだん大敵たいてき、得意とくいの時ときには得えてして禍わざはひの種たねを蒔ま

くものだ。災厄わざはひに惱なやむ時ときこそ却かへつて喜悅よろこびの種たねを蒔まく時ときだ。善惡ぜんあく不二ふじ、吉凶きちきよう同根どうこんだ、

ヤア各自めんめに氣きを付つけねばなりませぬワイ」

斯かかる所ところへ人馬じんばの物音ものおとザワザワと、數十人すうじふにんの黒い影かげ、三人さんにんの前まへに迫せまり來きたる。

「ヤアそこに臥せり居る三人の者は三五教の宣傳使の一行であらう、我こそはウラル教の大目付役、鷹掴の源五郎だ。此處へ來せたは汝が運の盡、サア尋常に手を廻せ」

彌次彦「それ見たか與太彦、貴様の精神が悪いから、碌でもない夢を見よつて、瞬く間に實現して來たぢやないか、コンナ夢ならモウ分配して不用ぬワイ」  
與太彦「エー夢どころの話かい、大變だ。モシモシ宣傳使様、コラ一體全體どうなるのでせう」

音彦「アハ、ハ、ハ、夢の浮世だ、ウラル教の大目付役もやつぱり人間だ、一つ善言美詞の言靈を以て言向和しませう、……高天原に神留ります……」

源五郎「ヤアまがふ方なき三五教の宣傳使、ヤアヤア家來の者共、抜かるな、一度に飛びかかつて、取つ締めて了へ」

彌次彦「エー仕方がない、血路を開いて一目散に韋駄天走りだ、與太公續けつ」と言ひながら、群がる群集の中に向つて、鐵拳を打振りながら、一目散に驅出した。猛虎の如き凄じき勢に、ウラル教の捕手は、パツと左右に分れた。二人は一

生懸命に驅け出す。音彦はその後に悠々として、宣傳歌を歌ひながら進み行く。  
源五郎「ヤアヤア部下の奴共、何と云ふ腰拔だ、向うは僅に三人、五十人も居ながら、取り逃すとは不届きな奴だ、どうしてウラル彦の神様に申譯をするのだ、愚圖々々いたさず、俺に續いてやつて来い、今度は生命を的に進撃するのだ」  
「ヤア御大將、責任はあなたにありますで、あなたの策戦計畫が宜しきを得ないから、折角の敵を取逃がしたのだ。吾々はその日限りの傭人足だけの事より出来ませぬワイ。お前さまは、澤山な手當を貰つて御座るのだ、吾々の五十人振もお手當を貰つて居りながら、あた強欲な、みな頭の頭を張つて、榮耀榮華に暮して居るものだから、たーれも眞劍に、阿呆らしくて生命がけの仕事が出来来るものか、丈は丈、丈の働きだ。お前さまも丈の働きをしなさい。……オイ皆の奴、馬鹿氣とるぢやないか、アンナ奴を追ひかけてでも行かうものなら、それこそ俺ばかりの難儀ぢやない、一家親類兄弟は申すに及ばず、女房子供までが、どれだけ嘆く事だらう。阿呆らしい、目腐れ金を貰つて、この日の永いのに、朝から晩まで酷使はれて、おまけに夜業まで強制されて堪るものか。ノー皆の奴……」

乙「オーさうださうだ、なにほど大將が威張つた所で、石龜の地團駄だ、おつつかないワ、……モシモシ源五郎の親方、是から往けなら往きますが、ヤツパリ

丈は丈ぢや、丈出して下さらぬか」  
源五郎「現金な奴だナア、早く往つて手柄を致せ、滅多に使ひボカシは致さぬぞ。

ソナ勘定は後にして、危急存亡の場合だ、早く進まぬかし

丙「ヤア前賃を貰はなくちや、働く勢がないワイ、モシモシ大將、幾許出します

か」

源五郎「エー煩雜い奴だな、愚圖々々して居ると、遠く逃去つて了うワイ」

丙「走るのが幾ら、掴まへるのが幾らですか、少々高くつても、つかまへるのは

お断りしたいものですな」

源五郎「走つたつて、ナニ役に立つか、捕まへるのが目的だ」

丙「私も捕まへるのが目的だ、早く捕まへさしなさい。ドツサリと……何時も

大將は、また後から後からと月竝式に仰有るけれど、後はケロリと瘡が落ちた様な顔して何度催促しても齒切れのせぬ御返辭、又ラリクラーリと鰻でも掴むやうに、

掴まへ所のないお方ぢや、私も確乎と掴まへた上でなければ、捕まへる事はマア措きませうかい。この睡たいのに、生命懸の仕事をしたつて、お前さまが澤山な褒美を貰つて、吾々は骨折損の草疲儲け、罷り違へば一つよりない生命を棒に振らねばならぬのだからナア」

源五郎「エー分らぬ奴ぢや、急場の間に合はないぞ、早く進まぬか、宣傳使が逃げたから、何ほど走つたつて仕方がないぞ」

甲「こちらが一足走れば向うも一足走る、どこまで往つたつてお月さまを追かけて行くやうなものだ。マアそれほど大將、急ぐには及びませぬワイ、「急がずば濡れざらましを旅人の、あとより霽る野路の夕立」……やがて雨も霽れませう、あまり慌てるものぢやない、急いで事は仕損ずる、急かねば事が間に合はぬ、アア彼方立てれば此方が立たぬ、此方立てれば彼方が立たぬ、兩方立てれば身が立たぬ、何だか知らぬが、氣乗りがせぬので、一向心が引立たぬ」

乙「モウ今頃には、大分に敵は遠く往つたであらう」

丙「ナー二、さう遠くは行つては居まい、「君はまだ遠くは行かじ吾袖の、袂の

涙かわき果てねば「まだ走つて来た汗も碌に乾く暇が無いのだから、さう五里も十里も行つて居る氣遣はないワ、併しこれ丈距離があれば、何ほど走つても追付く氣遣がないから大丈夫だよ」

源五郎「エー頭が廻らな尾がまはらぬ……コラ馬の奴、頭をこちらへ向けぬかい、尾も一緒に廻すのだぞ……ハイハイ……カツカツ……ヤア皆の奴、源五に續け」

甲「ヘン偉相に大將面をしよつて、源五に續け……何を吐しよるのだ、表向こそ貴様の乗つて居る瘦馬の馬士ぢやないが、へーへー、ハイハイ言つて居れば、よい氣になりよつて、源五の野郎、言語に絶する様な横柄な言葉を使つて居やがらア。吾々は素より三代相恩の主でもなければ、身内でもない、露骨に言へばアカの他人だ。エー仕方がない、伴いて行つたるか、是もやつぱり錢儲けだから……」

乙「馬から落ちて腰でも折りよると良いのだけれどナ、彼奴が免職したら、その後釜は此方さまだ、とも角頭がつかへて、吾々の榮達の路を封鎖して居るものだ」

から、良い加減に交迭しても宜かり相なものだ……オイオイ皆の奴、仕方がない  
進め進め」

源五郎は馬上より、後振り返り、

「ヤア皆の奴、何をグズグズして居るのか、足の弱い奴だな早く續かぬか」

丙「お前は四つ足、こちらは二本足だ、どう勘定しても半分より歩けないのは道理だ、こちらは一足そちらは二足だ、二足三文の腰抜大將、良い加減にスツテン

コロリと引つくりかへつて落ちて了はぬかいナア」

源五郎は烈火の如く憤り、馬の頭を立直し大勢の中に引つ返し來り大音聲、

「ヤア貴様達は、今日に限つて主人の吾々に對して無禮千萬な暴言を吐く奴、今日

ただ今より暇を遣はずから、さう心得よ」

「ヤアご立腹御尤も、何時もコンナ事は、言つた事も思つた事もございませぬが

今日に限つて何だか、腹の中から勝手にアンナ事を喋舌りよるのです。決して決

して八や、六や、七の言うた事ぢやございませぬ、腹の中の副守護神の囁きです

から、悪からず、神直日大直日に見直し聞直し、馬から落ちたら、また瘦馬にな

つと乗り直し下さいませ……」

「ハテ合點の行かぬ事だ、貴様は三五教のやうな事を云ふ奴だナ」

甲「三五教の眷屬が、吾々の口を藉つてご託宣遊ばすのだ……コリヤコリヤ源五郎、その方は今日より免職を言ひ渡す、その馬に八チヤンを乗せて、その方は馬の口取を致せ」

「ハテ、けつたいな事になつて來たワイ、何奴も此奴も、兩手を組んで身體を揺つて居よる……ハハア此奴あ、神懸りになりよつたな。こりや堪らぬ、如何な珍事が突發するやも計り難し、君子は危きに近寄らず、敵の中にも味方あり、味方の中に大敵ありだ」

と無性矢鱈に馬に鞭ち、一生懸命に驅出した。馬は何に驚いたか、俄に前足を浮かして直立し、勢あまつて仰向にドサンと轉倒した。源五郎は馬の背に押へられ、蛙をぶつつけた様に手足をビリビリと震はし、二聲三聲ウンウンと言つたぎり緯切れにけり。

八公「ヤアまるで蛙見たいなものだ、フン延びて居るワ、再び生蛙と云ふ氣遣ひ



はないワ、アーア人間も斯うなると脆いものだナ、萬物の靈長だナンテ威張散らして居つても、四つ足の背中に押へられて、ウンと一聲この世の別れ、厭な冥途へ死出の旅、憐れなりける次第なりだ。……ヤア馬が空いた、サア是から俺が大將だ、皆の奴、この八大將に續いて來れ」

六公「續いて行かぬ事もないがやつぱり丈は丈ぢや」

八公「また神懸りになりよつたな、エー仕方がない、人を使へば苦を使ふ、自分ひとりこれから走つて、あの宣傳使を捕まへねばなるまい」

と馬を乗り棄て、裸足の儘、尻ひとつからげて、峠を目がけて驅出したり。

話變つて音彦は彌次彦、與太彦と共に、爪先上りの坂路を避けて、右手に取り、原野の正中を韋駄天走りにトントンと、マラソン競争をやつて居た。ピタリと大河に行詰まつた。兩岸は斷巖絶壁に圍まれ、河幅の割には非常に深く、且急流にして、水音が轟々と轟いて居る。

音彦「ア、此奴は大變だ、どこぞ橋がありさうなものだナア」

とキヨロキヨロと河の上流下流を眺めて見た。二三丁下手に當つて丸木橋が見え

る。

音彦「ヨー彼處に橋が架つて居るぞ」

と又もや三人はトントントンと走り出した。橋詰に來て見れば、一抱へもあらうと思ふ丸木橋が架々つて居る。三人は勢ひを立てて一散走りに無難に向ふ岸に渡り、敵の追跡を遮斷するため、丸木橋を落して了つた。さうする間に、

「オーイオーイ」

と八公の一隊は遙の後方より呼んで居る。

彌次彦「アハ、モウ大丈夫だ、この橋さへ落しておけば、追つ付く氣遣ひは

ない。マアゆつくりと、宣傳使様一服致しませうか」

音彦「宜からう、お前たちも足が草臥れただらう、三人此處でゆつくりと休息して、敵の襲來するのを見物しようかい」

「コリヤ面白い」

と三人は腰を芝草の上に、ドカリと下ろし、大船に乗つた様な心持になつて、身を横たへて居る。傍の雑草の茂みより、覆面した四五人の男又ツト現はれ、

「サア貴様は三五教の宣傳使、吾等が計略の罠にかかったのは、汝等が運の盡き、サア尋常に手を廻せ」

彌次彦「宣傳使様、神言を言つて下さいな」

音彦「コンナ四足人間に神言を言つた所で、盲蛇に怖ぢずだ、勿體ないことを知らぬ奴に何を言つたつて駄目だ、三十六計の奥の手だ」

と云ひ乍ら又もヤトントントンと驅出した。黒頭巾の大男は、一丁許り遅れて追跡して来る。ピタツと行當つた一棟の可なり大きな館がある、三人は矢庭に門を潜つて、中よりピシヤリと戸を閉め錠をおろし、奥へ進んで行く。見れば、かなり大きな土間があつて、七八人の荒男手に手に血の滴る出刃を携へ、何だか料理をして居る。

男「ヤアいい所へ椋鳥が飛んで來よつた、サア三人足らぬと思つて居た所、有難いものだ、都合の宜い時はコンナもの、ドーレ早速料理をやらうかい」

その中の一人の男、一方の板戸に目を注ぎ、三人に向つて目配せした。音彦は合點だと板戸を押せば、苦もなくプリンと開いた。三人は矢庭に戸の内に驅込ん

だ。さうして中より鍵をかけて追跡を防ぎつつ、四邊を見れば、廣き大道が通じて居る。

音彦「ヤア有難い、敵の中にも味方があるとはこの事だ、彌次サン、與太サン、私に續いてお出」

と一生懸命に驅出し、四五丁進めば、道の兩側には、泥深き沼田が竝んで居る。

「ヤア此奴は一筋道だ、進め進め」

と七八丁も先に進んだ。彌次彦、與太彦はどうした機か沼田の中に落ち込み、着物も何にも泥まぶれになり、重たくて身動きが出来ぬ、已むを得ず二人は眞裸となる。向ふの方より色の黒い背の高い、顔の尖つた男一人現はれ來り、三人の姿をジロジロと見まはして居る。

音彦「ヤアお前はウラル教の目付だらう、邪魔ひろぐと爲にはならぬぞ」

男は厭らしき笑顔し乍ら、

「モウ斯うなつては駄目だよ、観念したがよからう」

後を振り返り見れば數十人の捕手、突棒、叉股、手鎗を提げ、一筋道を追ひかけ

来る。この間の距離わづかに四五丁許りである。音彦は二人の裸と共に、目付の男を沼田の中に押込みながら、爪先上りの一間巾位の道をトントントンと駆出した。俄に険しい坂路になつて来た。一丁許り進んで息も切れむとする時、又もや三人の男現はれ来たり、

「ヤア待つて居た良い所へ来た、俺はウラル教の目付役だぞ」

音彦「ナンド、ウラル教の目付役とな、ゴテゴテ吐すと爲にならぬぞ、スツコメ

スツコメ」

目付「此處はどこだと考へて居る、小鹿峠の四十八坂の一つだ。これから先へ行けば行く程、路は峻しくなつて来る、ウラル教の目付は數百人、手具脛ひいて貴様を待つて居るのだ、あれ見よ、後からは澤山の捕手があの通りやつて来る、先には澤山待構へて居る、グツグツ致すより、態よく俺に降參致して、吾等の手柄にさして呉れ、冥途の土産だ、キット極樂へ陥落するだらう」

音彦「エー面倒だ、モウ斯うなつては善言美詞もあつたものぢやない、一つ大法螺を吹いて驚かしてやらう……この方こそは閻魔の廳より現はれ出でたる良彦

の大神だぞ、失敬千萬な、三五教の宣傳使とは、何と云ふ見當違な事を申す、この方が一つ四股を踏めば、小鹿峠は瞬く間にガラガラガラ、左の足をドンと踏み鳴らせば、貴様の様な端下人足は千人萬人一度に風に木の葉の散る如く、中天に舞上り、バラバラバラ、泥田の中にズツテンドウと眞つ逆様だ」

彌次彦「天から降った神の彌次彦さまだ、裸百貫と地上の奴は吐せども、俺の力は百萬貫だ、二人合して二百萬貫、サアどうぞや、右の足で四股を踏まうか、左の足で踏まうか踏んだが最後、小鹿峠は岩で卵を碎くやうにガラガラとも、メチヤメチヤとも言はず、ピシヤリと葱のやうに平茶張つて了うぞ、それでも貴様は合点か」

目付「ヤアヤア大變な豪傑が來よつたものだ、オイオイじつとしたじつとした、足を動かすな、歩くのなら、さし足だ、ぬき足だ」

彌次彦「一つ四股を踏だらうか」

音彦「ヤア待つた待つた、危ないぞ危ないぞ、後がないぞ後がないぞ、ハツケヨイヤ、ハー」

彌次彦「アハ、ハ、ハ、ハ、日の下開山蛇塚蛇五左衛門、横綱張つた摩利支天の再来だ、ア仕方がない、貴様を助けるためにソーツと歩いて行つてやらう、有難く思へ……」

と三人は態と、ノソリノソリと登つて行く。前方よりは數百の人数、手に手に柄物を携へ下つて来る。後方よりは又もや數十人の捕手刻々に近付いて来る。一方は屏風を立てた様な岩壁、一方は千仞の谷間、進退維れ谷まり、逃げるにも逃げられず、

「エー仕方がない、モウ斯うなる上は、破れ被れだ。サア來い勝負」

と三人一度に拳骨を固め、捕手の中に暴れ込んで當るを幸ひ擲り立てる。數多の捕手は群り來つて、今や三人を捕へむとする時、三人逃路を失ひ、一二三つの聲もるとも、決死の覺悟で谷間を目がけて飛込みたり：その途端に驚いて目を開けば、瑞月は高熊山の巖窟に横たはり居たり。二月十五日の太陽は煌々として中天に輝き渡りける。

(大正一一・三・二一 舊二・二三 松村眞澄録)

信天翁（三）

神がおもてに現はれて

善神邪神を立別ける

この世を造りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

世の過失は詔り直す

吾神國の御教は

顯幽神の三界の

過去と未來と現在に

一貫したる眞象を

うまらに具らに説き明かす

三五教の御ン教

神の御言をかしこみて

朝な夕なに述べて行く

清き靈界物語

種々雑多と批難して

智者や學者と自認せる

或種の人は口々に

山子上手の瑞月が

百科全書を讀破して

それを種とし神言と



偽り作りしものなりと 中傷するこそ賤らしき

心ねぢけし人々の 如何でか尊き大神の

神慮を悟り得らるべき 慢神するも程がある

百科全書を抜いたとは どこを押したらソナナこと

言はれるだるか世の人を 盲者にしたる曲つ神

呆れて物が言はれない たとへ靈界物語

神の作りしもので無く この瑞月が頭から

ひねり出したり百科全書 暗記して居て諄々と

述べたとすれば神よりも この瑞月は偉いだる

釋迦も孔子も基督も そのほか諸々の宗祖等が

成し遂げ得ざりし大著述 一千二百五十頁

僅三日に述べ終る この速度が如何にして

古今の著者に出來ようか 解らないにも程がある

變性女子の調べたる 大本神諭は大開祖

書かせたまへる綾錦あやにしき 光も強き絹絲ひかり つよ きぬいとに

紡績ぼうせき絲も混入こんにふし 劣等れつとう絲とせしものぞ

元の筆先ふでさき調べむと 鼻はなたかだかとうごめかし

その實地じつちに突當つきあたり 錦にしきの絲いとの原料げんれうは

桑葉くはなりしに膽潰きもつぶし アフンとしたる其上そのうへに

變性へんじやう男子なんしの筆先ふでさきも 女子によしの作つくつた神諭しんゆも

薩張さつぱりあてに成ならないで 信用しんようせないが良よからうと

自己じこの不明ふめいを觸ふれあるく 珍めづらし人ひとの言葉ことばだる

ア、惟かむながら神々々かむながら 御靈みたま幸さちひましまして

一日ひとひも早はやく片時かたときも 疾とく速すみやけく迷雲めいうんを

晴はらして眞如しんによの日月じつげつを 迷まよへる人ひとの心天しんてんに

照てらさせ玉たまへ惟かむながら神かみの御前みまへに願ねぎ奉まつる

ア、惟かむながら神々々かむながら 御靈みたま幸さちひまませよ

今いま大本おほもとにあらはれた 變性へんじやう女子によしは似に而非せものだ

誠まことの女子によしが現あらはれて やがて尻尾しつぽが見みえるだろ  
女子によしの身魂みたまを立直たてなほし 根本こんぽん改造かいざうせなくては  
誠まことの道みちはいつ迄までも 開ひらく由よしなしさればとて  
それそれに優まさりし候補こうほ者を 物色ぶつしよくしても見當みあたらぬ  
時節じせつを待まつて居ゐたならば いづれ現あらはれ來くるだろ  
みのか尾張をはりの國くにの中なか 變性へんじやう女子によしが分わかりたら  
モウ大本おほもとも駄目だめだらう 前途ぜんとを見みこして尻しりからげ  
一足ひとあしお先さきに参まゐりませう 皆みなさまあとから緩ゆるくりと  
目めがさめたなら出でて來きなよ 盲目めくら千人せんの中なかの  
一人ひとりの目め明あきが氣きを付つける なぞと慢神まんしんしてござる  
王仁おにはこの言こと聽きくにつけ お氣きの毒どくにてたまらない  
こんな判わからぬ奴やつばかり 盲目めくら斗ばかりがささやけり

この歌うたを各自かくじの事ことに誤解ごかいして

罪つみを重かさぬる曲人まがびともあり

(昭和一〇・三・三〇 王仁校正)

〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵

靈界物語 第一三卷 如意寶珠 子の巻

終り